

出発。一人残った弟は恐ろしさを知らず水の誘いにソロソロ、段々と深い方へ近づいてしまい、とうとうブク、ブク、フワリ、フワリとなつてしまいました。あの時兄達の帰りがもう少し遅くなつていたら今日の私は……

それ以来私は終に泳ぎを覚えることが出来ません。未だに金槌であることは、他のスポーツは何でもやれるのに残念なことです。

又何時の日でしょうか

兄に伴はれて川原を歩いていました。途中弟は便意をもよほして来ましたが、紙は持っていないしと兄の困っていることに関係なく、弟の自然現象はますます進行して悲痛な顔色を呈したことでしよう。兄も弟も困った。然し出もの、はれもの、何とやら意を決して兄は石原への投下を命じたのはよいが、どうしても後始末に困まつた。

暫し思案の末、兄貴は矢張り年上、程よい石コロを探して来てお尻の始末をしてくれましたが、我慢の極限から開放された安堵の気持とその石コロの生温い感触。約半世紀を経た今日でも思い出される一コマであります。

溺れた話は家に帰って報告したのかどうか今は亡き父

母が之を知っても問題はない筈ですが、石コロの一件は未だに我が家の思い出話の一つで、恐らく加藤老先生も当時フキ出されたお一人ではないかと思ひます。

父の魚釣

父は不器用で気忙しく又趣味の少ない人でした。その父も木曾川と云う絶好の環境に魅せられたのか、下手の横好きで流れに立ち込んで鮎釣を楽しんでいた姿が思い出されます。尤も非常に気忙しい性ですからズックリと浮子の動きを楽しむと云うことは出来ず、素ガケと云うのか強引に引掛けてとる奴です。

釣はノンビリした者よりセツカチな者の方がよく釣れるとか云う様ですが、それは餌を絶えず新しいものに代える方がよい為とすれば、父のはそれ以前のものであった様です。

その一つこんなこともありました。一匹づつも面倒臭い父は或時飛行場の油のしみこんだ手入布か何かを石油缶に何杯か持出して来て、漁火をたき不動山の沼で鰻やら何やらをバケツに何杯もとつて来て大騒ぎをしたことがありました。あの父の遊びごとならしい遊びとして未だ

に脳裏に浮ぶ一つです。

不動山下の沼は私の記憶ではとてもウス気味の悪い所でありました。あの水は湧水でとても冷たく、或る時陸軍の泳ぎ上手が物好きにもモグリの記録を立てようと勇敢にも飛び込んだそうです。然しとても冷たさに耐り兼ね鼻血を出しながら幾許もなく諦めてあがつたと云う話を、父から何度となく聞かされたものです。

今頃はもうなつてゐるものでしょうか。

あの沼は二度目の私の家からは木曾川を右にして学校へ行く途中の右側で、そこから少し行くと加藤先生のお宅、そして暫く行くと学校へとなつていた様に思えますが、もしそれなら学校への途中に不動山があつたことになりません。否不動山は学校の裏山に続いていて、つまり我が家からは更に遠方であつたものと思ひ直したり。遠い幼い日の思い出は、時も所も様々に継続します。

私の本籍は滋賀県の彦根市、父の勤務の関係で、兄は朝鮮で生れ私は所沢、弟は前渡生れ、妹は東北仙台で生れと全国を渡り歩いたことになりませんが、夫々の土地で色々な思い出はありまして、約五十年の長きに亘り御

厚誼に預つてゐます加藤先生との往來を通じての親しみ、懐しきは生活したこともない本籍地、父祖墳墓の地である丈の彦根の土地にもまして、第二の故郷としてマエドの響きは、終生私達からは消えないことと思われまふ。

おわり

前宮小学校での思い出 やら其の後の歩み

大正十三年度尋六卒業 小山 彦 憲

この度母校稲羽東小学校の、百年史を編纂されると云う心あたたまる御企画を拝し、幼き時代お世話になつた母校の同窓生の一員として、つたない覚つかない思い出を寄稿させて頂ける機会を得たことを感謝し、本書の編纂に御努力御尽力下さる関係者の諸兄に敬意を表し、喜んで拙文を寄稿させて頂きます。何分半世紀も前の思い出なので、年次、内容詳細は、若干前後錯誤もあるかも

知れませんが、ほんの思い出の骨子を綴らせて頂きます。

私は父の職業の関係で、尋常二年の時、埼玉県所沢の小学校から、前宮小学校二年生に転校しました。その時の担任の先生は丹羽貞子先生でした。転校当時は他校から来た人間と云うことで、なかなか級友の和の中に入れてもらえず、なじめなかったように記憶しています。最初のうち、住居は各務原の真中にあった旧陸軍航空本部補給部の事務所で、そこから原を越え山の峠を越して、通学していたので、尚更お友達もなく、孤独な日々でしたから、当時の不動山麓、木曽川堤べりの校舎は、今なおはっきりと目に浮び、校庭の一本杉も、なつかしい思い出として心に残っています。なぜなら孤独だった自分、は、不動山や堤、一本杉を、独りぼっちで、休み時間にさびしく、せめてもの無言の友として、いつもながめていたからです。でもだんだん月日がたつにつれて、お友達との仲間入りも出来、生来のやんちゃ坊も本来の元気をとりもどし、転入当時の孤独感もなくなり、みんなお友達になり、楽しい少年時代を過ごしました。

家も前渡の足立文司氏の「こうえ」をかりて住まうこ

とになりました。

さてたしか三年生の時だったと思う、小野木先生の体操の時間に、野球を紅白に分れてやっていた時、何かささない事から、級友の小島明一君と、殴るひっかく蹴るの、共に泣きながら派手な喧嘩を初め、野球をそっちのけでした、そうこうしてゐるうちに、遂に先生に見つかり、大目玉を喰い、校庭の真中に立たされ、昼の弁当の時間も、「ここに立っておれ」と叱られ校庭に立っていた。全校の生徒が弁当をとっているのに、二人だけは校庭の真中に、しょんぼりと立っていて、くやしさと悲しさが交々こみあげて来て、しくしく泣いていたことを覚えてい

る。

その後の始末はどうなったのか記憶にない。
もう一つの思い出は六年生の時だったか、加藤嘉雄先生が新しく赴任された年だったと記憶する。学芸会に「マリーの気転」と云うタイトルの劇をやった。その時のメンバーは、永井弘道君、長縄一郎君、日比野栄一君等の諸君と私と、たしか一年か二年後輩の、村山和子君と云ったと思う女性が一人混っていた。私の役柄は、私が逃げ廻ったフランス兵士に扮し、村山君がマリーになり、

そのマリーに匿まってもらい、この村山君のマリーの気転で追手から無事逃がれる、と云うシーンであった。単なる学芸会の思い出でなく、最も当時としては斬新的な革新的な就任早々の加藤先生の企画で、男子生徒と女子生徒との混成劇で専らの呼物だったと思う。おそらく前宮小学校では、男女混成劇はこれが開校以来嚆矢の事だったであらう。今にして思えば、女の子と劇をし就中女の子にかばってもらった役柄が、とても私にとって恥しかった事を一番印象深く思い出として残っています。

更に腕白時代の思い出に、毎年の春の楽しい遠足の前日、稲荷寿し弁当に使う油揚げを、川向うの草井へ岡田式という渡船で買いに行く途中、必ずと云う位草井の悪童達と川原で、何等理由のない喧嘩をした昔の腕白時代的一幕も、今から思えばなつかしい。

その後前宮小学校を出て、私は父の仕事の都合で宮城県仙台へ引越しました。仙台で仙台第二中学校に学び、中学を卒業し其の年宇都宮に移住し、年の暮大阪に就職が決り、旧陸軍航空本部大阪監督班に奉職した。在職中に支那事変で上海徐州漢口と中支方面に転戦し、途中戦争

たけなわな中に蘇州で、恩師で中隊長の加藤先生、大行李兵の私、所属部隊の異なる二人がほんの短時間ではありましたが、涙の対面をし共に武運長久を祈りつつお別れし、昭和十四年七月内地帰還、元の陸軍航空本部に復帰二十年八月終戦まで、軍の仕事に従事して来ました。

さて終戦後軍が解散されて職を離れてからの第二の人生たるや、波瀾万丈の人生でした。尤も必勝を信じていた日本人全体の、敗戦と云う歴史的な一大変遷だったので、勿論吾々一国民としては当然のことながら、一大変革の断崖に立たされて、全く将来の見通しを失いました。私もその例に違わず失望困却した一人として、当惑の極に達し、或しばしの期間は茫然として、空しい日が幾日かありました。然し当時妻子共四人の口だけは、一刻として猶子は許されず、何んとしても喰う事が先決、食うには自活の道を自らが作ることを考え、取敢えず一時的に、幸い戦争中軍が借りていた農地を引続き使用させてもらい、そこへ帰農することに決め、開拓入植者として原野の開墾、いも麦の栽培に従事することとした。これが全くの未知の世界で、素人としての素人考えの甘さで、

蒔けば生える、生えたら伸び成熟すると思ったのが、大間違いでした。種は蒔いたが全部必ずしも生えるとは限らず、生えるには生えても必ず実のるとも限らず、全く甘い予想はまんまとはずれ、思っていたような通りには生活は出来ず、あらゆる世間一般の苦勞以上の苦勞を、いやと云う程体験させられました。いも麦の栽培の一方土地柄葡萄の栽培に逐次転換し、数年後にやっとどうやら収穫、生活の見通しもつき軌道に乗り出し、当初のほんの腰かけ式の仕事も、土地に対する愛着と云うか、執着と云うか、自然本腰を入れることになって、土地も買取し零細ながら葡萄園を営むこととし現在に至っております。幸い今では男の子四人健在で、夫々各人別に個々の仕事についていますので、現在私は少しく健康は害していますが、細々ながらどうにか現住地に、永住的に生を保っています。

人生の起伏程不思議なものはないと、過去を顧みて今更のように思われます。

(完)

(大阪に住む)

平和なねがい

昭和二十一年卒業 酒井不二子

ある昼がりのことであつた。私は、リヤカーに米俵を乗せて、兄と新田の古川さんの前まで来た時、黒い高へのすきまから、光がさすようにラジオの音が聞えてきました。天皇陛下の声である。「あの声」戦いは終わったのでありました。

何が何んだか、その一瞬わからなくなり、淋しいような、生き甲斐を失つたような、私の頭の中は、ボカンとしてしまいました。嬉しいといって飛び上がる元氣はなかったことを、今尚、はっきり記憶しています。リヤカーを引く足もぐたぐたになり、米俵はよけいに重く、目の先がまっ暗になりました。

無条件降伏とは、むづかしい言葉でした。何んのことだろうと、当時五年生だった私にはまったくわかりません。私たち日本国民は、戦い抜くのだ、生き抜くのだと、

身も心も大和だましいで、それはそれは大変な勢いでした。

「国破れて、山河あり」。木曾川の流れも平然として、お不動山の木々も青々としていた。昭和二十年八月十五日、日本は敗戦国として、その第一歩を歩ゆまねばならぬことになりました。

思い出せば昭和十六年四月、前宮国民学校に入学し、その年の十二月八日、大東亜戦争が始まり、小学校時代を、戦争と共に暮した私でありましたが、そこにどんな人間らしい精神と生活ができるのですか。第一物資の減少と、食糧不足で、人が生きる一番大切な綱を切られ、精神のみは、世界中「勝るともおとらない」根性で、もちろん大人・子供を問わず、その環境は、現代人には想像もつかないものです。

身につける衣類は、国防色「黄土色」一色に塗りつぶされて、パーマネットもやめ、着物姿もだめ、モンペが初まった。

私は学校で勉強した記憶はほとんどないといっても決して過言ではない。学校のおひる弁当の時間、みそ汁の煮

干のなまぐさいあのおい、思い出すとなつかしい。部落ごとに分かれて、お母さん達が、大根、人参、里芋、野菜をとりどり持って来て、およそ四百人ほどのみそ汁をたいてくれました。麦飯に梅干の冷たい弁当に身をぶるぶるふるわせ、あたたかいみそ汁だけが、とても染しみなものでした。そんな心づくしも、子供達のすくすく育つ願いなのでしょう。

「親の心、子知らず」。親のありがたさも考えず、それほど勉強を頑張らなかつた私は、親不孝者でした。

その汁もただけの頃は、まだまだ平和でした。鉄製品が供出となりだし、火鉢も鉄びん、湯わかしなど、この家も国のためといって、みんな供出しました。

三年生頃になると、学校の校庭は畑になってしまいました。各務ヶ原飛行場の爆音が高くなりだし、防空頭布を肩にかけ、避難訓練が始まった。高等科の兄さん、姉さんたちが、こわい顔で叱りつけられる。無理な指導でもだれも小言などいわない。何しろ軍国主義なんだから、でもほどほどにしてほしかった。人間の本能的なものは抑圧してしまい、個人の尊重なんてものは、あつたもの

ではない。

B 29が無気味な音をたてて上空に現われ出したのも、この頃です。警戒警報、空襲警報の、サイレンの音は、今だに、耳の奥深くこびりついて離れない。

兵隊さん達が、校舎を宿舎にしておられたこと、廊下に鉄砲・背囊など、きちんと整頓されていたので、教育どころではなかった感じでした。

その一方子供は、食糧増産に励んだ。幸にしてこの地方は甘藷が特産地で、校庭をたがやし、木曽川岸の河原をたがやし、「ガチャン」と鍬の先に当る石の音も高く、元氣よく苗の植付けをした。夏の暑い炎天での草むしりなど、収穫までの手入れば、教科の時間をさいて、増産に力一杯働きました。牧田校長先生を先頭に、先生方生徒が心を一つにして、全力を注いだことは言うまでもない。その当時を、私と同年の人なら、誰れにでも理解できよう。

部落分団にわかれて、その甘藷を一握ぐらいの厚さに切り、むしろに一重に並べて、乾燥させて供出した。家庭に於いても、干甘藷を粉にひき、黒いこげ茶色のダン

ゴを、主食の足しにしてきました。あの味も、子供の頃の忘れぬ味の一つです。父達は、一反当り千貫収穫を目標に努力した、その苦勞は、その姿は、尊いもので頭のさがる思いでした。小麦粉とさつまいもの「おかき」又は、小さく角に切ったものを、お米と一諸に炊き込み、あの当時の人間の生活に、切っても切れない生き綱となつたのも甘藷でした。

時代はかわり現在では、加工してもあまり人が好まない。人工肉、人工甘味、化学食品がでまわる昨今では、まったく縁の遠いものになり、忘れ去られようとしていますが、私は忘れることができません。

軍隊に召集されて行く、近所の人々或いは兄達を送って武運長久を祈り、千人針を作ってあげたり、作文の時間は兵隊さんの慰問文ばかり、思い出は走馬燈のごとく、私の頭の中を通り抜けてゆきます。

今は亡き兄を送った日は、昭和二十年七月二十六日で、各務原飛行場が爆弾でやられ、長根山にも、直径十米ほどの穴が四つほどあいて、その破片が家の廻りまで飛び散り、拾ったら何んと草みに二、三杯ほどありました。

思い出と或る少女

昭和十二年卒業 坂井田八重子

「ザー」と云う音とともに、私は頭を両手でかかえこんで、防空穴に逃げ込んだのでした。兄は親に付きそわわて、岐阜駅あたりまで行った時のできごと、送別会のご馳走が、天井のほこりと、爆風で戸がたおれてめちゃくちゃになったことも、写真を見るかのように、はつきり思い出される。行かねばならない、国を守るため、万歳と両手を上げて兄を送ったが、たまらなく淋しかった。

夜になると、母は月を眺めて、息子の無事を祈っていた。いつも母は両手を合わせて、月にも、神仏にも、お祈りを続けていた。そんな姿も、この原稿を書くころとした私の目前にちらちら見えてならない。

今の世代に、あの当時の「母は強し」といった母は、どこにもいないと私は思う。戦争がもたらした人間性は、その時代に生き抜いた人でなければ、とうてい理解できないであろう。自分の両親をはめるなんて、笑う人もあるかも知れないが、人間同志の有り方をしっかり教育してくれた、父母に私は感謝して、父母のような人柄になりたいと、努力しています。

前宮尋常高等小学校。東に不動山を仰ぎ南に木曽の流れを眺めて其の学校に学びました。飛行機の爆音を聞き乍ら運動会に学芸会に、夏には七夕祭りといふ頃になつたらしい思い出の数々が臉の裏に浮びます。うれしかった事、悲しかった事、何もかもがなつかしい——の一語です。始めて迎える運動会でした。一年生のリレーで私の走る番がきました。バトンを受けて走り出してまもなく、一緒に走っていた子が「八重ちゃんまっとなって八重ちゃんまっとなって」と言い乍ら走って来ます。其の時運動場の円形のそばにいた男の子が「オイまっとなつたれ」といわれたので、待っていないといけないと思つたのでしよう私は止って後をむいて待っていました。突然周囲から、ワァーッと声がして私はウロ／＼していた。そんな時一人の男の子が私のそばへ来て「何やっとな、はよ走

らんか、赤がまけてまうぞ」といわれ早速かけだしたの
でした。「オイまっとつたれ」の面白半分の一言が、当時
の私の頭を混乱させ、思わぬハプニングでした。

なつかしく残る此の出来事を、近所の子供達が遊びに
来たある日話してやったのです。「おぼちゃんの一年生
の時よ可愛い話でしょう」と、子供のいわく「おぼ
ちゃんここ（頭を指さして）どうかしてたんぢやないの」
全く今の子供にはかきません。

又学芸会の時です。私の役は一休和尚でした。白衣が
ないので先生がたのんで下さったのでしよう。同年の常
貞寺の子武山秀道さんの白衣をかり、ハカマのかわりに
スカートをはいて一休のスタイルが出来上りました。一休
なる私が茶店でひと休み、ダンゴ（ミトラシ）を食べる
シーンでした。これが大へん、今では食べることもなか
何んでもない事ですが、其の当時ではマเนอร์だけでした。
それがダンゴを食べるシーンになって、ほんとうに食べ
よといわれたのです。私は恥かしくてたべられず、もし
／＼していました。しかし先生方の再三の注意に進退き
わまつて、ガブリと口に入れたのは良いのですが、さあ

五年生頃にも強く心をいためた出来事がありました。

其の時は或る程度の意味がわかるだけに、親によく事情
を話し絶対に正しいと動じなかったことでした。

今こうして私には暗くても想い出という形で残りまし
た。しかしこれがその時受けた心の疵を、いやされるこ
ともなく何んらかの形として表われていたとしたら、と
思う時、身の縮む思いがします。

先日も六年生の少年が友達がいちめる、其の上親もか
まってくれないからと、学校に放火した事件を新聞で見
ました。中学生の非行も多いと報導されてもいましたが
学生にとって何が大切なのでしょう。無学の私にはわか
りません。しかし、学校教育のありかた、家庭教育の必
要性などと色々さわがれている中で、親と子の肌と肌の
ふれあい、私には一番大切の様に思われます。こうした
親子の暖かいつながりが、やがて色々の面で表われてく
るのではないのでしょうか。

最近こんな事がありました。私の家の側が通学路にな
っています。毎日元気に通学する子供の中に、一人の女
の子（三年生）は、みんなとうちとけることもなく、後

大へん、喉につかえて目を白黒、大汗をかいたのです。
何時もの事乍ら子供達にお話をしてとせがまれては此
の事も話します。子供「おぼちゃんはおバカだね、タダで
食べられて、もうかるぢやないか」と、こんな言葉にお
どろく今のご時勢ですから。

明るい想い出ばかりではありません。入学してまもな
い頃のこと。ある出来事から上級生にいちめられるはめ
となり、それがやがて学校ざらいになってしまったので
した。年上と云うことで、いちめられる度にとってもこわ
くてブル／＼ふるえてよく泣いたものです。度重なる事
で学校へ行くのをきらい始め、その為に母の学校通いが
はじまりました。私の手を引いて一時間程授業を見て帰
る母の姿を見つけては、かけ出して家へ帰ってしまふの
です。泣いている時先生に問われ、事情を話す事も知ら
ずに頭がいたむから、ある時は腹がいたいからと、そん
ないつわりを口にしては早引きして行くのでした。こん
な私が普通の友と変りなく学業を修める事の出来たのも、
先生の又親、姉の暖かい心づかいがあったからと、感
謝で一パイです。

から黙々と歩いて行くのです。其の子の姿には暗い影さ
え感じられるのです。以前から目についていた私は、あ
の子を明るくしてあげることが出来たらと思っていました。
た。そんな或る日、其の子にニッコリ笑って見せました。
何んの反応もありませんでした。しかし私は続けました。
一人で帰る時には「お帰りなさい」。ある日には「お父さ
ん手帳なされたそうね」。又「お父さん退院なされたの」
などと言いつつ言葉をかけていました。其の内にその子
はニッコリ笑う様になり、そればかりか、だまつて頭を
さげたり「今日は」など言葉さえかけて来る様になった
のです。気のせいか明るさも出て来た様で、先日も友だ
ちと話をしながら帰る姿を見て、私はうれしくて其の子
をだきしめてやりたい程でした。複雑な家庭の子なので
す。暗い家庭なるが故に、子供らしい元気をなくした
可愛そうな女の子。でもその子が笑顔を見せてくれる様
になった。明るさも取り戻しつつある。変化しつつある
其の子を、今後もあたたかく見守って行きたいと思いま
す。そして我が家庭も大切に、今の幸福を感謝で暮らす今
日此の頃です。（愛知県一宮市北方町西本郷前在住）

小学生の思い出

昭和十五年卒業

佐々木テル子

(旧姓 加藤)

昭和九年国民学校児童の仲間入りをした私達には、大変うれしい思い出が残って居ります。現在の給食の走りでも申しましょうか。一年生の受持ちだった今なお健在でおおいでの石屋先生が弁当の時間になると、教室の後の方に小さなおけが居いてあって中より石を取り出して、細かくきざんだ大根や、葉っぱ、かぶらの塩づけを出して皆んな平等に配っていただき、私達はそれ／＼の弁当に此のおつけものでたのしいお昼を過ごしたものです。あの時のなつかしい味は四十才も中半を過ぎた今の年令に達してもまねの出来ない思い出の味です。

三年四年生を迎え戦争が始まり日本人の意気を見せるのだとがまん比べ等をして女であっても私達は寒い冬の間、一度もくつ下等をはかないで雪の中を走り廻ったものでした。又現在の所へ学校が移転する時等河原から石運び

をしたものです。今尾先生と言う小柄の先生で大きな声を張り上げる先生の指図で石を二個しか持てないと思っても先生の声について／＼三個だきかかえて、ずい分と学校迄往復したものです。

当時私達は村役場のつづきの教室で壁一枚へだてての教室で授業をうけて居りました。村の方が役場へ用事で見ると大きな声が教室迄つづぬけてした。其んな教室でも皆んな緊張して勉強をし小さくなった鉛筆でノートのすみからすみ迄一行も残す事なくぎっしりと書き其の書きつくした鉛筆の上にテストになると色鉛筆でかん字の稽古等をした記憶があります。

消しゴム等床の上に落すと小さな穴がたくさんあって、すぐ床板の下に落ちてしまい何度かくやしい思いをしたものです。五、六年の時だったと思います。現在の所へ学校がうつった時は広い運動場や、立派になった校舎をみつめ此の下には自分達の手で運んだ石が一杯入っているんだと思うと感無量で落成式に参加したものです。

此の運動場でワラジをはいて自転車チューブを切った作ったゴム飛びひもで思い切り飛び廻ったのも三十数

年前の事となつてなつかしさ一杯です。思い出せば次から次へとつきる事がありますが今我が子に此の様な思い出をなつかしがって話し聞かせても決して信じてくれない事ばかりです。

今では校舎も設備も時代の流れに順応して世が世なれば本当に幸せ一杯の環境の中でのび／＼と教育をうける事が出来る現代の子供達は此の上なき幸せものだと思えます。此の子達に私達がいだいた思い出等いだけせない様な此の平和の世が何時迄もつづく様に祈って止みません。

東町在住

先生の思い出

昭和二年

仙石武雄

私は小学校卒業後、兵役で満州に出兵、昭和十一年に帰還し、名古屋陸軍造兵廠に勤務中翌十二年八月赤紙で召集、九死に一生を得て終戦となり現在那加大東町に住

んでいます。

前宮小学校が誕生して百年と云う記念すべき世紀の事業に、百年史編纂委員会を結成され、人間なら白寿の祝も過ぎて百才の年を迎えるわけで、誠に目出度い限りで欣快に堪えません。この感銘深い良き年に浅学菲才の身なれ共百年史に一筆啓上致します。

百年広大無辺の宇宙から見たら瞬間の出来事でしよう。しかるにこの百年の歩みはさまざまの変動が繰り返され幾多の試練を克服して、今日の比類のない飛躍を続けて来た前宮村は、常に先覚者のたゆまぬ努力により産業経済文化の近代化が進められ名声を高めたのである。誰でも自分が生れ育った郷土は常になつかしく回想するもので、特に多感な少年時代の思い出には、ほほを紅潮させる場面もしば／＼あり、中には面白くおかしく誇張して語る落語家気取りの人もあり、とかく古い話は興味深いものである。私は下切で生れ今より以上に清らかな木曾川のせせらぎで魚をすくい、むせ返る様な夏草の中で虫を追って飛び回った。近代社会の公害交通事故と云う魔物は存在しなかった当時は、人情味豊かな土地で伸

びく／＼と育ち小学校に入学しました。当時は石屋良仙先生でした。只今では近代的設備と常に栄養に注意した学校給食がありますが、其の当時は先生以下全員持参の弁当に梅干一個文字道り日の丸弁当で、冬は寒さにふるえながら一団となって食べたその味は又格別で、今の山海の珍味も及ばぬ。粗食でしたが元気に通学しました。加藤嘉雄先生の時理科の時間に、焼物の講議中九谷焼も其の一つですが、他にどんな焼物があるか？不意に質問された時も、私は居眠りの最中で焼物／＼とかすかに聞き思わず焼芋ありと答えた。全員大笑い赤面面目此の上なく、今でも背筋がぞうつとします。総ての交際は質問と解答の表裏であり、常に立派な解答の出来る様に心掛けて来ました。遠藤亮一先生の時、体操の時間に整列が悪く大きなビンタを頂きました。腹が立ってむか／＼して居りましたが、十日程過ぎた頃突然高熱で苦しかった時、先生が自転車に乗せて自宅迄おくって下さいました。実に喜しかった。人の親として子供の教育には厳しい中にも優しく慰める事が大切と痛感しました。丹羽久克先生は、算数の時間に机の並ぶ順に一問づつ解答する事に

なつて居ります。少しでも恥はかきたくないので順を計算して当る問題の前後を特に調べて待つて居ると突然大きく順の入れ替があり、サア大変うろ／＼全く虫の好かぬ意地悪ぢいさん不満満々でした。世の中総てが計算通りに出来た物はない。計画の逆な事もしば／＼あり、茲に進歩発展があると確信し参考になりました。遠藤卓朗先生の時は、義務教育も終り高等科一学年に進級三ヶ月目に、先生の再三の説得も無にして退学しました。悔やんでも悔み足りない大きな悔を残しました。そして日常生活には絶対悔は残すまいと努力して来ましたが、振り返つて見ると、何等の形で多少悔が残ります。これが人間の欲望かと思うと情けなくなります。先生の思い出話の一端を申し上げ、花々しい学業生活でなかったが無事卒業社会人となりました。特に不思議な物語りがありま

すので茲に紹介して置きます。
時は昭和十三年三月末、中支の三州山山系の奥深い密林の中で、数日にわたる悪戦苦斗の最中、部隊を引きつられて来られた加藤嘉雄先生その時は中隊長
「ヤア仙石！達者だなア」

戦場では対面だけでとてもなつかしい感じ一ばい。それに上官から言葉をかけられたうれしさ。昼夜をわかつたぬ転戦で疲れきつてへトへトそれに食うに食なく、飲みたくとも水はなし。その時キヤラメル一箱をいただいた。

地獄で仏に逢うとか、阿弥陀如来の再現か真から出た「ありがとう」ことは僅かキヤラメル一個。これがどんなに嬉しかったか。その時その場面に遭遇しない私以外の誰にも恐らく想像がつかぬことでしょう。

腕白盛りの小学校の先生が、いつまでも教え児を可愛がつて下さると思うとこのご恩は一生忘れることができません。買えば十銭か二十銭のキヤラメル一個、金の問題ではない心の問題、百円持っていてもキヤラメル一個が買えない山の中の戦場。これこそ千万金に値するキヤラメル。貴重なキヤラメル。私一人で食べる訳にはいかない。戦友達にわけてやった。

「煙草も二人でわけてのみ」
の戦友の軍歌の文句そのままです。
物資豊富な近代の皆様方には想像もつかぬでしょう。理解もできぬでしょう。

「非運の谷底に落ちたとき、人の心の奥を知る」
「水々と病床に臥しているとき、健康の時の有り難さを知る」

「巨万の富を築き、我が世の春を歌う」人もあるでしょうが、私は今尚赤貧洗う生活ですが、先生から「最も高価な終生不変の人情愛情の籠った真心という宝物を授かり」木曾の川の水の如く清く美しく、延々として我が体内を流れて行くであろう無上の幸福を誌上で皆様にご披露いたします。

各務原市那加大東町六三の二在住

七十年前の小学校

武山 秀雄

(1) 卒業証書三枚

明治四十一年三月前宮尋常小学校を卒業した私のクラスは入学当初四年で卒業の制度です。校名も前渡小学校

が前宮小学校に改称されています。四年終わると向学心のある家庭は子供の意志によるが中屋か蘇原か鶴沼の小学校へ通います。貧弱村の悲しさ高等科がなかったのです。四年生が終ると尋常小学校の課程を修了せりという卒業証書をもらいました。すると六年生までこの学校で勉強が出来ることになりました。尋常科が六年制度になったのです。二ヶ年すんで尋常小学校六ヶ年卒業の証書をもらいました。今度はいよいよ中屋か蘇原行きかと思っている時高等科二年併設ということになりました。こうなると逆に中屋か蘇原へ行きたいなあと考えたことも覚えています。

高等科は義務教育ではありませんが家庭の都合で約半数が進学しました。ここで他村へ行っていた連中が帰校して高等科二年におさまりました。然しほんの僅か四五名のことでですから教室は一諸で二学級共同勉学でした。それで私達は第二回目の高等科卒業証書をもった訳です。所謂トップクラスを四年間やつたわけです常に随分威張ったものだと思えて居ります。

(2) 修学旅行

巡見街道を歩いて草井へ来るのです。

前野か飛保かあの辺でもう歩けないと落伍した一人が出ました。先生は人力車をたのんで乗せました。皆はやきますが歩けないから仕方がないと我慢して、よろ／＼の体で草井渡につきました。

川を渡って松林へ上るともう大へんな元気で家へ帰りました。汽車に乗った嬉しさ町の家並と店のならんでいること海が無限に広がったことだけは覚えていますから修学旅行の効果は十分あったものと思います。

前にも後にも聞いたことのない一泊の修学旅行をやった先生はさぞかし大英断であったとどんなに苦勞と心配されたことでしょう。同級生会合の都度に出る話です。

小学校入学当時は三十何名でしたが七十年経った今日残っているのは僅か十一名です。散る桜残る桜も散る桜。二月十五日百年史の関係上急に同級会を開きました。いつも必ず出席される方々も風邪やら神経痛やらで会合したのは僅か六名でした。

早速録音をたどって各自の思い出を綴って見ました。

四年生卒業まぎわに佐藤先生が名古屋へ修学旅行に連れて行ってくれました。

「泊りがけの遠足」といいました。先生の英断だったと思います。目的はこうでした。

一、汽車に乗せてやりたい。

二、名古屋の町を見せてやりたい。

三、海を見せてやりたい。

二十何人参加しました。コースは次の通り。

草井から舟に乗って黒田で上陸。

木曾川駅から汽車に乗って名古屋駅下車。

名古屋市内を徒歩で築港へ。

市内で一泊。

宿屋は佐藤先生のお知りあい二十軒の人名古屋へ出て旅館経営をしていられるが町名も旅館名も覚えてはいません。

始めての合宿で夜中くるうおどるで過してしまつたようです。

翌日は日の丸弁当をもらって名古屋駅（笹島駅といったようです）から一宮駅まで汽車に乗りました。一宮から

思い出の巻

一、野球について

永井

二、先生の名前

長瀬

三、運動会について

永井（主）

四、思い出

丹羽

五、忠君愛国の教育

田中

六、七十年前の小学生

武山

少年野球の始り。

永井 喜江

五年生の時、丹羽久克先生がこられて始めてベースを教へてもらった。その当時桐の木をけづったバットを先生が作ってきて軟球を一つ持って放課時間に運動場へ現われた。先生の打つ球を競争で拾うそれが受ける様になる。たまに打たせてもらう。投げるのを打つそれを探る。やつとチームが出来た。

投手 仙石 義夫

捕手

田中松太郎

投手 富樫団之丞

遊撃手

永井 喜江

一塁 丹羽 一郎

セクター

長瀬 信夫

二塁 武山 秀雄

レフト

永井 常夫

三塁 永井 主計

右翼手

松波市之丞

富樫の球は強かった。田中が二三度指を突込んだ。六年になって五年にもチームが出来、高等科になっても継続して練習したので他校試合はしなかったが相当上達した。それが後々迄も続いて後年他校試合に出て前宮は強いと郡内の評判となり、優勝したことも五六度はある。今も尚少年野球としては市内第一と呼ばれておる。

諸先生について

長瀬 信夫

随分大勢の先生に教わっておる。

村上元之丞先生を始めとして佐藤先生、丹羽久克先生、足立尚先生、丹羽弥曾市先生、村上忠左衛門先生、永井牛太郎先生、二宮友藏先生、清水たい先生其他、その中でも一番記憶に残るのは永井牛太郎校長先生である。永井校長は九年間の任期中に学校の整備は申すに及ばず村の文化向上に迄、骨を折られた名校長であつた。特に私達は四年間教えてもらつて社会へ出てからも先生の教訓がしみ／＼と身にしみて有難いと思つておる。

運動会について

永井 主計

四年の時今日は運動会に行くんだと佐藤先生に引率されて各務原へ行つた。その当時二十軒に鶴沼の分校が

あつた。その分校と合併して運動会を行つた。運動会とはいつても兎とびと旗取りとアレイ送りにマラソン位であつたがこれが他校の生徒とやるのだから愉快で楽しいことお話になりません。

五年生になつて永井校長が来られて自分の学校での大体的運動会が行われ児童だけでなく保護者も青年も共に走り共に踊り村を掲げての運動会となつた。

明治四十五年卒業名簿現存者

名古屋市中区正木町二ノ三三	丹羽 宗五郎
中區栄町五丁目七ノ二六	永井 喜江
瑞穂区宝田町二ノ六	永井 常夫
中區千代田町一丁目一一ノ二七	永井 操
各務原市各務原駅前	永井 主計
京都市中京区三条大宮東入	丹羽 金司
江南市草井小朴字中島 和夫方	田島 すすの
犬山市練屋町 岡部益衛方	岡部 さわ
各務原市那加野畑 牧田 樹方	牧田 かしく
前渡東町	丹羽 一郎

各務原市前渡西町

長瀬 信夫

〃

田中 松太郎

〃

武山 秀雄

因に第一回卒業生

各務原市前渡西町

松波 政一

〃 東町

大橋 一重

〃

故人 村上 忠春

〃

佐々木 秀一

〃

山脇

〃

岩井 きし

「戦死した兄」

田中 正

オーイ 兄貴、どこへ行く。心で叫んでみても、ふりむいてもくれない。なんにも 答えてもくれない。俺は、淋しいんだ。ただ、ひとりの兄貴じゃないか。たとへ、夢の中でもいい、タァーヤンと呼んでおくれ。

ナァー 兄貴、俺は喜ぶぞ、きつとなや。

あやー そうだったなあ

兄貴は、昭和二十年八月十九日、北支派遣第一四七九部隊に属し、お国の為に戦死したんだったなあ。今ここに、振返ってみれば、昭和十八年三月一日だった。あの日、前宮国民学校校庭に五人の出征兵士がならんだと思う。俺はあの当時小学生だった。兄貴は代表で元氣に行つて来ますと挨拶した。

日の丸の旗を肩にきりつと結んだ兄貴の姿だった。万才々と村の人達に見送られて別れを告げて、岐阜四部隊に入隊した。

そして、三月十三日、戦地に向つて出発した。その早朝、父母共に四部隊に駆けつけた時には、早やすでに出発始めていた。万才々と歓呼の声、渦まくなかを兄貴は、どこにいても、無中で捜してみつけた。其の時、兄貴は、並兵で銃をかついでいた勇ましいその姿今まだにあの日の事が俺の胸にくつきりと浮んで来る。

兄貴達の足は早い、俺はころがるように走つてついていった。どこ迄行つても旗の波、万才々の声に見送ら

れ北一色を通り岐阜柳が瀬から凱旋道路にでて岐阜駅についた。全部隊が構内へ流れるように入っていった。其の中の一人が兄貴と思った時、元気で手柄立てて帰って来ておくれと俺は心の中でこう叫んだ。それから毎日のように便りの来るのを待っていた。やがて便りは来た。昭和十九年十一月一日、三ツ星になったと嬉しい便り、それから、昭和二十年六月二十日、兵長に進級と重ねて嬉しい便りだった。

やがて内地も空襲々々と深まるにつれ職場も戦場に名古屋に敵機来襲と来た。無数の照明弾が名古屋の上空を真昼のように町を照し、その中に爆弾投下町は一瞬に火の海、高射砲はB29目がけ一機二機とB29は三ツにも四ツにもなってバラバラ落ちて来る。本当に恐ろしかった。やがて岐阜、昭和二十年七月十九日一宮、同七月二十八日、爆弾の音が地ひびきして来る。町は焼ける。あの当時は本当に生きてる心地がしなかった。

そして、原爆が落ちたと聞いて間もなく思いがけぬ「八月十五日」敗戦となってしまった。涙と共に悔いの心の中では、兄貴の帰りを待っていた、だが、いつしか兄貴

は、もう帰らぬ人となってしまっていた。でも兄貴、喜んでおくれ、兄貴の最後を見守って埋葬迄して下さった、お方がある。北支の戦線で兄貴の班長であった、桜井軍曹（東京の方）殿だ。話しはこまごまと聞いた。兄貴の最後は、昭和二十年八月十六日、早朝。兄貴達の部隊に敗戦の報がつたわり共産軍につけばよし、つかねば営内を脱出せよとの命令が下り分隊分隊に分れて脱出し山又は川と樂県へ向っていた途中、四方の山々から匪賊と共産軍の一斉射撃にあい、十八名の戦死者を出した。その中の一人が兄貴と聞いた時には、子供ながらに俺はがっかりした。

おやじも戦争の始から銃後の守りをと無中に頑張っていた。シベリヤ戦に従軍した兵隊だから、「おれにも召集状がこんな。おれも征きたい」と口くせのように言っていた。

「教官殿」とあだ名をもらっていた。母の言葉をかりていうなら「兵隊キチだ」兵隊のことになると、どんな仕事の途中でも行ってしまう。除隊後から終戦まで三十九年位かな、薬師の庭で青年に銃剣術を指導し、青年学校

ができてからは指導員として、軍事教練を担当したということである。

教官殿の長男として恥かしくない戦死をとげてくれた兄貴だった。

兄貴！異国の草葉の影から、常貞寺の石碑の下から見えておつてくれ。お前は今、きつとおやじの懐の中にとびこんでいるだろう。母はよばよばながら長らえている。俺はお前の分まで「おふくろさん」を大事にするから安心してくれ。

兄真佐衛の辞世（戦死を覚悟していた）

ふるさとの

矢熊の山に たわむれし

兄はかえらぬ

靖国の神

国のため出征ゆく兄の面影を

険にうかべ 今日も語りぬ

思い出すいつかこの世の人でなし

兄は帰らぬ嗚呼父のもと

故郷の四方の山川変らねど

兄は帰らぬ嗚呼母のもと

過ぎし日の戦のなまり今はなく

曠野の果てに兄の面影

（妹とし子）

思い出の一端

明治四十三年尋常科卒業 田中松太郎

前宮尋常高等小学校で学んだ八カ年間を通じて、一番印象に残っているのは何と云っても「三大節」その儀式の荘厳さでありました。

まず式場作りから始まります。その前日二教室を全部片付けて取り外し大掃除をします。もちろん上級生の手でやるのです。

当日は校門に国旗が立ちます。児童は全部袴着用です。児童の入場がすむと校長先生の案内で村長さんを先頭に

村の有力者が来賓席につかれます。

「氣ヲ付ケ」の先生の号令が式場に流れます。

オルガンがなりはじめます。「君が代」の斉唱です。

式場は水を打ったように静まりかえっています。

校長先生が、御真影奉安所のお屏をお開きになります。その音が「キキキ」と響いて、何とも言い得ぬ神秘的な感に打たれ厳肅そのものであります。

「最敬礼」

次に校長先生が教育勅語を恭しく取り出され

「朕惟フニ我カ皇祖祖宗……」

と朗々たる奉読に全員虫の息も殺して拝聴します。

「最敬礼」がすむと、ホッと一息入れます。

その佳日に因んだお話があり、お客さんが退場されると児童の緊張がゆるんで、さわがしくなります。

紅白のお祝饌頭をいただいて帰宅することは何よりも嬉しかった行事です。

明治四十五年三月に高等科を卒業したその七月三十日世界に英名を轟かされた明治大帝陛下が御崩御遊ばされ、国民斉しく諒闇に沈み明治聖代も茲に終止符を告げ、大

正の御代を迎えた私共のクラスは、この大局面の年に、八か年の国民教育を終えたことも亦忘れられない思い出の一つであります。

次の思い出は日本国家の一大事である日露戦争勃発の年に入学し、四年制度の義務教育が六年制に延長になり続いて高等科二年の併設によって、そのまま同じ学校で勉強ができたことは、歴史的な文化推移に恵まれた恩沢であります。殊に五年生になる時、永井牛太郎先生が校長として赴任せられ、卒業するまで連続四か年尚青年夜学で社会教育を親しく教わったので、師弟の縁が一層深まり、偲べば偲ぶ程先生の高潔な人格と、指導力の偉大であつた事を痛感せずには居られません。

明治時代の教育はいうまでもなく、忠君愛国の精神を涵養し、善良なる国民を養成するにありました。従つて牛太郎先生は善良なる村民を育てることを目標とせられ尚中堅たるべき人に成れと激励せられ、常に次の訓示を与えてくださいました。

一、自己の利害に偏せずして力を公益世務に尽せ。

一、毀譽褒貶にこだわらな。

一、正しく強く生きるべし

一、勤勉たるべし

一、謙譲を旨とせよ

人多き人の中にも人はなし

人となれ人 人となせ人

朝起きる家に朝日がさし入りて

貧乏神の居どころもなし

為せば成る為さねばならぬ何事も

成らぬは人の なさぬなりけり

右座右の銘とすべしと。

先生のこの教訓が私共のクラス全員によく徹底したのか、心底にこびりついたのか、夫々の個性を活かして、先生のご期待に添うべく努力したせいか、郷土を護る中堅と認められ、生き甲斐のある一生を送った者が多いことはクラスの誇とするところであります。

卒業後郷土に踏み止まった者が八名あります。その内村議会議員二期二名、二期二名、町議会議員六期で現在も市政に活躍中の永井主計君、常貞寺住職五十年勤続その間法中及び仏教会の重役を歴任して今尚鑑録（かく

しゃく）たる雄姿の武山秀雄君その人です。次に私奴は九子の七男末子として此の世に生を享けました。永井先生の教訓を胸にだきしめ、志を立てて郷関を出ずと覚悟をきめました。家庭の都合上許可されず、農業に喰いさがりました。大正十一年分家して専ら養蚕に熱中し研究を重ね多収穫を目標に努力しました結果、昭和六年には四回飼育し年産二一五メ（八〇〇キロ）を収獲し、前渡一番と謳われた時、「勤勉たるべし」の訓にお報いできたような気がいたしまして喜びを感じました。

爾來農業会（現農業協同組合）織物界を始として、各種公共事業に村の中堅として選ばれ、微力ながらそれぞれの責任を大過なく果させていただき、余世を盆栽やら庭木やらに鉢を入れて楽しい日送りをいたしております。これ皆私の力ではなく恩師永井牛太郎先生の真剣な教育をいただいた賜と深く感謝申しあげております。

恩師を讃え謝恩の一端を述べるために、自分達の足跡を引張り出して卑劣とは存じますが、読者各位に幾分なりとも参考になるならば幸甚の至りでございます。ここに改めて散文乱筆を謝します。

了（在校下）

記憶の中から

昭和三十六年卒業 田中三代司

母校が創立百年を迎えるということは、大きな歴史だ
と思う。日本の維新以来の発展の原動力が教育行政による
所が大なることを思う時、百年の重みをひしひしと感じ
るのである。今や日本の義務教育の就学率は99・9%に
達し、英国の99・8%と共に世界の群を抜いている。今
なお世界の国々の中で六割の諸国が、文盲率が50%を越
えているという現状からかんがみて、創立百年という歴
史は、我ら卒業生が世界に誇るものと言っても過言では
あるまい。百年、と言えば、第一回の卒業生の生存者が
あるならば百数才ということになる。それに比べれば私
の二十余年の生きて来た年月などひとたまりもない。大
先輩諸兄の中に私のつたない文を投稿するのは甚だおこ
がましくも思えるのだが、私は私なりの小学校時代の幾
つかの思い出がある。記憶の糸をたどりながら、その思

い出が現在につながっているものを二、三書いて見たい
と思う。

◎修学旅行での失敗

私は今、東海道線で京都から三十分ほどの距離にある、
滋賀県守山市に住んでいる。今でこそ、気軽に京都の街
を歩くのだが、初めて京都の土を踏んだのは小学校の修
学旅行の時である。どこをどう回ったかは全く記憶にな
いが、毎年、観光シーズンになって、京都の街角に修学
旅行生が溢れる季節になると、決って思い出す一つの失
敗談がある。

奈良の若草山へ登った時のことである。この山は三笠
山とも呼ばれ、頂上まで登ると、もう一つ山が見える。
更に二つ目の山を登りつめると三つ目の山が立っている
のである。私たちは若草山の麓で自由行動をとることに
なった。若草山の中腹まで登った時、誰かが「一番上ま
で登っても良いぞ」と言った。実はそれは、一つ目の山
の頂上まで、という意味だったらしいのだが、私と数人
の者は、それを三つ目の山の頂上まで、と感違いをして
しまった。二つ目の山を越え、三つ目の山の頂上まで出

てしまったのである。数人の友のほかは誰も後について
来ない。内心、チョッピリ不安になりながらも、きつと
みんな疲れてしまつて、途中で止めてしまつたのだな、
と早合点して登つたのである。

その頃、麓では次の目的地へ行くべく、召集がかかっ
ていたに相違ない。しかし、呼べど叫べど、私たち数人
の者だけは帰って来ない。言わば、行方不明になつて
いたのである。そんなこととはつゆ知らず、私たちは悠
々と山頂で一休みした後、呑気に鼻歌まじりで麓を目指
して帰って来たものだから、最初の山の頂上に着いた時
下では他の級友たちが整列しているのを見てビックリ仰
天。あわてて山を駆け下りたものである。

シマッタノと思つた時はもう遅い。後で聞いた話だが、
我々数人のそうした行動によつて、その年の修学旅行生
は、東大寺の二月堂及び三月堂の見学は、時間がなくて
中止の止むなきに至つたとのことである。

寺院を歩くのが趣味となつた今の私は、しばしば京都
や奈良を歩く。三月堂の、あの、おらかな日光、月光
両菩薩を見ていて、自責の念にさいなまれながら、ふつ

と小学校の修学旅行での失敗を思い出す。今も、奈良へ
行きたい、という友があれば、せめてもの罪ほろぼしに、
余裕のある限り、進んで案内役を引き受けたい、と思つ
たのである。

◎工作の時間の思い出

小学校の四年の時だつたと思う。図工の時間に紙粘土
で花瓶を作ることになった。元来不器用な私は、どうも
この工作というものが苦手で、その時も、級友が、カッ
コ良い。花瓶を作るのを横目で見ながら、いつまでも、
何を作つたら良いものか、思案に暮れていた。そのうち
に時間はなくなる。級友の作品がどんどん作られてゆく
半分ヤケになつて私は持つて来た牛乳壺にありつたけの
紙粘土をくつつけると、机の上で、それを横にしてゴロ
ゴロと転がし始めた。つまり私は、丸太棒のような花瓶
を作り始めたのである。その丸太棒に、指で二、三ヶ所、
チョンチョンと凹みをつけ、絵具を塗り仕上げをして、
ハイ出来上りという訳である。そんなものだから、他の
者と比べて甚だ見劣りがする花瓶が出来上つたのは言う
までもない。

みんなの作品が仕上がった時、一つ一つ先生の批評を受けるべく、教壇の前の机の上に並べられた。中で一きわ不格好で大きな私の花瓶は、見すばらしく目立っていた。正に穴にもはいりたい気持ちであった。順に先生の批評を受けて、遂に私の作品が先生の手に取り上げられた時、私の顔は恥ずかしさで耳まで真赤になっていた。ところが、教室の片スミで小さくなっている私の耳に届いたのは、驚いたことに、先生は、その作品を誉めちぎる事なのである。

これは個性的なユニークな花瓶だ。花瓶のイメージを破っている。第一、牛乳壺の原形を全く留めていない点が良い。(他の級友たちの作品は例外なく壺の原形を留めていた)そして、何よりも、指でつけた凹みは何ともいえぬセンスがある。等々。半分ヤケになって作った花瓶であるだけに、ほめられようとは夢想だにできなかった。(今現在、それらの作品があったとしても、私は自分の花瓶を見すばらしく思うだろう)それだけに、益々私はぞくぞくとした気持ちになったものである。

その後も時々私は似たような経験をすることがある。

小学校時代、今一つ忘れられないもの、しかも、最も私の記憶に残っているのは、学級新聞の発行である。五年生の二期の頃だったと思う。ガリ版刷りの学級新聞の発行を始めた。内容は幼稚なものであったが、春、夏、正月の休みを除いて「毎週新聞」の名の如く一度も休刊することなく、毎週発行し続けたのである。私と松波幸正君、後藤政博君がその刊行の主なメンバーで、毎週新聞は小学校を卒業する、六年生の三月まで続いたのである。号数にすれば数十号を数えるのではないかと思う。新聞の発行の為に、私たち三人は休みという休みを潰した。遊びたい、という気持ちより、発行する喜びの方が大きかったのである。束縛されて苦しかった、などという思い出はつゆほども残っていない。二十号、三十号と号を重ねると、途中で止める訳にもゆかなかつたし、又、止めようなどと思う気も全くなかつたと思う。

どんな内容の新聞を発行していたか、記憶は定かではない。それはさておき、どんな未熟なものであったにせよ。それなりに懸命であっただけに、その後の私の青春の中で、この二年近い間の、週刊新聞の発行は非常に大

自分では納得できなかったり、甚だ不満であったりしたものが異常に好評を受けたり、他人に認められたりするものである。高校時代、新聞部に所属し、論説を書くことになって途方に暮れ、それでも締切り間際になって、あわてふためいてやっと書いたものが、先生からも生徒からも絶賛されたり、「おまえなら会長でも出来る」と言われて、ふともらした、「やって見ようかな」という言葉が十日後には真実になって生徒会長に選ばれたり、つい先日「応募者全員に参加賞」との歌い文句につられて応募した原稿が、原稿審査にパスして、京都府や近畿放送等の主催する第14回青年弁論大会(S46・11・19)に出場したりした。ちなみに、弁論大会の弁士募集のポスターを見付けた翌日が原稿締切り日で、その原稿は締切り当日、あわてて書いたものであった。

そんなことがある度に、あの幼い頃の花瓶製作のことが、妙に頭の中に浮かぶ。他人に認められることの、むしろ怖さを、つくづく感じるようになった今日このごろの私である。

◎学級新聞の思い出

大きな影響を与えたのである。現在、稲羽中学にも新聞部があるとのことだが、この第一号は、私が中学の生徒会の仕事をしていた時に発行したガリ版刷りの生徒会新聞であるし、高校へ行って学校新聞にタッチするようになったのも、小学校の時の経験からである。しかもその時、新聞部の人間だから、と推されて生徒会長までやったのも、源をたどれば小学校の頃まで遡らなければならぬ。更に今では、そのお陰で「書く」ということを億劫がらなくなり、気楽に文章が書けるようになった。朝日、読売、毎日、サンケイ等の全国紙を始め、各種の新聞、雑誌等にも私の文章が活字になって時々掲載されるようになった。小学校の時には思いもよらなかったことである。縁とは不思議なものである。

なお、先年、五十六年の二ヶ年を受け持って頂いた石田先生をお訪ねした際、その、何十号もたった学級新聞が今だに先生の所にきちんと大切に保管されているのを知り、有難いな、と思うとともに、この師あればこそと感慨を新たにし、しみじみと感謝したことである。

正三昭クラブの歩み

大正三年三月卒業

富樫源十郎

昭和の初期私達卒業生が一人前の世帯持ちに成った頃恩師故丹羽久克先生を招いて一席を催した。其の席上にて大正三年小学校卒業生である事から大正の正と三年の三と昭和三年と色々意味して正三昭クラブと命名したのである。併しながら其の間戦争中物資の不自由の時数年の間は己むを得ず中止をしたが、終戦後再び会合する事になり、岐阜の魚市場に行つて魚を買い、我々の手料理で私の家が会所となつて全員が一入の感に打たれて、喜びの酒を飲み交わした。一年一度の会合がどんなに楽しい事であるか、お正月を子供が指折数えて待つ様な無邪気さを味う気分は今一度子供時代に帰つて見たくなるのを禁じ得ない。

顧みれば古い昔の事、明治四十一年の四月入学して大正五年三月高等小学校を卒業したのは五十余年前の話である。卒業を記念するために記念樹として恩師故永田新兵衛先生のお宅蘇原坂井町より樫と銀杏の二本を大八車にて運び堤防下の旧校庭に植えた。現在は銀杏は枯れてなくなり、樫のみが大きくなり私達と共に元氣よく記念樹の役割を果たして居る。

私達が学んだ校舎は東濃のある養蚕共同飼育場の建物を移転改築したものと聞伝えられている。今なおある松の太木のある場所は昔の正門であつた。其の西には巡査駐在所があつた。其後はうつりかわりて昭和十三年には現在の大きな敷地に古い校舎を移転又は新築された。かくして卒業後六十年に近い間学校の移り変りを見守ってきた。

正三昭クラブの我々は幸に健康に恵まれて、卒業六十年近い長い歳月に、村内に止まった男は僅かに二人の友を失つたのみで現在十二名があつて常に顔を合わせて其の無事を喜び合っている。毎年の親睦会には手を取り合つて此の元氣な情態が何時までも続く様にと互に励まし

合っている。神仏に祈念する意味で秋の實のりの時期の

すんだ頃高砂旅行会と名付けて参拝を兼ねて観光旅行する事になり、数年前から実行に移している。彼の天下に誇る長島温泉がオープンした時に第一回を計画して、長島温泉に一泊名古屋御園座に観劇会を実施したのが旅行の第一歩であつた。高砂会の名の通り老人ばかりであるから現在健康なる夫婦組は成るべく多く参加するために農協に毎月旅行積立貯金を実施している。今まで実施した旅行は南紀勝浦温泉、浜名湖館山寺温泉、次に観光と参拝を兼ねて大和路巡りをして現在遠ざかっていた伏見

桃山御陵乃木神社檀原神宮等幾多の神社仏閣に参拝した。檀原神宮は紀元二千六百年記念に増改築せられて樹木も其の時植えられたのである。即ち昭和十五年であつた。我々正三昭クラブは十七年が四十二才の初老であつたので、其の年揃つて参拝をして四十三年には再度の訪れで、其の間二十五年程で太木となつて境内がなんとなく神々しく感じた。続いて江の島観光兼倉神社仏閣巡り、昨年は奥能登観光を計画したが農協の旅行が同一方面であつたため之に便乗して実施した。本年は関西方面を十月に

計画している。

我々は今年は七十才を迎える者と七十一才を迎える者とあつて昔なら長命である。けれども平均寿命は長くなつた今日ではまだお互に健康に充分注意して、九十九才の長命を目標に、一人でも多く一回でも多く、旅行を楽しませてくださいと神仏にお祈りし、旅行のプランもこれを加味しています。

(在校下)

思 い 出

大正十四年三月卒業

永田 静枝

(旧姓 丹羽)

今回私達の母校稲羽東小学校の百年誌の編集委員会が結成されまして、記念誌の原稿を卒業生から募集されるに当つて、寄稿のお勧めをいただいて心から嬉しく、拙い筆をとつて皆様方のお笑いを得るしだいでございます。

前宮村立尋常高等小学校当時のこととて、その施設等も今日に比べれば本当にお粗末でありました。

私達の在学当時は、家業のお手伝いを主としての学校教育が施されておりましたので、記録とてもなく、まして五十有余年前の記憶を呼び起こすことは不可能でございます。

ただ至極平凡に先生方の御指導によつて卒業をさせていただき、種々の学校行事には参加をいたしましたものの、その思い出も淡くとりあげて書くことのできないことを恥しく思います。

大東亜戦後は、幾多の教育界の変せんもあり、又、経済界を始めとする驚異的な高度成長の大波に押流されつづけ、歴史的な国を挙げての変動期を生きぬいて、六〇有余の今日までこれしましたことは、実に教育と健康の恩恵を回顧して感謝するばかりでございます。

現在は、家庭において孫達のよいおばあさんであるよう努めているしだいであります。

終りにあたりまして、委員の皆様のご尽力によりまして、立派な記念誌が編纂発行されて、なつかしい大勢の

年生は村上先生、四、五、六年は飯沼先生に担任していただいたものでした。

私等の幼い頃は、秋の校内運動会は十月三十一日の天長節祝日という日で、木綿の黒紋付の長い袖にむらさきのハカマをはいて、今はリレーといいますが私等の頃は走り会といっていました。今の若い人が見たらどんなに笑うかと思うようなかつこうでしたし、遠足も一年生で伊木山、二年生で持田の権げん山、五、六年生になれば岐阜城までみんな歩いていったものでした。六年生の時はじめて那加駅まで汽車がひけたので、関方原の古戦場を見学しに汽車にのって行きましたが、はじめて乗った汽車が西をむいていったので、五十何年たった今でも汽車にのると東へいっても北へいっても私はどうしても西へいくような気がしてなりません。関方原へいった時、飯沼先生より、大友の王子の話を聞きましたが、幾星霜を経た今日でもなお私の耳には新しくその時の大友の王子の碑面の横に

大友の王の王子に点うってつづす玉子の
ふわふわの関

先輩又は後輩の皆様のご近況を拝せる日を、楽しみにお待ちしております。

(市内蘇原坂井町)

むかし

大正十一年度卒業 中 村 艶 子

(旧姓 足立)

大正六年四月、気の遠くなりそうな昔、私は前宮小学校に入学しました。

今なれば、黒の紋絵羽の羽織の母親につれられての入学式ですのに、昔は近所の上級生についていく入学式でした。それでもニコニコ紺の着物に木綿のえび茶のハカマ、はきものは白い緒の麻裏ぞうりといういでたちでした。教科書も風呂敷ずつみで、一年生の時は、校長先生永井牛太郎先生の担任で、校長宿舍が学校の裏にあり、先生の奥さんがきつい人で、先生より奥さんにおそれていたことをおぼえており、二年生には丹羽貞子先生、三

とかいてあったのをおぼえています。

百年誌の誌上で、上級生の人、下級生の人との久しぶりの対面でこんなうれしいことはございません。

この誌の発行に当り、同窓会長、委員長に加藤先生のご努力に対して深甚な感謝を致します。

(在前渡西町)

筏 道

丹 羽 卓

(旧名 久二)

雨上りの日射し。匂い立つ純白の藤房。したいよる熊蜂の翅音が、昼の静けさを占めている。その藤棚の奥に煤びた茶屋がある。眩しい戸外の風景に馴れた目に、屋内は薄暗いが、駄菓子瓶や、魚の煮つけを盛った皿が入った出し子など無造作に並び、そのかたわらの土間で、豆腐田楽を焼く白髪の老夫婦の所作が、こまこまと目に映る。はたはたと浪団扇を使うたびに、煙が藤房へ延び

て、食慾をそそる田楽の匂いが漏れて来る。藤棚の下の床几では、たつけ姿の若者四五人、日焼けした顔を寄せ合い、日焼けした二の腕をさらして、酒をのんでいる。

街道をはばからず、立て並べた自転車に、權が立て掛けてある。筏乗りたちだと、すぐに察せられる。街道と言っても、やっと荷車の通る程の凸凹道であるが、何時の頃からであろうか、土地の人は筏道と呼んでいる。と言うのは、この茶屋の前面に広がる松林越しに、白銀の帯のやうに輝き流れる木曾川を筏で下り、桑名あたりまで木材を運びをえた筏乗りたちが、帰路として専ら利用していたからに他ならない。

長い冬が去って、春蟬が鳴き出す頃になると、肩に丈余の權を器用にかつぎ、片手で自転車のハンドルを操作し、ベルを鳴らしつつけて木曾路へと急ぐ筏乗りの一団を、よく見かけたものだ。けたたましい自転車のベルが鳴り出すと、祖母が、うとくなつた目をしばたかせて、「ほうれ、筏乗りさを通らっしゃる」と幼ない僕に言いきかせたものだ。もう四十幾年も前のことである。

西 瓜 番

岡田式渡船といつても、今どきの人々にはあまり知られていないかも知れない。一本の鋼索を川を渡して引張り兩岸の柱の上端に結びつける。その鋼索をつたって走るよう滑車を着け、その滑車の下部にまた一本鋼索を着けて垂らし、先端に小船をつなぐ。船は水流に流されようとするが、鋼索のため制御されるので、滑車のさざあという快調音と共に片岸を発進して対岸にたどり着く。思えば、実にのんびりした渡船方式であるけれど。

木曾川がどうか、ここの草井渡は、愛知、岐阜をつなぐいわゆる岡田式渡船だったが、その船の中の幼ない僕は、糊の強い浴衣を着ていた。姉に手をとられながら目の前に繰広げられている水神様の夜祭に心をうばわれていた。

賑やかな囃に浮かれたように、ピラミッド状に提灯を飾りつけた数隻の船が、微動しながら迫って来ると、兩岸からはひっきり無しに手火花が上げられ、それがおの

おの同時に川面へ逆さに映って如何にも涼しかった。水神様を祀る対岸の提防上には夜店のガス灯がセツピして、往来する人出の模様がその灯明りによって赤く、いやオレンジ色にも黒色にも眺められた。そのみではなく、子供等が鳴らす風船笛や呼子笛の音やかんしゃく玉の音までが入り乱れ、僕はいつしかこの祭の雰囲気によく快感を覚えていた。

その時突然半鐘が鳴り出した。僕の家の方からである。漆黒の松原越しに大夕焼の一部を思わせるような火の手が上がっている。「わが家ではないだろうか」とい不安が瞬間に襲った。姉も心配げに頭を上げて、無意識に僕の手を強く握りしめている。

「床やの甚さんとこが火事じゃぞつ」誰かがそんな心情にラク印を挿すが如く岸の方からどなったとき、とつさに火焰の中を右往左往する両親の顔が目に見え、僕は全身から力の抜けてゆくを感じながら船の上に腰を抜かし、だだっ子のように泣き出した。姉はただおろおろするばかりだったけれど、誰かが船頭に伝言したためか船は急に岸へ引返し始めた。数分が実にもどかし

った。岸へ船が着くと、姉は僕を背負って松林の中の道を必死になって走った。松林を出外れた頃火の手立っているのは、僕の家の方と大分離れていることに気付いた。姉も勿論それをすぐに察した。

ほうり出すように僕を路上へ降し「ああよかった。よかった」と弾む息の中から独り言のようにつぶやいた。火の手は、僕の家とおよそかけ離れた畑の中、登り始めたばかりのおどけたように大きな月へ余燼となつて然しなお時々めらめらとした焰を上げていた。焼けたのは西瓜の番小屋だった。

ちようとその晩に西瓜番を父より言いつかつた兄が、水神祭りへ行きたさの一心の出来心で、提灯をととして番小屋の軒に掛け、自分の勤務をこれに肩代りさせたのがいけなかった。心なき提灯は夜風のまにまに傾いて燃え上り、麦藁造りの番小屋に点火するに至つたのである。

純 白 の 糸

私のビスモーターは、各務野の中央部を南へ横ぎり、

初蛙が疎らに鳴く星明りの田舎道を急いでいた。稲羽町前渡東町（旧前宮村長平）の古い生家へ、既に故人となつた古老が書き遺して置いて呉れたはずの、村の歴史の資料を得るためである。

一昨年の秋、やはりこのことについて（六十歳を幾つか越した過去四百年にわたる村史の記憶のカタマリといわれる）古老を訪ねたことがあつた。翁は祭酒にいささか酔つて、私の尋ねようとする村の歴史について触れようとせず「まあまあ飲みなされや、そのことなら心配無用じゃ、わしがちゃんと一冊の本にして書き遺すから」という調子で、十幾代の位牌の納められた仏壇が黒光りしている部屋で、四五人の村の老人を交えて、よもやま話に花を咲かせつづけた。それから、どの位経つたのであろうか、私にも彼の急死が伝えられた。村の歴史について調べようという私の希望はぐらつた。けれども半面あの日の約束通り翁が村史だけは必ず書き遺して置いて呉れたに違いないと、独りぎめにしていたからた。

夜の田舎道は凹凸が激しく、ときどきビスモーターの異常な震動が身に響いた。「もう寝てしまっているの

みで無く、身近な私の先祖の歴史、それは昔の一般社会に通ずるものであり、現代へのつながりが一際はずきり認識出来て――歴史の流れの上に立つ、自己現在の位置が――より明確となり、今後の処世上、何らか得る処があると考えたからに他ならない。Oさんは「利用できるかしらん」とあれこれ取出しにかかった。

清和源氏の流れをつぐ美濃の国守護・土岐氏の末裔・土岐頼芸がその拠城・山形郡の大桑（おうが）城を斎藤道三のため占拠されたのは、天文二十一年（一五五二年）であつた。彼が流浪の旅に立つ以前に、その祖・土岐頼益（大安寺を建てた）土岐持益（承国寺を建てた）の縁の深かつた此の地に、一時身をよせていたことは、想像される。その子頼継（よりつぐ）言い伝えを漢字にした）は、ここに土着し農耕と狩猟によつて生計を立て、元和二年（一六一六年）七月十五日に世を去つた。当時は肉親の間ですら相コクの絶え無かつた殺伐な時代であつたがゆえに、斎藤一族の目を逃れるため赤石と改姓し、更に丹羽と改姓した。この一族は、この地に次第に戸数を増していった。これは私が幼少の頃、父兄や先輩から聞

はなかうか「私の不安をよそに、古老の家の糸より工場から、コウコウとした灯が戸外に漏れてきた。誰もいない糸より工場では、明るい電灯の光に輝きつつ、純白なワク糸が幾十というボビンへ繰り取られつづけている。それはあたかも、私がいたまぐろうとしてゐる歴史の糸の集積のようだった。……この地にあつては、われわれの祖先の歩みが、かように純白で清らかなものであつたに違いない……こんなことを思いながら、家人を待った。やつとこのことで姿をあらわした古老の長男Oさんは「へえ。あなたのいわれるように――オレの知っていることア、みんな書いて置くからな」と口グセのように申してはおりました。が、なんせ、急に死亡したもんでございますし、それらしい何もございませんし……」と、夜分に訪れた私を、むしろ心から気の毒がつた。私は失望と同時に、彼の記憶には絶対頼ることが出来なくなつた。何故もつと早くこの調査を手掛けなかつたのか、というこん（根）をつめなかつた意思の弱さに何よりも残念だつた。かえりみるに、私が、この調査を思い立つたのは、もう四年も前のことである。むろん動機は、懐古的なその

き覚えた記憶の断片をつなぎ合せてものだが、頼芸は、戦乱の時代に相応しくない性格の持ち主で風雅を好んだ貴族的な人物であつたと伝えられるだけに、その血を継いだ一族は穩かに伸むつまじく暮したことであろう。Oさんが探し出してくれた初代よりの法名を書き連ねた古びた一幅の軸を机上にして、対座した私は夜のふけるのもわすれて語りあい、様々の思索にひたつた。

糸より機械が、はたと止まつて、時計が大きく大きく十一時を打つた。私は深更の訪問をわび静かにこの家を辞した。調べようとした、農民としての祖先が水禍や乱世のあらゆる災禍と如何に闘いつづけて来たか、ということについては何の手がかりもなかつたけれど、何か満たされた思いで私は帰路を急いでいることに気づいた。まず私の（社会の）今日の、明日のために祖先の歴史をこのままでは止めようがないという考えをひるがえしていなかったからであらうか。いや、それだけのためではないのであろうか。

記憶 (1)

停ちゃんは、可愛い子だった。彼は若い男女の恋仲にできた子供で、母親は産後、彼を生家へ残して隣村へ嫁ぎ、父親は（当時の人々が、さういう場合よくしたように）大陸へ渡ってしまった。それは、その当時の人々が抱いていた倫理的な錯覚による所為に他ならなかった。

或る年の春祭りの夜だった。幼い僕と停ちゃんは祭笛に浮かれ、人混みにアメ玉をしやぶりながら草角力を見ていた。突然、五つ六つの男の子を連れた婦人が人目をばはかるようにして、僕らに近づいて来た。かわるがわる僕らの顔を見つめながら、黙って十銭玉を一つづつ呉れた。僕らはどきまぎして顔を見合せた。近くでその様子を見ていた誰かが、「停ちゃんのお母さんだ！」と二人にささやいた。とつさに、停ちゃんの顔が紅潮した。両方の黒い眸から大粒の涙が頬を流れた。ウロンな僕が、それと気がついたときには、すでに婦人は人混みにまぎれて行った。

あれから四十年近くが過ぎた。僕は今でもその夜の停ちゃんの泣き顔、彼の母親の歓喜と悲痛を圧へた、物言

いたような笑顔が僕の脳裡を去らない。そして、このような悲劇をしばしば生んだ根底のもの——風習のかたくなさは、すでに遠い過去のものとなったことに安堵するのである。

記 憶 (2)

「停ちゃん、蜜吸ひにゆこか！」
「うん、いこ！」

おどけたように大きな肩揚げのついた手織りの紺の袴を着た二人は、母家の裏の小屋で麦藁のストローを作り終ると、それを手にして一目散に彼方の松林へ駆けだした。踵のちびた藁草履の地を打つ音が、ばたばたと僕らの後を追った。……遠く山鳩のくぐもり声が続き、早春の日射はチカチカと樹々の葉群から葉群へ漏れていた。林の中、香ばしい土の匂いが満ち溢れて、すでに下萌が始まっている……林の中。長い冬から解放された自然と童心は、相寄って夢の世界を創造し合う。歓喜にかぶる。

のどこかに宿っているようである。

記 憶 (3)

「お前が、そんなに言うのなら、それでいいさ、けれど裏山の荒神堂ぐらいでは駄目だぞ、墓場へ行って、その証しに六地藏の供華を持って来い。ええなあ！」

穂麦の青臭い匂いが、ただよう産土の境内。木の間を漏る星明りに、団長の冷笑を湛えた顔が幼ない僕を見下していた。僕が三年生になったばかりの初夏のことである。今しがたも、怪談じみた話を、さんざん聞かされた後なので、墓場行きは、実に有難くなかったけれど、気の弱い停ちゃんへの思いやりと、団長の冷笑への反抗が、僕にむらむらと勇気を呼び起させた。僕は即座に答えた。

「よし、行つて来る」

団員の視線が一齐に僕に集中した。言い終るや僕はもう黙りこくつて見送る停ちゃんや他の団員を残して、單身、夜道を墓場へ急いでいた。遠くで、ふくろうが無気味に鳴きつづけ、頭上を時々こうもりが掠めて飛んだ。

二人は蜜の出ている松の瘤をさがしもとめた。……

頭大のそれが、そこここに散見され、その皺という皺には、黄金色の蜜（樹液）の粒がびつしりと吹き出していた。ひとつストローでそれを吸う。頬が触れあう。蜜は濡いた口に甘く、静かにひろがった。丁度、蝶が花から花へ移つても行くかのように、僕らは夢中で、次々と蜜を求めて行った。

僕が七、八つの頃の記憶である。僻村に生れ、僻村に育つた僕らは、両親から「おやつ」を貰うことなど知らなかった。が、僕らには広大な山野があり、自然は僕らに限りない慈愛を垂れた。田植頃になれば、野草が葉蔭に真紅な実を稔らせ、秋ともなれば、山ぐみや通草などが熟した。僕らは、山野をはねまわつて、それらをさがしもとめた。その美味を満喫した。このように生い立った僕は、粗野と純朴を好む。そして、自然の偉大さに憑かれて来た。今日まで四十年近く俳句に親しんで来たが、自然は尊厳で犯し難いものであると信じ切つて来た。

自然は、すでに人智の支配下になろうとしている今日ですら、そうした自然への尊敬と愛慕じみたものが、心

行くての木立や草むらまでが、何か大きな怪物に見え、青白い螢の光が僕の神経を異様にとがらせた。墓場が近づいて、道祖神の塚の前を通る頃には、僕は双手に拳大の石をしつかりと握っていた。——とにかく、僕は停ちやんの身代りとして命令を果して帰った。

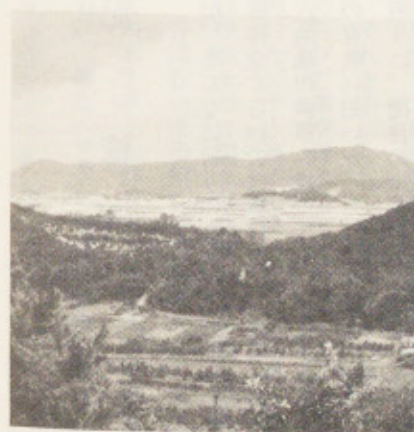
これは、その頃ボーイスカートをまねた少年団というものが僕らの仲間であつていたが、そこで時々行われた試胆会の夜の記憶である。

少年団の指導員は、西郷隆盛を崇拜し、徳富蘇峰の著書を愛読する小学校の先生だった。団長副団長には、上級生が任命され、伝令、ラッパ手、衛生手が任命されていた。僕は、ここで一本指、二本指、三本指と階級に応ずる拳手の敬礼を習い、団銃（登山杖に似た棒）の「捧げ銃」を教えられた。服装は、木綿の着物の着流しに、ゴム靴という滑稽極まるいでたちで、スバルタの槍兵の盾を形どった団章を胸に付けて得意になっていた。

また、ここでは忠孝、義勇の美徳を大いに鼓吹された。このように、無意識の裡に育まれて来た思想のエッセンスは、僕の七年六ヶ月という長い軍隊生活に多分に役立

つた。僕は終に、将校にまで成り上った。——程なく敗戦となった。僕は、完全に打ちのめされた。過ぎし日の社会の機構批判、自己反省をせざるを得なかった。僕の真の人生はこの時に始まった。あれから二十七年僕は今日、一度民として勤労にいそしみ、しかし家族を養うのにあえいではいるけれどもあの敗戦という現実を経なかったならば、ということに時を考える。想起しては、明るい気持ちにひたる。敗戦こそは、たしかに不幸中の幸いであつた。

なつかしの不動山頂から



北方補給部一帯が
工場地帯になる

思い出

永井 吉雄

旧姓松波 昭和八年卒業

子供の頃一番の苦手だった「綴り方」、いま時に言うと作文を、この頃になって書くようなことは考えてもみなかった私であるが、前宮尋常高等小学校、私にとってこの懐かしい校名も時代と共に幾度か変わって、現在は稲羽東小学校となり、この百年史編纂のため悪筆ながら卒業後の思い出と近況を綴ることにした。

私は前宮尋常高等小学校を昭和八年三月に卒業した。その頃軍備拡張の先陣であつた各務原陸軍航空廠、当時は陸軍航空本部補給部各務原支部と称し、そこで第二期見習工として技術と学科を学んだ。一人前の工員になるための教養と軍事教練をた、き込まれたものだった。航空廠の思い出は別として、陸軍に勤務していた私が海軍に入ることになったのである。

昭和十四年一月今から三十三年前である。前宮尋常高

等小学校は現在の場所ではなく移転前のことで、私の書いたスケッチをご参照下さい。

現在は真新しい鉄筋コンクリートの校舎に改築されたが、講堂だけは当時の面影を残している。校庭の西側に伊吹おろしの風よけとなつてゐる講堂ではあるが、この講堂もいつかは鉄筋の屋内体育館に生れ変わることだろう。この懐かしい講堂で村民の皆さんの壮行を受けて、陸軍に、海軍に私達何人かが壮途についたが、この講堂での最初であつたことを記憶している。小雪の降る寒い日であつたがこの講堂の中で誓いを新たにしたのである。この講堂のできる迄は、新校舎の間しきりになつてゐる戸を一年の間に何回となく取りはずし式場を作つたもので、高学年になるとこれが一つの仕事で大変であつた。この苦勞は先輩各位経験のことでしょう。

次に講堂から送られた後を簡単に申しますと、昭和十四年一月呉海兵団に入団、五ヶ月の新兵教育を受けた、その訓練中、隊務実習で同級生であつた足立新一君に逢う、彼は広島県の呉に近い広島海軍航空隊で水上偵察機の偵察員で、彼と消灯まで思い出話に花が咲いた。彼は

海軍一等航空兵、私は海軍四等航空兵であった。新兵教育が終って大分海軍航空隊に配属になった。この航空隊は甲種子科練と飛行学生の後期の練習航空隊であって、九六式艦戦と九六艦攻による毎日の猛訓練で、我々地上勤務員は血の出る思いだった。

昭和十五年五月第十二航空隊に転勤を命ぜられて、中支の漢口に着任した。ここで奇しくも足立新一君と再会した。彼は第十一航空隊で攻撃機の部隊で、私はゼロ戦の戦斗機隊で、重慶、成都の爆撃は連合作戦であった。東山空曹長が、成都の飛行場に強行着陸して拳銃により飛行機を焼き払ったという戦果のあった頃である。

その翌年の昭和十六年六月に横須賀海軍航空隊に転勤を命ぜられて、待望の休暇で帰省の折足立新一君の戦死を知った。彼は昭和十二年六月に海軍志願兵として入隊し、偵察練習生課程を経て搭乗員となったもので、素晴らしいパイロットだった。さて私の転勤になった航空隊は航空兵器術の練習航空隊で、私は第十五期普通科航空射撃術練習生として学んだ。昭和十六年十一月内外共に風雲

次ソロモン海戦である。開戦以来諸戦で数多くの戦果を挙げた航空母艦竜龍は、昭和十七年八月二十四日午後三時米国空軍の爆撃と雷撃を受けて矢折れ力つきて、物量の前には勝てず南海の果に沈没した。

私は九死に一生を得て内地に生還することができ、高等科航空兵器術練習生を命ぜられて千葉県の州の崎海軍航空隊で訓練をうけることになった。

昭和十八年五月同練習生を卒業して、任官の希望に炎えて福岡県築城海軍航空隊に配属になった。この航空隊は零戦八十機で編成された戦斗機隊の第一線部隊であった。

この隊に在る限り我が航空隊は建在なりの感があつた。昭和十九年六月九三一航空隊に転勤を命ぜられて佐伯基地に着任した。

この航空隊は天山艦上攻撃機による海上護衛部隊で、航空母艦四隻を配して海上護衛の任と、菊水隊沖繩特攻基地であった。戦局は日ましに我に利あらずして潜水艦の攻撃を受けて沈没してしまつたのである。

昭和二十年七月同部隊は串良基地へ、私は、宇佐海軍

急をつぐる頃（記録によると米英は対日輸出を全面的に禁止したとある）その月の末練習生を卒業して航空母艦竜龍に乗り組を命ぜられた。月月火水木金の猛訓練中の航空母艦で、卒業したてのバリバリで大いに張り切つて乗艦した。大分県の佐伯湾に集結していた母艦は私の乗艦を待つようになつて出港した。

これがハワイの戦場に向かつて出港するとは、誰も知らなかつた。時に昭和十六年十二月八日未明、南太平洋に於いて米英と戦斗状態に入れりとなつたわけで、来る日も来る日も海上に米英の艦を求めての諸戦は楽しかつた。昭和十七年六月五日日本の戦局を左右したミッドウェー海戦、作戦は非常に優れていたが結果は周知のとおりであつた。

私の乗り組んだ母艦竜龍は北方作戦で、アリユートシャン攻撃だった。寒さと北方特有の濃霧に悩まされ無差別の爆撃に苦労した。

この作戦は七月一パイで終つて南方の制空権確保のためソロモンの海に米国空軍と戦斗を交えた。これが第二

航空隊に転勤を命ぜられ、着任間もなく八月十五日終戦となつた。

当時第五航空戦隊（九州の航空部隊全部を総称して第五航空戦隊と称した）は最後の一兵まで戦う気構えであつたが、各部隊は八月二十一日解散してそれぞれの故郷に復員した。

所詮敗者の戦功は語る価値にならない。

昭和二十五年五月に役場の書記になつた。現今地方公務員になつて二十有余年になる。

御多聞に洩れず、当地も再度の町村合併で市に昇格し、現在千葉県鴨川市の一課長として地方行政の仕事に従事中である。

最後に家族の状況を簡単に記すと

妻 睦子 農業に従事 主なものは水稲、みかんの栽培

長女幸代 嫁して三年になる中学校に勤務

長男憲雄 千葉県庁に勤務して五年目

次女春代 鶴見女子大学在学中

（千葉県鴨川市横尾）

魂のふれ合い

永井 幸一

前宮小学校八年の思い出は数限りなくありますが、格別お世話になった加藤先生のご恩は、私の頭の中にこびりついております。小学校時代は先生ですから当然としても、軍隊で可愛がってもらい、営業上で指導をうけ、今も尚深い交りをいただいております。一寸した病気で東海中央病院に入院したら、どうして耳にはいったのか早速お見舞に来ていただいて恐縮しています。どういふ人間的交りがあるのでしょうか。

学校時代の綴方は七点か八点でしたから、上手な作文は出来ませんが、入院生活の退屈まぎれに思い出し思い出し書くことにしました。

優勝旗（小学校時代）

授業よりスポーツが好きでした。陸上の短距離がえて

でした。五年生頃からちよいちよい他校試合に出かけましたが、いつも三等ばかりです。高等一年の時加藤先生が受持ちです。放課後は毎日リレーの練習です。バトンタッチをいやという程させられました。十月蘇原小学校の運動会に出場することになって、先生の案内で各自自転車で行きました。永井弘道君、長縄一郎君、仙石行義君と私の四人です。相手の学校は鶴沼、各務、芥見、岩の四校です。

「今日は優勝旗を持って帰るぞ」

先生も選手も言わずしてその気持ちでした。

「他校高等一年の選手リレー」

と呼び出しがかかり、他校の選手と顔を合わせたところ、五校中一番生徒数の少ない我が学校の選手である私は体格も劣っている気がしました。

先生がそばへ来て、ないしょで

「バトンタッチ」といわれた。

私がトップで一番くじ。

スタートはうまくいった。力は五分五分。バトンタッチは三回とも実にスムーズにいった。三米の差で永井弘

道君がテープを切った。場内の歓声が耳にはいった。願がかなって永久授与の優勝旗をかついでくることが出来ました。

「幸一君お前自転車乗りがうまいから、優勝旗をかついで行け」

前宮小学校に優勝旗が飾られたのは、恐らくこれが第一陣だったでしょう。五十年近い昔の話ですから、この優勝旗はもう保存されてはいないと思います。これが小学校時代の一番大きい記憶です。

中隊長殿（軍隊時代）

昭和十四年召集を受け、航空隊に入隊しました。衛生兵にまわされて特別教育を受け、第一航空教育隊第一中隊に配属されました。申告に中隊長室へ行きました。びっくりです。恩師加藤先生です。申告いたしますを忘れて先生といてしまいました。しまったと思ったが、中隊長殿はニコニコして、

「よしわかった。もうえい。これにかけよ」

椅子に掛けて、しばらく昔話をやりました。

先生が遣番司令の夜でした。永井衛生兵中隊長室へ来いとの伝令が来ました。軍隊で上官室へ呼ばれるのは、ろくなことはありません。何か悪いことをしたかな？何が見つかったかな？びんた覚悟で恐る恐る行きました。

「台湾へ空輸に行った飛行機が今日帰って、お土産にもらったからさあ食べよ」

新聞紙に包んだバナナの一房が出されました。

「お前は菓子屋だから饅頭よりこの方がよいだろう。」

食べよ食べよ。」

大好物のバナナ、その頃岐阜へ行ったとどこにも売っていないバナナ、すぐ手が出ます。二、三本はペロリ、食べたというより飲みこんだといった方がよいでしょう。

「遠慮せんでよい、もっと食べよ。」

その時、中隊長対一兵卒ということに気がつきました。でも進められるままに又二、三本いただきました。

びんた覚悟がバナナの饗応とは夢にも思っていないかった加藤中隊長の部下になった私は幸福だとしみじみ有りがた味を感じました。

又ある晩は

「腹がへるだろう、寿司を買ってきてやった。」

と中隊長室でご馳走になったこともありました。

医務室へ来られて

「中支戦線でのクリークかぶれの水虫がまたいたみだした。治療してもらいたい」

私はこの時こそ、軍医殿に一番よくきく薬をきいて準備して治療してあげたことも度々でした。

「補充兵が入隊するから、紅白饅頭を作ってくれんか。小麦粉、小豆、砂糖は炊事班長に話してある。それ以外に必要なものは買って来い」

と公用外出がさせてもらえるうれしさもありました。

戦争はますますひどくなる。日曜外出もずつとない。

「永井衛生兵中隊長殿が呼び」

と中隊当番兵が駆けて来ました。

「今度の日曜に那加料芸組合全員が慰問に来隊することにして来た。そこで中隊だけ菓子を一袋ずつやり

も一つ大きな行事があった。

二千六百年の祝賀式の日、山本部隊長男爵は東京の祝賀式に参列で上京不在中、先任加藤大尉が部隊を指揮して遙拝式を挙げ、午後は休養だった。一時過ぎだったと思います。更木村のお神輿がお祝に正門前に来て「万才」を號んだ。中隊長は神輿を誘導して営庭に入れた。大小十いくつあった。

「更木の人は休んでください」

兵隊は神輿をかりてかつげ

内務班でゴロゴロしていた兵隊は一齋に飛び出でてきて神輿をかついだ。大人用も子供用も全部かついで営庭を練り廻った。更木の人から樽酒を兵隊がご馳走になる。益々元気が出る兵隊。ワイショワイショで営庭は大祭大騒ぎ。

営庭に神輿をかつぎ込んでお祭騒ぎをする軍隊が日本中にあるだろうか。軍旗を持つ歩兵の軍旗祭でもこんなことは見たことがない、聞いたことがないと転料してきた下士官がいついた。一中隊長の大膽さには部隊中が驚いていた。益々評判のよい中隊長だった。

たいがお前家へ帰って作ってこんか。小麦は僕の家にある筈だからお前の家へ届ける。それまで立替えた。小豆と砂糖は炊事班長にたのんであるから自動車を持ってゆけ。送らせる。これから帰って今晚から準備し明日（土曜）一日作って日曜の午前中に持つてくるんだ。どうかね」

これが金曜日の午後でした。外出さえとめられているときに、二泊の外泊とあつては、こんなうれしいことはない。こんなありがたいことはない。何とか嘘をつくつても外泊したいばかりの兵隊だからさ。

日曜の午后が来た。

那加の芸者八十名総出場、格納庫に舞台ができています。部隊全員が慰問を受ける。

芸者は歌う、踊る。兵隊の芸能人もたまに参加する。

一中隊だけが菓子袋をもらう。兵隊どものうれしさ。

五時頃終つて芸者共は残飯給与を受け、トラックにホロをかけて送ってもらった。

「加藤大尉でこそ、こんな希抜なことをやる」

と評判だった。

軍隊で精神訓話はいやなやつです。それは眠たくなるからです。我が中隊長はそうではありません。いつでも中隊長のモットーである「強正莚」から始まります。その強正莚を勸諭と戦陣訓に結びつけ、そこへ中支戦線の体験談を織り込んで、おもしろおかしくしかも味があつた調子が含まれているのですから、眠るどころか手がたたく位になる位でした。

「先生は話が上手。ようわかる。」

一中隊は精神訓話によるこんで集まりました。

先生が南洋の飛行師団副官に榮転されるとき、皆はどんなに別れを惜んだかわかりません。とりわけ私は、両親に別れるよりつらい思をして南洋に向かわれる先生の飛行機を見送りました。雲の彼方に飛行機の影が見えなくなるまで。

「先生ご無事で帰ってください。」

かかみの最中（営業時代）

終戦後先生は公職追放が解けて、蘇原中学校に勤務でした。朝晩私の店先を通勤です。甘党の先生ですから、

よく立寄ってください。

「永井製菓の独占品を作らんか。」

といわれて、夏冬よく出るものと考えた挙句「最中」と決心しました。デザインと由来の案は先生の考案。

名称は地名の「かかみ」、形は地名の起りである「鏡」(古代手鏡)とし包装紙も箱紙も先生の図案と文字、味は私の専門、でも甘党先生だけあって全国銘菓の味から割り出し、皮はどうせい。餡は粒。餡はどの程度。などと指導を受け、本職願負けて研究をすすめるうちに本格的の「かかみの最中」となって発売し、お陰様で評判よく相当な売れ行きとなっております。恐らく皆様のお買上げをいただいておりますと思いますが、心して味わっていただき、ご批判を賜りたいと紙上をおかりして宣伝させていただきます。

十年程前から煎餅を焼き始めました。これも先生のおすめからです。各務原市東部は不動山が有名なのに土産物らしいものがない。

前渡不動

日の出不動

山中不動

迫間不動

「不動せんべい」とすればどこにも間にあう。餡物より煎餅の方が大衆向きの傾向だ。全国観光地どこにも煎餅がある。かたいのよりやわらかくてかたいのがよいと思うとのむつかしい先生の意見には一寸閉口したが、卵と長芋の入る分量によって、それが出来るとは私の体験からくる専門家の腕前。これ亦とても評判のよい煎餅です。是非ご試食ください。

「教育は魂のふれ合い」という新聞の題目を見たことがあります。ほんとうにその通りであると思います。七〇才になられる加藤先生に六〇才に近い私が尾をふって近ずけば、教え児として子供扱いはされませんが、小学校時代と同じように、何でも教えてくださいます。可愛がつてくださいます。この二人の間に通う「魂のふれ合い」は私にはわかりませんが、恩師という気持ち、師の恩という気持ちは、いつまでもいつまでも続くことでしょう。

仰げば尊し我が師の恩

あの卒業式に歌った歌が思い出されます。

あります。

私達が今日無事に社会の一員として、少しでもお役に立っているとするならば、それは少年期に恩師達によって育まれた、郷土小学校のお蔭と、今更乍ら昔を思い出さずにはいられません。

先生の御通知を受けた瞬間に、これは早速に自分も一つその当時を想起しつつ、その儘に書き綴らせて頂きたいと思い、例え文章文字は拙なくとも、その中に溢るる心情を汲みとって貰えれば幸と、素朴そのものに書きましたが、何卒よろしく御願います。

一 野山の想い出。 何と言っても一番故郷を代表しているのが不動山です。

平野の中に唯一つばかりと浮いているようで特にその南側のそそり立った岸壁は城に珍らしく何時迄もその英姿を横たえています。頂上から眺める四囲の景色は、又格別なものがあります。南は一衣帯水木曾川の流れ、北には各務ヶ原と飛行場。東方遙かに木曾の山々が雪を載いて、そびえ立っている。西には金華山城、伊吹山の

加藤先生対永井幸一はいくらでも書きたいことがあります。最初申しあげた通り作文が下手で、言いたいことの百分の一も書き表わせないことを残念に思います。

(完)

(在蘇原柿沢町)

私の想い出

永井盛二

昭和三年三月卒

加藤先生お久し振りで御座います。

先生には教師、青年団長、在郷軍人会長、等々、戦時中の大活躍は勿論のこと、終戦後も郷に残り、軍人遺族の為に、奉仕されると共に、軍人恩給の復活にも、大いに努力され、今は又同窓会長として、日々大活躍の上、今度は前宮小学校百年史の企画をなされ無尽の実力を発揮され、生涯を通じて、郷里の為に御尽力なされていることに対し、心より敬意を表するもので

雄姿が、画に書いたように濃飛平野に突立っています。今は北の飛行場こそ、人家と島に変わったけれど、その他は依然として、よき眺めを呈しています。

恩師として、一年生より順に想い出して見ますと、石屋先生、坪内先生、此の二人は女の先生、それから、小野木先生、加藤先生、丹羽先生、高等一年が、遠藤先生の七人の先生に教わり、且つ、又叱られました。中でも六年と高一のときの両先生が一番に印象に残っています。

次に遠足の想い出をふり返って見ます。前夜から持つて行くお弁当とお菓子を何回も詰め直している時の嬉しさ、何とも言えない気持です。一年が裏の各務原へ汽車を見に行く。これは弁当のことがおぼえていません。二年が伊木山登山、これは登る嬉しさと、辛さとが半々だったと覚えていてます。三年が尾張富士。これも登った辛さと、頂上での眺めが逆も気持ちよかったと覚えていてます。四年が小牧山、これは古戦場の跡として歴史のことを聞いたのを覚えていてます。

五年が蘇原の権現山。六年は金華山と覚えていてます。

皆々様に、改めて、お懐しう御座いますと、一筆御言葉のべさせて頂きます。

最後に六年間、又は七年間、同じクラスで札を列べて勉強にいそしんだ、級友の皆々様に、何卒よろしく御願います。と申し述べて私の稿を終り度いと思っています。

現在は左記に住んでいます。

大山市西松本町

名鉄大山駅降りて右へ廻る最初の四角左え、直ぐ。

皮膚科 永井 医院

愛岐大橋のたもとで

永井 隆

先日、田舎へ帰った時、愛岐大橋を渡りながら、交通の便がよくなったものだと痛感すると同時に、この木曾川の流れを友として過ごした子供の頃がなつかしく思い

何れも遠足そのものが一年も前から待たれて、楽しい想い出です。

学校の想い出としては、何と言ってもあの西南の角にそびえ立っていた大杉の木です。次に南側の堤坊。運動会でも、野球でも、演習ごっこでも、凡ての場合の観覧席になったものです。更に東側の忠魂碑と、役場の前の大岩石と、その岩畳、運動会をやるにも、何をやるにも危険で邪魔になったことを、覚えていてる。

行事として矢張り残っているのが秋の校内運動会。一年に一回あるのだから、何といっても楽しかったものです。

遊技を覚えるのは、余り好きではなかったが、競技の方は逆も楽しみだった。全校生徒を赤白に区別して、凡ての得点争いで、一生懸命に走ったりしたものです。全く純心な気持で一杯でした。

あの気持は尊いものです。

終戦後は校舎も移転し、拡張され、様相も一変して小学校時代の面影はありませんが、運動場でよく軟式野球を郷里の上の人も下の人も皆一緒にやって、楽しくやったことを、逆も懐しく想い出しています。野球愛好家の

出された。

橋ができるまではこの辺りでは渡し舟が唯一つの交通機関であった。

私の部落では日用品以外の買物は川向うの草井まで出掛けなければならなかった。

お盆だと草履、正月には下駄をおふくろが買ってくれるので一緒によく行った。草履や下駄もうれしかったが、舟着場に茶店があり、そこで「みたらしだんご」やトコロ天をねだるのが目的でついでいくことが多かった。狩人だとか自転車をもったアイスクャンデー屋だとかいろんな人がこの渡し舟を利用するので、乗っているわずかな時間だが変わった話が多く、耳をかたむけて聞いていたものだ。川上の山手が曇っているから明日は水が増えて渡し舟は止まるだろうとか、雲がのぼるので雨が近いとか、山が見えるので今は曇っていてもじき晴れるだろうなどと会話の中から知識を得ながら、船頭さんは年中空を眺めているので予想がうまいんだなあと、感心したものであった。こういう知識はずい分と役に立ち、学校へ通う頃、天気になって傘を持ったり、雨靴をはいているも

のに向って大イバリだった。

各務原にはその頃軍事工場があつてたくさんの方通勤者がこの渡し舟を利用していた。朝は渡し舟で渡ったのに帰りには増水して船が止まり、大山へ廻わって帰らねばならず、無理を承知で何んとかしてくれと大声で向う岸に叫んでいるのが家にまで聞こえ、気の毒だなあと子供心に同情したこともあつた。

渡し舟だけでなく、木曾川には数限りない思い出がある。他に大した遊び道具もない頃の子供たちにとって、木曾川は本当によい友達であつた。広い川原には、浅瀬、本流、中洲があり大水が出るたびに姿を変えた。

焼けた石をふんで上流の山名の辺りまで行き、そこから自動車のタイヤチューブを浮べてそれに乗り下つたりした。この頃は危険だとかいって水泳禁止区域ばかりになつてしまつたようだが、あの頃は不思議に事故がなかつた。水死者はすいぶん見たが、皆よそ者ばかりだつた。もの心ついた時から川と一緒に暮している者には、よそ者にわからない感のようなものが働くのだろうか。唯、余り水の中に居すぎて唇を紫色にして帰るとおふくろに

しかられた。

夏の夜はホテルが飛び交い、川原に台を持ち出して夕涼みをした。また、その頃はまだ大山に鶴飼があつて、かがり火を燃やした舟が下ってくる事もあつた。

秋の終りになると広い堤防の南斜面にサツマ芋の切干がいつぱいに干され、夕ぐれになるとその片付けをいつも手伝われた。切干には生で干すものとゆでてから干すものがあり、片付ける前に陽なたばっこをしなから、ゆでた方の半かわきをたべた。

学校が冬休みになると山の講があつた。氏子の子供達が集まつて、ヤマノコさまといふ人は……といふ歌を唄つて一軒一軒回わつて歩く。門口で唄い終わると家の人が人蔭やゴボウなど、野菜をくれる。その野菜で五目飯をたいて食べるのだが、神社の境内をむしろで囲い、その中で各自持参のおぜんに向かつてたべる味は格別だつた。上級生はそこに泊つて遊ぶことが許されるので早く大きくなりたくて仕方がなかつた。

正月が過ぎて初午の前に左義長がある。家々から門松や飾りを集めて神社の境内に積み上げて火をつける。

小学生時代を想ふ

永井孝義
加藤勝彦

昭和二十年度卒

雪が降ると提防ぞいの松林で野うさぎを追いかけた。学校からもよく行き大声をあげて兎を追ひ出し、網の方を追いつめた一度兎追ひをやると一匹か二匹はつかまえることができた。

思い出は多いがガキ時代がなつかしくよみがえり、あれから三十余年過ぎた今、陸の孤島のような不便な故郷も、近代の成長とともに大きく変わりつつある。

兎を追つた松林は切り払われてプラスチックの工場が建ち、渡し舟は巨大な鉄橋に変わり、そのたもとはモーターまでできた。しかし、一方では、一つ一つと思い出の場所が消えてゆくのは淋しい。

橋ができるのを楽しみにしながら完成を待たず他界した親父に、一度渡らせてやりたかつたのである。

(羽島郡柳津在住)

昭和十五年四月一日、新しい靴を背に母親に手を引かれ、入学への希望と不安とがあい半ばする複雑な気持ちで前宮尋常高等小学校の門をくぐりました。入学式は講堂で行なわれ、時の校長杉山先生から、祝辞や学校についての色々なお話があつた。担任は一部が今尾先生、二部は堀口先生(途中退任され、花井先生に変わった)でした。思い出といえば、国語の教科書の最初、「サイタ、サイタ、クラガサイタ」を校庭の桜の木の下で皆んなで読んだり、汽車の事が書いてあつたので、各務の山へ登って貨物列車の数をかぞえた事、春秋の遠足、各通学団で七夕祭りの短冊を飾り付けた大きな竹の林立する下で行った学芸会、木曾川での水泳大会、秋の運動会、冬のマラソン大会等の行事、通知簿は10点が最高点で順次下え、学

年の修了時には成績の優秀者に、操行佳良・学力優等、業務勤勉といった賞状が数名に授与された事が、学内の事であり、校外活動では、元旦の早朝四時頃より通学団単位で行なわれた。戦争の勝利と出征中の人の武運と無事を祈願して村中の神社の参拝、紀元二千六百年を記念して、神輿を担いで村中の神社を廻った事、紀元節の日に村の主催で行なわれた農産物も含まれた色々の作品展覧会等といった事で、私達としては見る物成す事が珍らしい事ばかりで、六年間を通じて一番思い出の多い学年であった。K君「俺はお婆さんっ子で、入学式の時その傍が離れられなくて、わいわい泣いたなあ。S君さん「隣の男の子が、いたづらっ子でよくいじめられたわ。T君「学芸会で狸の役をやつて、ニッケネームが狸となり、その当時はいやであったが、今は非常に懐かしう思ふなあ。N君「俺は背が低くつて、神輿にぶらさがつてたわい。筆者も父が支那へ出征中であつたが、十二月に帰還したので古知野駅迄出迎えに行つた事は忘れられない事です。

二年生。校長が杉山先生から福田先生に代り、担任は

先生にしかれたわ。N君さん「シンガポールが落ちた記念にゴムマリを買つたわね。筆者も水泳の許可が出る前に川で泳ぎ、しかれた事があつた。又修身の時間に、二宮金次郎の話を聞き感激の余りに泣き出し、先生をびつくりさせたり、先生（女性であつた）に何んとか異性を意識し、ほのかな恋心といった感情を抱いた事を思い出します。初期の多感にして感受性の強い年代であつた。

四年生。担任は一部が近藤先生（次に三村先生、出征された後に水野先生）、二部は小野木先生であつた。校長が牧田先生に代つた。男女が別々のクラスになった。学校の行事の他に、食糧の増産の為に東町の中の島や西町の川原の開墾に参加したり、軍事色豊かな翼賛少年少女団がつくれ、隊列の組方や行進の仕方等の訓練を受け視閲官を迎えてその成果を披露し、「概ね良好なり」の評価を受けたり、忠魂碑が拡張され忠霊塔に変わった折には、川原から砂や小石を運んだりした。又放課後は、桑の木の手取り、甘藷の葉柄取りやドングリの実を拾つたりしなければならなくなった。K君「校長先生が朝礼台

一部が森島先生、二部が花井先生であつた。校名が小学校から国民学校となり、通知簿の評価が優良可となった以外学校内外の行事は、一年生の時と殆んど変らなかつた。しかし十二月八日、全員が忠魂碑の前に整列し、大東亜戦争が開始された事についてのお話が校長先生よりあつた事は、誰れもが忘れない事であつた。K君さん「九々の早憶え競争をやつたわねえ。N君さん「通学団リレーで、一二年の代表で走られビリだったので泣いた憶えがあるわ。H君「学芸会で猫の役をやつて、ニッケネームは猫だつた。筆者もこの年「〇〇の誕生日」と題した学芸会の主役をやらせて貰つたが、最初で最後の主役で今でも懐かしう思い出すことがある。

三年生。担任は一部が五島先生、二部は小野木先生であつた。学校内外の行事は、戦争の初期で、我が方が有利で教室に張られた東南アジア地図の、色々な国や島々が占領を示すため、次々と赤く塗られたり、遠足の時軍歌を歌つて行進する程度で、一・二年と大差はなかつたが、学芸会はなかつた様に思う。I君さん「花壇にカボチャが作つてあつて、水をかけたら雄花がち切れて、

に上つて、一寸とさがつたスポンを引きあげ、「動作敏捷」と云わつせるのが面白くて、クスクス笑つたわけ。H君さん「忠霊塔を作つた時の砂や石運びのえらさは今でも忘れないわ。T君「ドングりを他村迄拾ひに行つて喧嘩した事もあつたわい。筆者も腕白坊主で、桑の皮や甘藷の葉柄が干してある所で鬼ごっこをしたり、教室でパンコショウをして、職員室や教室の廊下に立たされたり、冬学校帰りに弁天池の水の上に載っている所を、隣の叔父さんに見つかり、家で大変にしかれたものでした。

五年生。担任は一部が水野先生、二部は小野木先生になつた。学業は以前と変りなかつたが、図画の時間などに、撃ちて止まん、一億一心とかのポスターを書いて、村の電柱や塀に貼つて、国民の戦争意欲向上に協力させられた。戦局は不利になる一方で、町から疎開してくる生徒も多くなり、彼等との間にトラブルも起きたりした。防空壕を掘り避難の訓練もある様になつたし実際に名古屋には空襲もあり、私達も各通学団毎に、家へ逃げ帰る事もあつた。衣食の統制もきびしくなり、配給になる様

になったり、工場を分散する為に不動山に大きな横穴が掘られたのもこの年であつたと思う。G君「服や靴が学年毎にわり当てられ、くじ引きしたなあ」。N君「疎開してきた子と喧嘩して、ビンタを取られた上職員室の廊下に暗くなる迄、立たされた事があつたなあ」。M君「兎の皮を取るために、うさぎばいに協力させられたなあ」。筆者等は部落の上級生の命令（絶対的なもの）で彼等がしなければならぬ、手紙や新聞配達を、なかば強制的にさせられた。

六年生。一部は永井先生、一部は柴田先生になった。戦局はますます不利となり、敵機に依る空襲はきびしくなる一方で、裏の飛行場がB29や艦載機の攻撃を受けるようになり、その度に下級生の靴を持ってやり手を引いて家へ逃げ帰ったり、出征される人、英霊として無言の帰還をされる人を、山の鼻や常貞寺前の堤防に送迎する機会が以前に増して多くなって、学業に励む状態ではなくなつた。学校や村のお寺等には、兵隊さんが、又林の中には工場の一部が分散してきた。広島や長崎に新型爆弾（当時の新聞にはそう書いてあつた）いわゆる原爆が投下

たが、母達が冬味噌汁を作ってくれたが、本当においしかったわ。

以上の様に私達の小学生時代は、大東亜戦争と共に歩み物心両面に苦しく且つ厳しい時代ではあつたが、先生方や両親の暖かい指導や愛情に育つた、ふところや袖の中に、ふかしたさつまいもを入れ、戦争ごっこ、パンコシヨウ、肝玉試し、おひとつやおはじき等を時には暗くなる迄やって、親を困らせる腕白やお転振を發揮し、それなりに精一つばいその年々を楽しんだものであつた。最近PTAのクラス委員とかで、学校を見る機会も多くなり、立派な校舎や完備された諸設備の中で子供達が勉強している姿を見、私達の当時と比較して非常に羨らやましく思うと同時に、講堂を除いて思ひ出多い校舎や机が跡形もなくなつた事は、時代の趨勢とはいへ私達オールドチルドレンにとっては一まつの寂しさを感じる次第です。

「註」

加藤君の助言、同年会の席での思い出話を中心にして纏めました。学年と諸行事が前後してゐるかも知れな

されるに及んで、八月十五日の終戦となつた。敗戦という不安の中ではあつたが、以前よりはおちついて勉強が出来た様になり、上級学校（当時は中学校）へ進学希望者には、一段ときびしい特訓がなされる様になった。斯して仰げば尊しや螢の光と共に目出度卒業し、高等科に上級学校にと、それぞれの道を歩む事になった。私達として一番残念な事は、敗戦直後の困乱期のために、樂しめるべき終学旅行がなかつた事である。村では終戦直前頃より赤痢が発生し、医料品の不足で村中にひろがり多くの仲間が之にかかり、中には幼なくて死亡した者もいた。O子さん「空襲で逃げ帰る途中、いも畑に伏せている上を敵機が飛びかかってこわかつたわ」。A君「終戦の玉音放送を聞いたが、一寸ともわからなかつた」。N君「進学希望者の特訓中、「先生が教育勅語で大切な事は」N子さん「夫婦相和し」先生「将来立派な奥さんになれるぞ」。一同ドット笑う」（厳しい中にも、なごやかな一コマ）忘れられないね。K君「卒業式の日担任の先生が、「世に出て、重くなるほど下れる稲穂かな」と云わつせたが、本当やと思うわい」。A子さん「何年生からだつたか忘れ

い事をお詫び致します。尚私達は諸恩師の御出席を得て、三年に一回同年会を開き昔話しに花を咲かせています。

恩師の健康法

永井 武男

（昭和十一年卒業）

大正の末期でも、ベビーブームということばこそなかつただろうが、現実としてわれわれの学年は、男子クラス五十名、女子クラス三十四名といった、特に当時としては大世帯だつた。

おかげで、男女共学ではなくて一年生からずっと二クラスだった。年令的に男子五十名全員が軍籍に身をあずけて、南に北に苦斗を続けたのだったが、その中十三名の戦死、戦病死者を出し、成人して或いは、終戦後を含めて病死者が五名で結局物語者が計十八名で、残る三十二名中、若手の転出者を除いてそのほとんどが、校下にあつて家業に就き、または工場、会社等に職を求めてあ

の物資の不足する時代を、必死に働いて切り抜け、各々自分の生活に一ぱいだったが、諸種の情勢も好転し、精神的、物質的に落ちつきをみるようになった昭和三十三年六月、一番同窓生として遅れて内地に帰還した古川君の歓迎を兼ね、誰からともなく男子クラスを、山東、前渡、若宮の三区にわけて、輪審により三年毎に同窓会を開くことになり、時には物故者の遺影をおかりして、追悼会を催し、引続いて過ぎ去ったいろいろの思い出話に時をすごした事もあった。

勿論、当審区の誰かの家で、諸材料を持ちより、ささやかながらも食事をともにしつつ・・・。

戦後、年を経て子弟の養育にもその手がからぬようになつた頃から、女子から仲間入りの声があつて、その名称を「昭和三年会」と決定し、男女合同で同窓会を実施するようになった。

勿論、八方手をつくして、住所をつきとめ案内状を送したが、いろいろの事情により、いつの場合も生存者全員の集りは到底のぞめなかった。

人生僅か五十年。とかの古語は昔のことで、この頃

まことにありがとうございました。

お陰様で盛大に左記によりこの会が開催できることを当番として厚くお礼申しあげます。

かえりみまするに、昭和三年四月前宮小学校に入学してより満四十四年……口でこそ簡単に申しますものの、過ぎさつてみれば長い様な短い年月でございました。

その間いろいろな事がありました、実に大きな変化で、想像もできなかった地球人が月世界を探検するという科学の進歩も果てしない程でございます。昔は、人生僅かに五十年とか申しましたが、今や四十や五十は鼻たれ小僧で、まだまだ年に負けても居られません。たまのひとときを大いに語り、大いに笑つてささやか乍らもこの会合を有意義にしたいと考えておりますれば、万障お繰り合せの上ご出席くださることを楽しみにお待ちしております。

つきましては、まことに申し兼ねますが、会費未納の方は当日ご持参くださる様、お願いいたします。

なお、時恰も交通事故多発の憂慮すべき非常事態であり、特に年末年始交通安全運動期間中でもあります。お

では四十や、五十は鼻たれ小僧と考へたいが、もうその五十才を数える頃となり、頭の白くなつた者、うすくなつた者、前から或いは、うしろから禿げ上がつて、どう見ても年には見えないオッサン、そして白髪まじりのおばさん、満面にほりのかなり深い線のあるおばさんなど、バラエティに富んで面白いというか、淋しいようなこの頃の会合となりつつあるが、しかし年に負けてはいけない、われわれも、残り少ない髪の毛を気にしてばかりおらずバリバリ働かねばならない、このたびご招待したお二人の先生のお話から感じた次第である。

以下、先生のお話の内容を集約し、両先生の近況を卒業生諸兄に紹介することとする。

前略 年の瀬も迫り皆さんそれぞれのお仕事に何かと多忙のことと推察いたします。

さて、このたびは、三年毎に開催する恒例の同窓会につき前渡東町の当番とのことで、各地区の連絡員の方のお手数を煩わして参加希望の有無をまとめていただいたところですが、貴殿には心よく参加のご回答をいただき、

さそい合せの上、でき得る限り営業車により会場にご出席くださる様申し添えます。

末筆ながらご機嫌うるわしくご越年の上、元気なお顔で歓談のできる日を世話人一同鶴首してお待ちいたします。

記

- 一日 時 昭和四十七年一月四日午後一時
- 二 場 所 市内那加新加納町「むらせ」
- 三 参加者 あなたもあなたも

以上

十二月二十五日

昭和三年会

世話人代表 永井 武男

同窓生

殿

「前略」

体も使える中に使わんとあかんそうです。しかし生産能力も、もう適当に終った筈ですが、適度ならいいそうです。(アハハ……。ワハハ……。の声あり)

頭の方も適当に使って下さい、頭の方も、体の方も適当に使ってこそ！。まあ長生きの秘けつは、いろいろとありますけれども、やっぱりもうこれで終った、という事を考えちゃ駄目だと思います。仕事にしましても、或いは何かにつけてしましても、総べてがもう終れりと思わないで、まだまだこれからということ、そこでねえ、最近私は、いま夢中になってやっている仕事があります。というのは、百年史を作るといふ私は決心をもっておりまして、ええ、この正月の三日間も、毎日原稿用紙を二十枚づつ書きました。元日はまあ十枚位でしたが、きのうも、おとついてもみんな遊びにいつてこいといつて、みんなをおっぱらつてしまつて、一人で留守番を兼ねて書きつづけました。ちょうどここにテープコーダーがありますが、今日の声を集めて、今日の模様をおそらく誰かがあとで集録されるだろうと思つて、最初から私は喜ん

ねえ。そんな思い出がみなさんそれぞれ沢山あると思います。まあ、二枚でも三枚でもいいから皆さん、今日のこの集まりを収めて、あとからボツボツ廻して、その中のいい所を拾ってもらえば立派な記事が出来て、おそらく原稿用紙の二十枚や、三十枚は出さると思いますから、今日は、そうした会として載きたいということ、是非お願いしたいと思ひます。それから、あんた方のクラスは、たしか男子が多かつた筈ですけども、おそらく半数近い人しか集まっていないうことは、「支那の大陸に、或いは南洋の果てに今もなお、おそらく静かに眠り続けている人があると思ひます。」(注・ここまでくると、先生の声は小さくふるえるようで、全員には、おそらく聞き取ることが出来ない位となる。おそらく、先生の頭の中には、在りし日の子供だった……そして成人して、元氣に出征した同窓生の軍服姿が思い浮かんで、感慨無量だつたと想像される。)

まあ、皆さんは、その人の分まで、将来生き残れる有難さと思つて、うんと働いてやる、うんと努力してやる、というようなお氣持になつて載いたならば、なおしか有

しております。この模様を誰かに原稿に書いてもらつたら、非常に立派な、面白い回顧録が出来ると思ひますから、是非これをおやりになる様に、一つお願いを致します。

ええ、現在恩師の方々から十二名と卒業生のお方から十八名の原稿が届いております。

それをだんだん読んでゆきますとね、随分面白いのがございます。一つその話をしますと、「あれっ」と思つた事がありますが、奈良に修学旅行にいつた、春日山へ登つた、「先生、山の上まで行つてもええか」といつたら「うん、ええ」とおっしゃつたので上に登つたら、また上につながつていたので、そこに行つた、そしたら、まだ上につづいていたのでとうとう三つまで上つてしまつた、山の上というものは、ここでもう三つまで上つたらまだあつた、といつて下りて来たならもう一時間以上も経つていた、時間觀念がないもんだからしてどんどん行つたら、あとで大目玉くらつて、二月堂なんか見学する分までやめてしまつて、「お前達がわるいんだ」というて後でおこられてしまつた」といふ事が書いてありましたが、これなんかちょっと私も想像もつかん話ですが

難いと、まあ軍縮に身をおいた私としては、それらが本當に耐えられんところでございます。

それから、あんた方の年令が、今度の三ヶ年の一時恩給のさかい目になりそうでございます。年令的に……だからして連続して三年ある方は、まあ履歴の申立てをして下さいまして、国家からもらえるものはもうという方面にもあつて載きたいと思ひます。それから市内(田村)在住の方はほとんど全部集めましたので、いまその手配をいたしております。その問題につきましても、昨年十二月十七、十八日の両日上京いたしまして県選出の各国会議員にもお願いし、それから関係の機関にも事情を訴えて、何とかしてくれと、今度の立法が出来なければ、来年でも立法の運びにしてくれとお願いもいたしてまいりましたから、……私自身ではございません、皆さんのために……といふつもりでやっておりますので、常に私の頭は、そうした方面に働いております。その方面に頭を働かせております、で、おれは隠居になつたとゆうて、孫の守りをするといふことは私は一切いたしません、孫を背中におぶつて歩く人を見ると、ああ呑気だ

なあ、と思うけれども又反面に、気の毒だなあ——と私は思います。あんな事をして、毎日を暮らさなならかなあーと思つて……

まあ皆さんも、そういうつもりで、中にはもうすぐに孫のある人がありそうですが、孫の守りをするのも結構ですが、それはむしろ気の毒だ、と思います。それよりもほかの方面にもっと仕事をさがしなさい。と私はいいたいと思います、がそれはまあいろいろ家庭の都合もあると思います。

息子がもういっぱし、ジャンジャンやってくれば、おじいさん、おばあさん、邪魔になるのであつちに行つておつてくれ、ということ一人でぶらぶら歩くことももつたないから、孫でも連れて行こうかということにもなると思いますが、兎も角、生き甲斐のある生き方を、そして常に何ものかをたくんでおる、金もうけでも結構ですよ、或いは、どの方面でもいいからして、お互いに寿命一ぱい、兎に角百才までと決つておりませんからして、百才以上でも結構ですからそうした大きい希望をもつて生きたいと思ひます。

いかん、ということ、病氣しておつても元氣でおりさえすれば、そりゃ、痛い、痛い、カユイ、カユイという時はいかんですけれども、平素は朗らかにやろう、自分は病室もあの一、個室である一人きりで淋しいで初め手術のあと一週間ばかりは個室でしたが、あとはみんな六人の部屋、四人の部屋へ行つてまあみんなが尼僧なるが故にみんなから敬遠されるんじゃないかと思つたんですけど、みんなの人から、まあ、あの面白い人じゃ、ほかからかなんじゃ、若い気持ちの人じゃ、といわれてほめられるのも平素の今の加藤先生がおつしやるとおり、寝ていても何かを考えておらなきやならん、と……そうすると頭がぼやーとして来る、私の様なかだでも、只眼を手術したら三日間は安静や、といわれたんですが、あの、安静やで安静にしとつたら益々弱くなるけれども、ただ頭だけ、頭だけで、それだけの間を三日間のうちでも、手足は動かしづめでおらなあかん、それで、これから面対見（注・附添い）が来ておりましたけども、二日たつて土、日曜日は先生もおられんし、日曜日はだあれも来んで、それだけの間我まんしておつて下さい、

まあ駄弁を弄しまして失礼いたしました、どうぞよろしく。（拍手）

——以上加藤嘉雄先生——

私も加藤先生よりは約十才年が上で、七十八才です。それも満才でして七十九才と二ヶ月です。

（ホー・と全員あきれ顔して、顔を見合わせる。）
じゃけど、まだ何処に行つてもまだうしろから見ると六十五・六かといわれます。体が小さいといったこともあるでしょうが、然し、いつでも元氣がええ、元氣がええといわれて、まだこの間も、あのCBCの方の朝の放送ですが、十五分間の……それを一つ書いてくれといわれてまあ書くんですけど、今この年末に眼の手術をしましたもんで、現在メガネをかけており、メガネが三色あるんです。仲々骨が折れるんですのでよう書きませんが、去年はまた、一番悪年で、三月から四月にかけて腸閉塞という病氣で腹を切りました。そしてまた、十月の終りから十一月にかけて眼の方の手術をしました。まあ、いっくら手術しても口だけは矢張り達者で、みんなとおしゃべりもしましたが、やっぱり元氣でなけりやな

といわれたけれど、夜、夜中に起きて勝手にぶらぶらしました。やっぱりまめなもんでも、ねとつたらあかん。いっくら年をとつても何かこう……することが出来たら箒をもつて土を掃いてもええし、そこらを運動してもええで、まあいまの健康法、健康法についても、私は今迄はよかつたんですが、あやまちで腸閉塞もやりました、それから眼は、これ……余りにもなが年の使い過ぎじゃないと思ひます。まあみんながああ、今の加藤先生と同じように年を取つたで孫の守り、孫の守りも結構ですけど、やっぱりまあ、健康でやっぱ運動もせにやあかんと思ひます。

わたくしの健康法は、自分は七十八までもなつたんですから、しかしまだ健康じゃ、健康じゃ、声を聞いとるとラジオで、あのう岐阜ラジオで私は五回程放送もいたしました、あの人、あんなにくつですか、といわれて私は、七十三です。あの一仏教徒大会ですねえ、全国の……あの時三回と、あと二回放送しましたが、この人の声は若い人の声じゃといわれて、いいえ七十五です、という声に張りがある、とこいわたれた事もある

るがやっぱり、これは頭の持ちようじゃと・・元気でなけりあかんということを考えてやらなければいけないと思ひまして、まあ一寸の泣き事でもそんなこと我慢して、ほかの方に大きな声でそうしてにぎわしい、まあ何と申しますかね、ほらふく、ほらふいてはいけませんけどそんな点で声も使わなくてはいかんと思います。声も使わなんだら益々低くなってしまうと思います。

そこで例の私の本職のお経もじゃ、まだ小さな声でお前は八十になったでまア大きな声も出まいでこころアーですくんどれといわれると幾分しゃくにさわりまされどもできるだけ張りあげてお経を読んでいます。で声も使わなあかん、眼も使わなあかん、耳も使わなあかん、体全体を使つてこそ長生きの秘けつじやと思ひます。

皆さんの前でまあ、こんないらんことをしゃべつて、ほらのようなことでございますけども、一つみならつて長生きしたかつたら一つ……（拍手）

（注・以下は先生も嬉しそうにえみこそ浮んでいたも

崎工場の裏におつたの、それでね、その時私はちょうど初めての子供をお腹に身ごもつておりました。それでね、その苦しみを耐えて、命からがら一里もある様な舟伏山にね、それも毎日あのいやなサイレン、空襲の警報が鳴ると家で寝たこともないような防空壕の中で、これ本当なの、蚊に喰われるとあかん蚊帳をもったり、ねえ、夏ね、蚊帳しよって山に逃げたの、そして近所の人と、川崎の工場が空襲でB29のために爆撃されて燃えた、航空機も焼けた。おなじ日にね、あの川崎、航空機、精機が一べんに爆弾と、しょう夷弾のために燃えた、六月二十四日の午後ね、その時に先にお話した舟伏山に逃げて来て、そしてね、あの耳と目を伏せてね、そして目をひらいてあたりを見廻した時に隣にいる人とね、本当にね、ともに手をにぎり合つてお互いに命が今日はあつたが、明日という日にね、又命があるかどうかわかんけどね、今日は先づ命が拾えたとお互いに手を握り合つて、隣近所の人とね、あの一里の道を戻つて来たり、そうした苦労をしたという戦争の時の思い出が……あんまり軍歌ばかり歌うと、思ひ出すの、その時の

の、何をお考へになつてか涙ぐんでおられて、声にはならない、拍手しきりのため声にならず（略す）

石屋良仙先生

以上両先生のお話のあと、宴席とかわり、互いに盃を交わし、数多い思ひ出話に花を咲かせたが、そのうちに歌も飛び出し、（春の小川・麦まき・異国の丘・戦友・水師営の会見・父よあなたは強かつた・など）語る者は語り、歌う者はうたい時の立つのを忘れたが、やっぱり一番苦しくもあり、思ひ出深いものは軍隊生活、女子の場合は留守を守る戦時中の苦労話だった……そのうちに、次のような意見も出る。

あのねえ、ちょっとちょっと、皆さん、私の意見はあんまり道理か道理でないかはしらんけどね、あんまり軍歌ばかりを歌うと戦時中の私達が国内で、みんなとともに毎日空襲、空襲でねえ、たんとも背負えん食糧しよつて、一里もある様な舟伏山へ毎日毎日逃げたの、夜となく仕となくねえ、私は蘇原に居りましたの、蘇原の川

苦しみが又いまの人生に対してね、あした生きる楽しみもあるけれど、今日ここに至つてね、ここに来た人、集まつた人はみんな幸せな今日一日があるんやからね、もっと楽しく、戦争は忘れてたのしい今日一日を過ごしたいと思うの……だからね、軍歌をうたつた人、うたう人が悪いというのではないけれど、みなさんの気持ちもわかるが、私たちの気持ちにもなつてほしいの……

私はこういう風に感じたの……だからね、戦争に征つた人も苦しかつたでしょう、本当にご苦労様でした、だけれども私達も苦しかつた、それなりにつらかつた、えらかつたから、私たちの気持ちも察して下さい……お願ひします。

——以上 河合かずゑさん——

この話を聞いて、一同は静まりかえり、各自それなりに考へたであろうが、そのうち「わかつた、わかつた」という声も出て、にぎやかさはまた戻つて、再び思ひ出話や、若かりし頃の、その当時なりのロマンも飛び出してしばらく続いた。

最後に幹事の発声により、西先生のご長命とご健康並びにお互いの発展を祈って、万歳三唱して解散した。

兄の思い出

永井 勇 郎
(弟 永井武男)

本校卒業生の一人である兄の恩師(本史編集委員長)加藤嘉雄先生の特にお許しをいただき、その兄の思い出をここに掲載させていただきます。

古語に「逃げた鰻は大きい」とか申しますが、弟の私からいうのはおこがましい次第ですが、本当にいい兄でした、多勢の弟妹をよく面倒見てくれた兄でした……。勿論、よかった、よくしてくれた点だけが四十年余経過後の今日も尚、私の記憶として深く刻みこまれ、脳裡に残りそうして思い出されるのかも知れませんが……。或いは、こうなる運命にあって特別によくしてくれたのかと考えることさえ時折ありますが……。

昭和六年四月、前宮村役場書記としてお世話になっていた頃、十六円の月給の中、十二円で自転車の新車を買ろうじて手に入れて、「武男、うちから三分で役場まで走れるぞ」といって喜んで話してくれた事もはっきりと記憶しています。日の出前から畑の仕事をし、出勤の時間ぎりぎりに飛び出し、一日勤めて又帰って野良仕事に精出した兄を確かに覚えております。

雨の日は藁細工をしたことも……。子供ながらに畑についていても、仕事をしながら勉強の話をしつついろいろと教えてくれたものでした。

仕事の手を休めて、私の筆持つ手を取って、習字の練習をしてくれたものでした。

如何なる心境からか、どうしても海軍に入団したかった、志願兵として、合格したかったことは当時子供だった私にも、確かに感じられていた事実でした。三度までも受験したが常に不合格で残念がって帰った顔、しょんぼりとした顔が今も尚ありありと思い出すことが出来ます。

最終的には海軍出身で、当時在郷だった一宮市の叔父

をたずねて、今伊勢村に寄留(今という住民登録)してやっとなり志願兵として採用が決定して喜んだ兄でした。

いつも胸囲が規定より一厘内外の不足ではねられたといっちは残念がり、裸になつては両腕で交互に胸をたたいていたものでした。子供心にあんなにしたら胸囲が大きくなるものだろうか、と思ったこともたびたびでした。

木曾川育ちの河童だから水泳は得意だったが、その上海軍に入団するんだといっちは、なお体力を鍛練する目的で、水面に濡かと思う程の水蒸気の立ちこめる冬の朝も水中に飛び込んで泳ぐ姿も遂この間のように思えてなりません。

念願叶って昭和八年五月一日、呉海兵団に四等水兵として入団し、年を経て主計科に転科し、普通科を経て高等科経理術練習生として、東京築地の海軍経理学校に学び、卒業後任官して舞鶴軍港、佐伯、呉海軍航空隊等地に転動しましたが、特に記憶として残っているのは舞鶴に勤務の時代でした。

六年生の年末、年始の休みの期間中でした。私の初めての一人旅を心配してくれて岐阜→米原→敦賀と当時の

ことで汽車は乗り換え、乗り継ぎの旅でしたが、先づ米原駅で下車してからどの階段をどの方向に向って上り、どのホームに待つてどの汽車に乗れと、実にこまやかに一つ一つ前もって手紙で教えてくれました。舞鶴滞在七日間でしたが、休日には軍港内の見学やら、天の橋立の松の間に建つ岩見重太郎の碑の説明も、かの有名な天の橋立マキノゾキの石やら、山上から眺めた若狭湾の風景もはつきりと今もなお忘れることの出来ない思い出として残っております。

数限りない思い出は省略して

昭和十七年十二月、大命降って海軍陸戦隊として呉から横須賀軍港に来て出陣予定の途中、「岐阜駅〇月〇日〇〇時〇分通過するから出よ」の連絡がありました。折悪しくその頃私は各務原陸軍病院に下士官候補者として教育中だったので、内務班長の外出許可証がとれず、岐阜駅まで行けなかったが、兄としてはその時既に覚悟は出来ており、私に対して最後の話をしたかったのだと想像し、今なお当時の内務班長の非情をうらむことさえ

ありますが、当時としては私情は到底許される筈もなかったとも考えられます。

(注・その内容はあとに掲載する記事の中に記載されている)

吾にもよく教育期間中に、教育終了後はやがては戦地に出るんだ、遺書を書け」と命令されて頭をひねって作文したものだったが、どうしても実感が出ないままに思うように書けないものでした、実際に今その場に直面してこそ出来る問題だろうか。

いま死地におもむき航海する船中でしたためるこの心中たるやおそらく筆舌につくしがたいものがあつたであろうと……おそらく当時としては、僚友に送られ編隊組んで、次から次から一機づつ飛び去つた特別攻撃隊員もみんな同じ心境だったことと追憶するものであります。全員が死を以て無上の君に忠、親に孝だと心得えており、又必ず勝つと信じて……

……そうして我々の死を以て、日本の国は大きくいまここに兄の「出師に當つて」の記録を原文のままを掲載して各位のご参考に供し、当時の戦友の心境を紹介

介し、年若くして国のため尊い生命を投げ去つた数多くの戦友の遺志をつぎ、その死を無駄にすることのないよう、あらん限りの努力を傾注して、社会のため、人のためにつくさんことを誓いつつ……

出師に際して

昭和十七年十二月八日(航海中)

出師に際し所感

大東亜戦下選ばれて名誉と伝統に輝く帝国海軍特別陸戦隊の一員となる。重任懸りて双肩に在り、之男子の本懐たり、吾等今や準備全くなりて母港を後に征途に上らんとす。吾等を待つもの炎熱酷暑か、強風怒濤か、非ず反攻対勢を整へたる強敵米英に外なれず戦局は今や最高潮に達し前線万里北海に、南極に栄ある軍艦旗は燦として輝く此の秋に当り祖国の期待する処即ち光榮ある我海軍特別陸戦隊なり

先輩の築き上げたこの名誉と伝統とを継承し輝かしき大日本海軍特別陸戦隊の歴史に更に更に輝しき光彩を添へむため勇奮健斗全力を傾注して御奉公の万全を誓ふ

出撃に当り

(勇郎より)

一、生還は期せられず、私事を思へば御奉公の邪魔になるのみ従つて全部御両親、春子(紀子、道子)兄弟姉妹、親族御一同の善処に一任す。

(一)御両親へ

特別の愛撫を賜りたるのみにて御恩返しが出来ざりしを残念に思います。

然し軍籍に入りて天晴れ皇国のために征く、戦死を以て無上の孝行とさせて戴きます、多数の同朋を育まれたる御勞苦子の親となりて始めて分かりましたがお先に旅立たせて戴きます

今後は養生第一に安樂な暮しをされん事を祈ります
(二)松のお母さんに

色々ありがとうございます、御無理のなき様御幸福にお暮し下さい

(三)鉄二

治道 兄様へ

真市

別にありませんが春子と二人の子供の事だけ御親達

に計つて呉々もよろしくお願い致します。

四春子へ

たった二人で高砂の契を結んだ人生航路、荒波も強風も難なく乗り越えて順序よく渡るのを楽しみに進んで居たが、先に征く

身を軍籍におく者の常だ、覚悟は二人の出船の前から出来てゐた筈、驚かず悲しまず、落ち付いて二人の子供の居る事を忘れるな、私のために尽して呉れた心をそのまま子供に分け合つて呉れ、

子供は幸に丈夫で発育も良好だ、立派な良い子に育つて呉れる、それ以上の事はない、

それがため今迄の幾倍の苦勞があるか判らない、決して力を落すな、益々奮ひ立つて進め、人を頼つてならぬ、が親や、兄弟(姉妹)や親族の方々には相談をする事、一人で苦しむ前によく計れ、

流石、勇郎の妻だと云はれて呉れ、強く、正しく優しくあれ、

戦争は何年かかるか判らない、然し日本は必ず勝つ只長くかかるだけ、それだけ個人にかかる苦勞も多

い。

私の肉体は南海に散るが、私の魂は、春子の生涯その身辺にあつて守つてゐる、どれ丈書いても終りはない、唯希望の要点のみと思つても感慨無量だ体を呉々も大切に、改めて云ふ二人の子供をよろしくたのむ、三人の健康と多幸を祈る

元気で

さようなら

(四) 紀子へ道子へ

お父ちゃんの事はお母ちゃんが一番よく知つてゐる、からよく聞いて呉れ、母と二人で存分の面倒を見てやりたかつたが止むを得ぬ、その代り母によりしくたのんでおいた、紀子は道子のよいお姉ちゃんとして二人で仲良く成人して呉れ、

お前等が大きくなつた時日本は必ずもつともっと大きく強くなつてゐる、

紀子はもう父の事を覚えてゐるが、道子はまだ何も知らない、二人とも良い子だ、お前達の前にどんな難関が横になつて行く手をさえぎるか知れないがいづれ私がついてゐて切り開いてやる、丈夫な心を持つ

つて強く優しく正しく進みなさい。

さようなら

(五) ノ二

瑞岳殿 よろしく頼みます。

(五) ノ三

寿子姉さんあとはよろしくお願いします。

(六) 武男へ

春子と二人の子供はお前に頼む

(六) ノ二 隆、一子、マチ、良子へ

御多幸を祈る。

(七) 民三郎

熊三郎

栄三 おちさんに

寿三郎

色々とお難うございました

よろしくお願いします。

(八) ノ二 一宮のおちさん最後までありがとうございます。

(九) 親族御一同様 呉々もよろしく

(六) ノ二 宮崎秋雄氏によりしく

以上

二、略

「坊主頭の先生」

永井 武洋

昭和三十一年三月卒業

私は、今の仕事の関係からも忘れる事のできぬ思い出、それは十六年前、五年生の秋でした。担当は坊主頭の加藤茂夫先生、毎日ハット帽子でバイクに乗り、バタバタ、あの音が今も始業前、夕闇の校庭に聞えるかの時に想い出されます。……こう申しますと、あ……あの先生かと思ひ出していただいた方も。

ちようと教室は裁縫室のあつた下の古い建物でした。クラスの会計になつた私と磯谷君は、クラス費を集めて机の中にポント入れ、授業終了後、そのまま帰つたのです。(金額は四千円程でした)ところが翌日机の中にお金はありませんでした。……驚ろいたのは、私一人でなく、クラス全員が……大変な事になりました。まず会計の二人がクラスのお金を集めてと先生に説教され……私自身、本当にどうしたらいいか……困りました。その時先生はお不

動山で、お金がどこにあるか占つて、もらつてこい、と言われ、二人は、駆足で不動山の裏道を汗を流して登りました。

そして和尚さんに事のできごとを話し、占なつてもらいました。本堂でお経を読んだあと、「オミクジ」の様な竹の棒を二本引き出し和尚さんはウーンと言つたのち、クラスの身近な人が保管しているという占いが出た。確か占料二十円を支払つて、又裏道を走り下り、みんなに結果を聞いてはしがつた。クラスでは算数の時間だったが途中で先生に伝えたと、二度とこんな事にならぬ様にと又怒られた後。実は、私がお金を預かっているという言葉を聞いた。うれしいのか、悲しいのか、汗をふきながら、涙の出るのを我慢してコンチクショウ、と思ひながら……しかし今振り返つて考えると、五年の私達に非常に大きなものを教育して下さつたと。

前宮村から稲羽町に町制をひかれたのも、この年でした。みんな偉くなつた様な感じで、何度も何度も稲羽町稲羽町と書いていた事、学芸会に子供の Cutter がなく、村長役で出た私は、ネクタイだけを結んで出た、思い出

の五年生でした。

八年前のある文章

永井 原子

昭和三十八年度卒業

「一、二年のみなさん。今日はありがとう。お札に大変いいことばを、お教えしましょう。それは、

「少年よ、大志をいだけ」

という意味か、わからないでしょう。でも今にわかりようし、がんばるぞ」と思う時が来るでしょう。私達、卒業生にはこのことばの意味がよくわかります。又作った人は何を言いたいのかも、よくわかります。だからめあてにしてがんばります。

私達の一番楽しい思い出は、あなた達の給食当番、みんなおとなしく待っていてくれましたね。

みなさんはまだ学校に残るのですから、私達が贈ったぞうきんで、この稲羽東小学校をとつてもきれいにし、

又みんな仲良く協力してくださいね。協力の協という字は、力という字が三つも重なっています。みなさん、力を合わせ、がんばり、いつか国語の本にあの「少年よ、大志をいだけ」ということばが出て来たら、ああ、あの時言っていたなと私達を思い出し、いつもこのことばをめあてにがんばるとちがってくださいね。ではさようなら。

(原文のまま)

先日、何気なく昔の文集をひっぱり出してみると、こんな文章が目についた。小さな頃から、ものを書く、ことの好きであった私であるので、小学校入学当初の作文、詩(らしきもの)から、ごく最近のものまで大切に保存してある。原稿用紙一枚半ほどの拙い文ではあるが、これは小学校卒業の際の私の誓いでもある。

卒業式は講堂で行なわれたが、一、二年生とのお別れは運動場でするのが常であった。そして私が卒業生を代表して挨拶したのだった。六年生だもん。何かカッコいいことを言わなくちゃ。いろいろ考えた末、クラーク博士の「少年よ、大志をいだけ」のことばを「一、二年生に

贈ろうと決心した。果立ちゆく我々にとつても、今は理解できなくともいずれわかつてくれるであろう一、二年生にも、これほどふさわしいことばはなからうと思ひ、一気に書き上げた文章、挨拶の下書であった。文章の前半、目標にしてがんばります。のうち、目標という語は、検閲された先生により、万年筆で「めあて」ということばに変えられていた。その万年筆の文字も、今では少し色あせている。少しばかりふるえる足で二歩三歩と進み出て、一、二年生に向かってお別れのことばを述べた私と、キョトンとして聞いているかわいらしい彼らの顔が今でも思い出される。

あれから八年。あの時の一年生も、今年はもう中学卒業。高校受験に、就職試験に頭を痛めているのではなかろうかと思いつつ、給食当番の私たち、冬の朝のストーリー当番の私たちのそばでじつとながめていた彼らを思い出す。大きくなってしまっているだろう。私自身も来年度は大学三年。武者小路実篤の「この道より我を生かす道なし

この道をいく」。

を支えに、私だけの道を捜し、つくってきた。私は、英語の道を私だけの道にしたい。大学を卒業したら、私の得た英語の知識、そして、英語を話す人々や国々についての知識をもとに、少しでも人のお役に立てたらと願っている。それが、私だけの道であろうから。

私の最も好きなことばは、それは今では「この道より」であるが、八年前の「少年よ、大志をいだけ」がその礎になっていると、私は確信する。

小学校時代の思い出

永井 弘道

一年生(加藤うら先生)

麦の穂が出そろったころだった。授業がいやになって仮病を認められての帰途、村上文雄村長さんの通勤用の乗馬が、うしろからかけてきたことがあった。麦畑へはらばいになって馬の通過を待った時のこわかったことは、

どうしても忘れられない。先生をだました天罰だったと今でも思っている。今日では給食がきらい、先生がきらい、友だちがきらいなどの理由で登校拒否の子どもがあることは児童相談所の係のかたがよくいわれている。

二年生（丹羽貞子先生）

国勢調査の宣伝ビラが学校の上空でまかれた時だった折から西の風にのって、色々とりどりの紙片が舞いおちていくのを、じっと見送ることができず、誰いうとなく「拾いにゆこう」と、渡船場あたりの川原まで行って思いう存分拾い集め得意になって引き返した時は既に授業がはじまっていて学校中がしんとしている。おそろおそろ教室へ入ったまではよかったが、とうとう午前中黒板の横に立たされてしまった。

三年生（小野木紋一先生）

役場と板壁一枚を境にした、階段のある、二階が職員室になっていたうすぐらい教室で、お弁当の上へほころが落ちてきたり、時には先生の足音につれて、ごみなど

は一番やんちゃかなあ。と思った。そうでないことは今になってわかったが、当時は先生のお名前をきくだけで、それくらいこわがったものだ。

六年生（丹羽久克先生）

修学旅行で伊勢参宮をした時、朝熊山下駄の前歯を落してしまい、そのまま旅行をすまし、足の痛みをがまんして帰った時「どうして先生に言って買ってもらわなかったか」とおふくろが泣いて叱ったことがあった。おやじからもいやというほど、どやされるし、そんな気の弱い私でした。

高等一年（加藤嘉雄先生）

鶴沼郵便局まで先生の貯金を引き出しにお使いにいったことがあった。なれた手つきですばやく札をかぞえてわたされたが、先生から「かぞえなおして受けとってください。」いわれていたので、カウンターのかけで一枚一枚長時間かけて数えた時は寒い日であつたが汗が出たものだ。生まれてはじめての大金を持った緊張のせいかな。

も落ちてきたことがあった。和服で冬でも素足の先生は熱意のあまり、横を見ていたり、おしゃべりしていると容赦なくチョークの小片がとんできたものだ。これは先生の愛の鞭だと今でも思っている。

四年生（村上元之丞先生）

理科でこおろぎの学習の時、二三人の勇敢なものが昼休み時間にとつてきた元気のよいこおろぎをチョーク箱いっぱいにつめて先生の手のかかるのを肩づをのんで見守ったことがあった。ふだんと異なるふんいきに先生は気づかれていたことだろう。一笑してさっさと授業を進められて、一同あつけにとられたものでした。

五年生（丹羽久克先生）

始業式の担任発表で、「五年生丹羽先生」とときき、前記のように元気のいい者ばかりのクラス全員がしゅんとしてしまったことがあった。なぜなら上級生の話で「丹羽先生は一番やんちゃな者のクラスを担任なさるんだぞ」ということをきいていたから、「やつぱりはくらのクラス

掃途の道は遠く感じたが、金というものは必ず自分で数えなおして受取るべきものだ」と実地に教わった。

高等二年（横山鳳潤先生）

中等学校進学や、家事に従事するもの、他家へ就職する者があつてクラスも二十数名と半数ぐらいにへってしまった。先生の都合（横山先生は校長）で自習の日が多い一年でした。新校舎建築工事はじまり、奉仕作業もよくやったが、その時「落成したら新しい教室へ入れてやるとの約束がどうかなってしまつて、旧校舎の二階へ決定した時でした。約束が違ふといつて今日流行しているストライキをやろうと結束したが、どうしてか事前に発覚して目的を達成することはできなかった。後で別に叱られもしなかったことを思うと理屈はおつていたかとも思うし、先生がたにご迷惑かけたなあとも今でも後悔している一つである。子どもの時であつたが団結力はあつたなあと自負している。こういうことを思う時今の中学校教育のむずかしさが、又生徒の気持ちがよくわかるような気がする。

以上思い出の一端を書きとめて、ご指導いただいた七人の先生のご恩をしみじみと思いうかべると同時に、やんちゃな者をよくご指導いただけたものとただただ感謝しているひとりである。同級生も五十六名中十八名の故人があつて、この昔語りを読んでいただけないのが残念である。せっかくご冥福を祈りたい。

小学校の感想

永井盛三郎

光陰は矢の如しとか、歳月は流るる水の如しとか。私は明治三十五年一月、木曾の清流に臨んだ北島でうぶ声をあげました。あつというまに七十年、人生七十古来稀なりという古稀を迎えました。「学校えあがる」。どんなに嬉しかったでしょう。今のようなランドセルは見たくともありません。鞆もありません。お母さんに木綿縞のきれで四角の袋を作ってもらつて、かけて行つたもの

です。本袋といっていました。あの矢熊山の西麓、校庭に大きな古い杉の木が一本ありました。

四月一日入学式です。近所の上級生に手をひかれて、日の丸の国旗が立っている校門をくぐりました。西向き校舎で玄関のある左側が役場、役場の北室が一年生の教室でした。村上先生です。

ハナ ハト コマ タコ

をおぼえます。石盤に石筆です。石盤の字は消え易い。「ハナ」と書いて赤丸をもらい、消えないように家へ持つて帰るのが一苦勞でした。石盤がよく割れて、一年生のうちに、二回も三回も買ってもらつたことを覚えています。二年生は五島先生と二宮先生です。二宮友藏先生は三井からお通いです。雨の日も風の日も弁当箱かかえて徒歩で来られました。私は三井よりは近い、休んではいかにいつも先生にまけぬよう通いました。横着をして耳を引っぱられたことが記憶に残っています。三年生から六年生まで四か年間丹羽久克先生でした。親切丁寧に教えてくださいましたが、よくおこられました。私達も悪いるが、先生も短気でした。だからおそがい先生とい

うことになります。「これだけは覚えさせなくてはならん」という先生の親切さがあつたでこそ、今人並の知識をもつ基礎ができたんだ、否基礎を植えてくださったんだと感謝しているのです。

遠足はうれしかった。前の晩に父にわらしを作ってもらいます。母は朝早く起きてにぎりめしを作ってくれます。梅干が一粒ずつはいつた日の丸弁当です。菓子も果物も何もありません。五つ包んだ竹皮包二つか三つを白い風呂敷に包んで、右肩から左腕下へかけて結びます。紺紺の着物に袴でわらしばき。女子は同じスタイルですがわらしでなく、いつけぞうりといって、ぬげないよう足首に結びつけるのです。時代劇に出る服装です。一日がかりで犬山城までの遠足です。関の善光寺山まで往復したこともあります。水筒を持って行くことは知りません。山に行けば谷水を、里にゆけば附近の民家の井戸水をと、喝を医やしたものです。公害だの汚水だのなんという言葉はありませんでした。遠足でつかれたから翌日は休み。のんびりしていました。

大正三年三月義務教育の六か年を卒業しました。続い

て高等科の二か年です。義務教育ではないので、毎月十五銭の月謝を役場の収入役に納めたものです。一年二年合併で永田新兵衛先生です。修身は一緒に私共一年は二年の本、二年も二年の本、一年が理科の時間は二年は習字、算術は同じ時間で黒板を半分ずつ使う、こんな調子でしたが別に苦にもせず、自学自習をしいられるまに勉強したようです。恐らく先生は、たいへんなお骨折り、切りかえだつたと思います。五年三月が螢の光窓の雪で学校とお別れ、八か年の学友とも袂をわかつたのでした。

家業につきます。私は農業です。大阪に出た友人、東京に向つた友人。名古屋にも二、三人小僧入り、ほんとうに文字通り西に東に散ってしまいました。村に残つた十幾人が農閑期の夜学に出るのです。農業補習学校へ徴兵検査まで通うのです。昼間百姓をして、夜勉強、寒い冬は往復がいや、ボカボカ暖くなると、ねむくなる。出席率が部落の青年会の成績に影響するので、サボルわけにもゆかず、マアいやいや通つたという程度。やっぱり勉強が身についたのは、小学校時代です。

七十の手習とか、百になつて百色おぼえるとかいま

すが、それはそれとして理あり。記憶力の旺盛な時代は小学校時代に限るといっても敢て過言ではないと思います。この時代にご指導下さいました恩師の各位に

「ありがとうございます。おかげさまで」と何回も繰り返し申したいのですが、諸先生はもうこの世の人ではありません。

先輩もそうです。社会人として今日まで人並みの生活世わたりができましたのも、職場において、集団行動において、適切なご配慮とご指導があったからです。師の恩、衆生の恩、いかにしてお返しができるでしょうか。

前宮小学校が開校百年の栄誉ある歴史を飾ることのできますのは、母校の卒業生何千人の母校愛の熱意の結晶の賜ものとひたすら慶祝を申しあげて所感の一端を終わります。



野球の思い出

長瀬 勘 六

高等科一年生の時、始めて野球をやった。指導兼監督は丹羽久克先生だった。

用具は何もない。スポンジのボールを素手で受けていた。左手のてのひらが真赤になって痛いというものだと思っている。よくがまんしたものさ。近隣の小学校で試合をする相手もなく、上手になったのか、下手なのかわからぬが、毎日毎日先生におこられては練習していた。丹羽先生はいたって大きい身体だった。おこられる声も大きかった。先生の言い付けだから服従しなければならぬ。家へ帰ると両親から「マリナゲばかりやって勉強はええか」とおこられるが、幸に兄が応援してくれたので勉強より野球が好きになってしまった。投手を命ぜられて、狭い運動場がよけいに狭くなって思いきり投げられぬ。狭いと不平をならすと各務野へ行けと先生に

しかられる、それでもそのうちに各務野へ進出して練習をしたことが度々あった。

各務小学校の高等科生徒と試合をするようになった。土曜日の午後だったと思う。一里以上もある各務小学校へ遠征した。行ってみると運動場は我が校より広い。選手も体格がよい。一寸呑まれた感があったが、丹羽先生のコーチで試合が始まった。やってみたら何のことない楽勝した。第一回の他校試合に楽勝、こんなうれしいことはない。

先生はいつも私共をはげましてくれた。田舎の学校だって町の学校に負けるものか、練習だ、練習だ。

岐阜市の学校と試合することになった。岐阜高等（現在の京町小学校）へ行くことになった。相手はユニホームは揃っている。グローブもミットもみんなもっている。前宮チームはユニホームはない。ミット代用品がきばつた。破れたゴムボールに紐を通して中指に引っかけているだけ。グローブはなし。捕手の永井君は投手の僕の投げる球をよくリードしてくれた。僕は内角の球が良く入り敵を苦しめたが、もっちゃつととい

うところで快勝には至らなかったが善戦した。

その後先輩や後援会からユニホームや道具一式を買ってもらって猛練習を続けた。田舎学校だって馬鹿にするな、前宮の名譽にかけて岐阜打倒を目標にと練習に余念がなかった。八月の夏休みに再び岐阜と試合をすることになった。その事を知りながらどうしてか知らぬが僕は名古屋へ行っていて当日の試合に出場しなかった。先生からも部員からも怒られた怒られた。並大抵ではなかった。どうしてこんなことをしたのか今でもわからぬが、責任感がなかったことは確である。今でも当時の話があるとそのメンバーからひどく野次られる。私のこの世に生のある限り話題が消えぬと思うと、責任感がなかった野球部員に申し訳なかった。すまぬことをした。謝罪しても取りかえしがつかぬ。クラブ組織の重要性和責任の重大性が今尚頭の中にこびりついている。

（岐阜市日の本町在住）

学校の思い出

南原紀子

(旧姓 永井)

昭和二十六年卒業

矢熊山のふもとに学んだ六年間、思えば、終戦の翌年、自分の名前さえ、やっと読み書き出来る程で、机と椅子に書かれた名前を、さがしまわって漸く見付け机の中に本や筆入れを入れて、上からフタをしたものです。たしか二人ならびの机だった。低学年の時は北の校舎で授業が始まると、東の端から西の端まで、きれいにはきものが並べられていた。休み時間は裏庭に出て、マリつきなどして遊んだ。茶の木の間を出入りしてよく叱られたものです。それもそのはず、新芽が出ると学校のまわりの茶摘みをして弁当のお茶として飲んだのだから、大切なお茶の木だったにちがいありません。南の校舎に行くには、渡り板を通って行ったものだ。丁度中ほどに、井戸があり宿直室があった。あの井戸にもいろいろ思い出がある。

ある。雑巾やバケツを持って並んでみたり、足を洗うのに押し合ったり、私の一番の思い出、それは虫下しの薬をのまされるとき、いつも薬がのどを通らず、井戸水を何度口に入れてもダメ、それで、こっそり薬を捨てて教室にもどったこと度々、中庭にはクラスごとに立札がたてられ、花壇が作ってあった。カンナや赤や黄色い花など、印象に残っている。音楽室や裁縫室に上って運動場を眺めるのが楽しみだった。下から鉄棒をゆすって地震と間違えさせる、イタズラっ子もいた様だ。玄関の前の二宮金次郎の銅像。小さい時、よく先生から偉い人になるんだと話された。学芸会と云えば講堂に、あふれんばかりの人で、共に笑い拍手を送ったものだ。運動会は村祭の翌日で、村中の人が集ってとてもにぎやかなものだった。高学年ともなると一年生の教室の掃除をさせられたものだ。廊下をまっすぐふいて走る競争をよくした。走らないとヘビの様にまがってしまうからだ。とてもよくみがかれた廊下だった。子供会でいろいろ約束をした。廊下を走ったら、戻って歩くとか、渡り板の曲っているのをまっすぐするとか、決めたものだ。部落子供会も高

明治時代の母校

丹羽金司

(明治四拾四年卒業生)

学年の頃にできた。夏休み中の早起き会、お宮の掃除など、又七夕祭には、皆さんで、笹に多くの短冊を飾り細でとれた、スイカ、キュウリ、ナス等を供えて、歌やおどりを、先生、父兄に見てもらい楽しんだものだ。下駄やゴムぞうり、風呂敷包みをカバン代りにかかえて通った学校、暖かい先生方の指導のもとに、澄んだ青空の下に、清い木曾川の流れを前に、矢熊山を仰ぎ、とても良い環境に恵まれた、前宮小学校、先生方の顔が浮んでくる様だ。聞くところによると、あの木造の校舎が鉄筋に変ったとのこと、なんだか、さみしい気がします。でもこれも時代の流れ、仕方ないことでしょう。だが私達の胸の中には、いつまでも、大切に木造の校舎、そしてやさしかった恩師の姿を残しておきたいものです。幼い日の楽しかった思い出と共に。

おわり

(豊橋市新千里西町在住)



此度は母校の名誉な百年祭として誠に御目出度く衷心より御祝詞申し上げます。さて私はご承知の如く甚だ浅才悪筆にて思出話を筆に現し文章にままとめると言ふ事は頂度小学生が最も苦手の宿題を受けた時の様な感じですが、實は種々思案致しましたが折角御骨折り下さる方々に申訳無いと思ひ昔の記憶をたどって恥かしい綴り方を差し出す事にしました何卒御笑読下さい。我が母校は村の中央不動山の西麓に位し前に木曾川の清流を望み本当に良き環境に恵まれた所です。吾等入学当時は日露戦争の始めにて村の戸数も百七拾余戸にて、校舎も古びた二階建の校舎で其中に村役場も同居し本当にささやかな小学校であった、でも校庭の真中に大きな一木の老杉の木がでんと根を下し一人で校舎を守って居る様な堂々たる姿であった。校長は村上元之丞先生とて長年勤続のお方と聞

いて居りまた、小生等四年生の秋修学旅行で、宿二日の予定で名古屋へ行く事に成り佐藤先生に引率され早朝出発草井の渡し場より舟にて下り東海道線木曾川駅上り汽車にて名古屋着き下車後市内見物を終り旅館にて夕食後お待ち兼ねの菊人形を見せてもらった。兎に角汽車も電車菊人形旅館皆物珍らしき物計りで誰もが一番印象に残って居る事と思ひます。翌日は名古屋駅より一ノ宮駅で下車明神様と言ふ大きなお宮に詣り境内で弁当を食べ少し休んで徒歩にて帰る事に成ったが此の道のりが何と十二三キロ小学四年生の子供には随分大変な強行軍でした。始めの間は互に楽しかった事などを語り合ひ乍ら元気に歩いて居たが途中から話も無く落こ者も出る様に成り先生も大困り生徒もくたくたにてや々と夕方に帰りました。が思ひ多き遠足であつた。次に恩師より幾多の教訓を受けたが中でも未だ心のどこかに残つて居る一ツ二ツを思ひ出したままをお話し申します。先づ村上先生の「實る程頭を垂れる稲穂かな」此の句は先生が身を以て實行された名句にて厳格な先生の御姿が忍ばれます。其の半面又面白い話があつた二学期の始めの事で月も終つた或る

日修身の時間正月の行事など色々お話のあと笑ひ乍ら、俳句が出来たと「元日や餅で押し出す去年のくそ」一同腹をかかえて大笑ひ致した事もあつた。本當に温厚なお方でした。丁度其年の末頃学制の改正に依り義務教育が六年と成りましたが四年生卒業にて級友は半分位になつたがクラスはふえたので自然先生も岐阜の有名な市立校より若い新任の先生が校長としてこられたのである。色白にてチョボひげの有る美男子にて永井牛太郎先生と申された。右の次第にて校舎も手狭に成つたので東隣の竹藪を切開いて校舎も新築されるやら續いて高等科も併設される等實にあつたらしい変動期であつた。

此の様な時期に當つた小生達は六年高等科と小学校で三回も卒業式をして頂いた組は前代末聞の事にて上級生とし五年間本當に横着物計りで随分先生方を困らせたり良くしかられた者です。永井先生は今我国は日清日露のや其他数度の戦いで外国に大きな借金があるから君達は常に進取の気性を養い独立独立自立自営の精神を忘れるなど幾度も教えられました誠に良き金言であつたがさて「言ふはやすく、行ひは難し」にて實行は中々出来ませ

んでした下手な長談議はこゝらで終りと致します。

之れは余談に成りますが四五年前に在住の旧友から五拾何年ぶりに同窓会をやるからとのお招きを頂き七十の坂を越えた老人十二三人が常貞寺に集り本當になつかしい昔話を語り合つて楽しき一日を過した事など思出の一つとして付け加えました旧友の皆様の御健康を御祈り申し上げます。



前宮女子青年訓練（昭和19年）

望郷あれこれ

丹羽 武男

昭和十八年卒業

新聞テレビは二十八年振り発見グアム島の生残り日本兵横井氏の報道でもち切りだ。断片的なニュースでは、天皇を信じ軍人としての精神構造が、支柱となって耐へ抜いて来た様だ。戦後の日本人が捨て去ったものを、持ち続けて来た人に思へてならぬ。そう自分も三十数年前を振り返って見よう。不動山麓の校庭、その一隅に杉の大木があった。長い年月を、経て来たのだろう。幹は風雪に耐へて蝕んでいた。堤防下で応援歌の練習、岩につまづき転んで泣いた、運動会。古い校舎。三月十日の旧陸軍記念日校庭に作られた舞台の、芸者姿が子供心に異様として映ったものだ。新校舎の建設も忘れ得ぬ、大きな出来事だ。木曾川の河原から、砂だの石だのを小さな体で運んだ。どうして何を使ってやったものか、もう記憶も薄らいで来た。時代は日支事変より太平洋戦争へと

拡大されて行った。鎮守の森より出征兵士を送り、校庭では戦死者の村葬儀がしめやかに、行われる様になって来た。高学年となって、益々時局の重大さを知らされる。春は桑の皮、夏休みには、乾し草、あれは軍馬の飼料だったのか。秋ともなれば、ドングリ集め、それらの荷造りが大仕事だ。ヒビとアカギレの手が荒縄で、余計ささくれて辛い思をした事が脳裡に浮ぶ。楽しい事も多々あった。紀元二千六百年の奉祝で神輿をかついだ？いやさわった程度が本音の様だ。ゴムマリがなく戦勝記念で一ヶ貰った時の喜しさも忘れ得ぬ事だった。然し回想すれば、ほろ苦き思出がよく強く印象づけられるのである。それにしても、師恩の諸先生は如何にしておみへだろう、さぞ高令を召しておられるだろう。戦火も僅少の被害で済み、敗戦となった故郷に、混沌の年月が続いた。時代は復興より成長期と変転し、名実とも村より町市と変って来た村を離れて二十余年、帰郷する度に変って行く郷土に、一抹の淋しさを禁じ得ない。夢のかけ橋が架かり、立派な道路が整備されネオンさへ、またたく光景に目を見はる思いだ。何時までも昔日の山村を望む方が時代錯

誤と云わねばならぬだろう。騒音と公害の都会に住みつくくと、時として草深き生地が懐かしく想起されるものだ。然し山肌は削り取られ、細い昔の道をダンプが走る現状を見て、発展途上の苦悩も又一入で、あらうと認識を新にする。徒らに回顧の情に浸ってばかり居れぬ現実だ。故郷は遠きにありて思うもの、わが生を育んでくれた地の前途に発展を期待し、じつと見守って行きたい。

郷土

ニワトミヲ

昭和七年卒業

お不動山、そして草井の渡舟場の松林を母の里帰りについて歩いた砂地の感触が、時折想出される。戦前、戦中、戦後、走馬燈のように歩いた人生の殺伐さの中に、暖かい記憶が山と川との間から湧いて来ます。

若干でも思考力がつき、周囲の人間に関心を持つようになつてからの、友人、知己、仕事の仲間、学校は中途

半端だけれど、飛石のように一通り授業料だけを取る機会を造り、其の間教授とか云う人にも接する事が出来ましたが、尊敬出来る人が案外少なく思われた。時折脳裏に浮かんだのは、丹羽久克先生の人柄でした。大人？になつてあの方と話し合つてみたい。相談してみたい。と思つた事は私の人生航路に度々ありました。若しかすると私の生涯で最も尊敬出来る人になるんじゃないかと考へる事も有ります。察り減つた教壇に立たれる先生が、お不動山以上に偉大な人間に思われた事もあります。

戦争に突入して奇しくも加藤先生の部隊に入り、当時難関でした幹候バスに特別配慮を受け、私の生死の分岐点をつくられた事も、郷土が糸を引く運命の一コマであつた事と、生きている自分を振り返り感謝の気持がわいて来ます。

時折隣村のゴルフ場から、郷土の見覚えのある山が壊されるのを見下したり、工場、住宅、近代橋がなつかしい想い出を消して行く様子を見る度に、郷土への愛着がつのる今日此の頃ですが、現在どうやら人間並の生活を

させて戴き、もう一步前進して、何か郷土への思返し出来る立場になりたいと、心の一端に希望を持って生きています。



故 丹羽久克先生を偲ぶ

丹 羽 友 衛

大正八年三月卒業

丹羽久克先生と言へば、当時前宮小学校出身者は言う迄もなく、教育界、其他一般社会に知らざる者はなしと申しても過言ではないでせう。

先生は前宮小学校教員として、四十有余年の永きに亘り勤続奉職せられ、其の余暇に家庭を省みず、自ら卒業社会事業の育成に貢献せられた事はあまねく世人の知るところである、其の長きに亘る先生の御恩功績は、山よりも高く、海よりも深く、数限りのないことは、前宮校

秀生が多かったのである。

如何に先生が自己の重責を感じ、生徒に対し其の責任感を以って教育に熱心であつたことを物語るものであります。

先生は斯様にして自己の教職を天職とし忠實多忙に抱わらず、其の余暇に於ても、家庭を省みず、青年、其の他に対し、社会教育の指導に専念せられたる事は世の知るところであります。

当時青年会と云ふものは一般的に普及していなかった時である、私達長平部落に於ては昔の若衆会が農友会と改められ、先生は率先其の会長となり、(後の青年会)其の指導に専念せられたのであります。

農業の普及は言ふ迄もなく、青年修養と相まって、武道精神を志し、剣道師範(通称油伝)に依頼し、毎夜神明神社拝殿を道場として、会員は勿論、少年其他有志を集め、自ら先鋒となり猛練習の指導にあたられたのである。会員又一致協力、剣道一筋の魂を以って熱心に其の練習に励んだ結果稲葉郡青年剣道大会に於ては、前宮青年代表として、我が農友会が出場、又其他の大会に於て

下の皆々様は充分周知のことであると思いますが、私其の中、茲に先生の青年時代の社会教育に貢献せられたる偉大なる功績に感謝し、尊敬する一人として、其の一端を述べ、後世に伝ふべく、此の百年史編纂にあたり寄稿させて頂いた次第であります。

私は大正八年三月母校前宮尋常高等小学校を卒業いたしました。入学当時は永井牛太郎校長先生、卒業当時は永田新兵衛校長先生でした。勿論、丹羽久克先生は教師として奉職せられて居たのであります、然し私達学級は都合悪く直接受持先生としては教わつた事はありませんでした。

先生は自己に与えられたる教職を天職とし、厳正忠実であつたのであります、其の余り生徒達に於て、きつい先生だ、こわい先生だ、又父兄間に於ても厳格すぎる先生だと云う言を、子供ながらに聞いたことを記憶して居ります。

然し其の結果に於ては、どうであつたでせう、先生に直接受持として教つたことのない私達のクラスより、担任だつた下級、上級の生徒に於ては、私達学級に倍し優

でも何時も優勝の榮を飾り、稲葉郡のみならず、県下にも前宮の青年、長平農友会と一躍其の名を轟かせ、前宮青年の誇りとしたのである。是れ一重に先生が永年に亘り青年会長として、身命を賭し、其の教養指導に努力せられた賜と深く感銘する次第であります。

又先生は処女会(後の女子青年)を結成せられたのである。当時は現在の如き社交時代とは違い、若き女性の夜の外出は勿論、若き男女の交際など、親自身が厳しく止めていた位の時であつた、従つて一部の親から非難の声もあつたのであるが、先生は時代おくれの流れに打ち勝ち、其れを悔いともせず、其の修養の指導に専念せられたのである。時代は日進月歩と共に其の後各所に女子青年の結成を見今日に至つて居るのであります。

其の頃先生は、少年団も結成せられたのである、当時私は、小学校高等科十四、五才の時、少年団の年長者でした。ラッパを吹いて小牧の古戦場に徒歩で先生に引卒されて見学に行つたのであります。

斯様にして青年の指導のみならず、少年団に至る迄他所に先んじ団体を結成し、其の精神修養の普及に粉砕

身努力せられたのである。其の後、時代の進歩変遷と共に、スポーツ少年団、少年合唱団、等々、名称は異なれど各所に其の結成を見、今日の如き活躍をなして居るのであります。

近くに於ては、昭和四十六年八月、県少年野球大会に於て、我が稲羽東校下野球スポーツ少年団稲羽東チームが見事優勝の栄冠を勝ちとり、真紅の優勝旗を矢熊の麓郷土に持ち帰ったのであります。是れひとえに其の指導に専念せられた、諸兄のなみなみならぬ努力に敬意を表するはもとより、団員一致協力一丸となつて、猛練習を成し遂げた結果に外ならないと深く感謝し欣快に堪へないのであります。

同年十月母校、校庭に於て、市民運動会の際、各務原市体育協会より表彰状を受け、続いて晴れの優勝バレードを拝見いたし、其の颯爽たる姿に胸を打たれ感慨無量であつたのであります。

省りみれば五十六年前、丹羽久克先生が、初めて少年団を結成発足せられて以来、矢熊の麓に、小さき胸の少年魂が、木曾の流れと共に連綿と続き、前宮少年魂が大

私は先生の厳正たる教訓が胸に植へつけられ、少年の時より国家奉仕の念に燃え、十八才の時に海軍志願をし合格証書を受けたのである。然し其の年、不運にも、各国協定の軍備縮小のため、其の採用を得ず、続いて徴兵検査となり、是れ又甲種合格なるも、引続きの軍備縮小の関係にて、其の採用少く、現役免除となつたのであります。

此の上は警察官を志し、奉公するより他に道はなしと決意し、警視庁巡査採用試験を受けたのであります。

お蔭を以て其の願望かない合格し、大正十四年三月四日警視庁巡査を拝命し、警察練習所に入所したのである。然し大学生の中にまじり、私の如き、田舎ツペーの小学校卒業の者には、学力の点に於ては劣っていたにちがいないが、剣道だけは自信あり百点満点はゆかなかつたとしてもそれに近い成績を以つて卒業し得た事は、ほんとうに嬉しかったのである。

是れ一に少年、青年時代、先生が剣道一筋の武道精神を普及指導され其の練習に励んだ結果に外ならないと深く感謝し喜んだ次第であります。

きく其の根性となり、斯く成果を得た結果と思ふ時、先生の偉業や誠に大なると思ふのである。希わくば少年諸君よ、斯く先生の歴史ある伝統を尊び、益々粉骨碎身練磨に励み、稲羽東野球スポーツ少年団として、恥じざる立派な成果を続けられる事を祈る次第であります。

尚先生は当時既に敬老会を催されると共に、報徳会も開催せられたのである、青年男女はもとより、一般部落民の会合を求め、社会教育主事、野倉善太郎先生を講師とし、時折其の会を催され、道徳精神の普及に邁進せられたのであります。

当時私は、小学校高等科を終へた頃と記憶して居りますが、其の時の教訓を今もって新に記憶して居る一例をあぐれば、「日々のつらき、つとめも、みほとけの、人となれとの、恵なるらん」「我が心、鏡に写る、ものゆへに、とかく姿の、見にくかりけり」「此の姿、見てくだされと、門に立つ、乞食も、己が師匠なりけり」等々、各一句一句の教訓が、階級生活、社会生活、家庭生活に於て事ある毎に省み、心を新にし奮起百倍今日に至つて居るのであります。

時に御大葬、御大典、二二六事件、等々、続いて大東亜戦争、終戦と、難局の帝都治安維持の警戒に二十有余年大過なく過させていただき、昭和二十一年五月、實家の事情に依り、依願退職し生家に帰つたのであります。

当時先生も、母校勤続四十有余年の永き教職を停年を以つて退職せられて居たのであります。懐かしき先生と此の郷土に於て、共に昔を語り再度の御指導を得んと、胸中堅く念じていましたが其の意ならず、又先生も、退職せられたるとは言へ、心身共に壮健故、其の余生を、社会福祉の為に貢献せんと胸中堅く誓つて居られたのであろうが、不運にも突如として病魔に襲れ、昭和二十九年十二月享年六十五才の若き生涯を以つて、惜しくも他界せられたのである、謹みて哀悼の意を表すと共に、長きに亘る先生の偉業の大なりしを偲び、此の慶機ある母校百年開校記念日発刊にあたり、後世に其の範を伝ふべく寄稿させていただいた次第であります。

母校……ふるさと——近くに在っても よいものである。

丹羽 弥寿彦

昭一九卒 東町

私たちが学んだ頃、学校がこんなにもすばらしい鉄筋校舎になろうとは、誰が予想し得たでしょうか。

わずか三十年の才月、世の中をこんなにも変えるものと、今更ながら社会の進歩におどろかされます。

しかしみんなと飛び廻った板の間や、ラク書きをした土の壁が、こんなに変わってしまうと一抹のさみしさを感ぜられます。

暑い夏の日……忠魂碑建立のための砂や石を何回も何回も木曾川へ取りに行ったこと……。

ここへる手にハアハアと息を吹かけて、ベースに興じたこと……。冬の服装は学生服の上にカスリの羽織を着ていったと覚えています。

ものすごく盛大だった学芸会、白虎隊に拍手の嵐を浴

びた運動会……。私達が今日あるは幼い心を育てくれた。母校。そして熊沢、国定、坂井、太田の諸先生方の賜物と思います。

緑濃い矢熊の麓にすっかり近代的になったとはいえ、なつかしい母校の在ることはほんとうにうれしいことです。過去に何百人何千人という前宮村のそして前渡の子供を育てた母校……。今稲羽東と名称は変わってもやはり明日をになう立派な人間。を育て続けてくれるであろう私たちの母校の一層の発展を念願しつつ……つたない文章を終わります。

故郷

丹羽 嘉彦

昭和十一年度卒業

一月九日午後八時永井武男君の電話を聞いて、そうそう旧年百年史編纂にあたってお便りを戴いた。

故郷を離れて既に三十三年故郷とは何か？望郷とは、

そこにはお蔭と今だに両親も健在、四人の妹達もそれぞれに世間に恥ない生活を営んでくれる。兄として言ふことはない。年に一、二度肉親に逢いに行く、それだけが楽しみと言ふ故郷だ。結婚費用に二、三百万か、るとか自動車を持ってきたとか、行くとか、これは都会にも田舎にもある話、私などさ、やかな生活に明け暮れている都会人にとってはまるで縁のない他人の世界の話だ。けれど加藤先生の委員長の挨拶を読んだ時には久しぶりでなつかしかった。だがそれも忘れた。然るに武男君は自費でわざわざ電話をかけて永々と田舎の近況を知らせてくれた同級生はありがたい。一度逢いたいものだなあとしみじみ感じた。これから五十年生きたら百だがあと二十年か三十年かと武男君は言っていた。

同級会で一杯やった話も聞いた。「セッセ麦マケ一反畑」の石屋先生が八十才で席に参列していただいたとあっては、飛んで行きたかったと思つたがあの祭。思いおこせば昭和十四年八月問学の志に燃えて上京、医者の書生となり苦学しながら明治大学専門部法科を卒業、文部省に入り役人生活の一步を歩き始めたものの、再度の召集、

当時の官学卒でなければ出世もなかなかの時代、意を決して二十四年、六年勤めた役人生活にピリオドをつけ、現在地にささやかな食料品店を開業、現在に至れどなれぬ武家の商法、持つて生れた性分とあいまって今だに下手でかせぎも悪く商人の万年一等兵だ。だが子供にはめぐまれて長男（会社員孫二人）と次女（会社経営孫一人）は隣の家に、長女（会社員孫二人）は店で同居、別棟のアパートの収入やらでお汁のさめない隣り同志、孫にかこまれへいへいばんばんの日々を送っている。この上の念願はこれだけの借地百坪をなんとか孫達のために買って置いてやりたい。それだけを夢見て。昔のままに役所にいたら今頃は地方の新制大学の事務局長位になれていたかも知れない、或いは岐阜大あたりで停年を迎へ田舎で余生を送ることになったかも知れない。

出世とは何ぞや、人生何が幸福か知らない、なれど不幸とは思はない。何より嬉しいのは両親が健在で弟夫婦が私に変わって私にも出来ない親孝行をしてしてくれることだ。私に出来ることは少しでも親兄妹に心配をかけないことだと思っている。人生五十になつてしみじみ親の

ありがたさ、兄妹のなつかしさ、わけて妻のありがたさを心の底より感じる。

私は諸君に借越乍ら訴へたい。どうか奥さんを、家庭を大事にしてもらいたい、と。武男君ありがとう。私にも故郷はなつかしい、加藤先生始め諸先生方、同級生の諸君、いついつまでもお元気で、私はこうして日々元気で働いております。諸君の御健康と御多幸を心より祈っております。

（東京都渋谷区西原3-19-15に住んでいます）
ご上京の節にはお立ちより下さい

小学校の思い出

丹羽良一

昭和十六年高等二年卒業

我々が希望に胸をふくらませて入学した前宮尋常高等小学校が明治六年に開校された由、今回の百年史出版案内に依り始めて知りました。

征、乗馬姿での帰郷の勇装を見た。益々軍隊に魅力を感じ立派な軍人となるべく学んで参りました。十八才にして志願、大勢の村人に送られ同級生に先立って出征出来た事に優越感を覚え入隊した。同志の中には白木の箱の人となり帰った者も少くない。

そして終戦（敗戦）食糧難と戦い新田切替え等人生の再出発が始る。目まぐるしく移り変わる荒波の様な世の中に堪え得る体力精神力は故郷の山あり川ありの良き環境の小学校時代に培養されて来たと思う。

敗戦二十数年後の今日世界経済戦争に完全なる勝利を納めた日本人、大和魂こそ昔ながらの小学校教育の外何物も無いと信じ現在の職業に専念して居る。

（春日井市下八田町に在住）

随感随筆

日比野正範

私は昭和十四年前宮尋常高等小学校高等科二年を卒業

思い出せば成る程古びた校舎と、当時では広大であった運動場にそびえ立つ大杉の年輪と隣り合わせた銀杏の大木など印象が深い。すでに六十年余り経過した校舎で、まづ「サイタサイタサクラガサイタ」と声高らかに義務教育の初声を張上げた訳だ。

当時の通学は藁草履が殆どで冬ともなれば学生服の上に綿入れの紺の胴着を着用現代から見ると全く滑稽極まる服装であつたろう。然し古びた校舎にマツチした風景とも云える。我々が在校中現在地への移転が決り全校生徒の勤労奉仕が始つた。木曽川の河原から栗石の運搬だ幼い我々の手で蟻が餌を運ぶが如くせせと運び続けた。石は現在の校舎の基礎となり或は広い運動場の排水用として地下深く後の世まで役立って居ると確信して居ります。支那事変と共に軍国主義の徹底大東亜戦争へと進展一億一心国民皆兵と教育方針も変つて参りました。小学校の校庭も出征兵士を送り或は在郷軍人の教育の場となり、無言の凱旋（戦死者）の村葬など、教育の場所も戦事一色に変わり果ててしまいました。我々も自然に軍人に憧れる様になりました。今回の発起人加藤先生も再度出

致しました。昭和十四年と申しますと、学校が堤防の下にあったのを現在の地に移転増改築致しましての第一回の卒業生です。移転増改築の頃を思い出しますに、現今の物質文明の進歩はめざましく昭和十二年支那事変が起きた頃と比較致しますと全く夢の様気が致します。村に何台もなかったトラックは徴用になり基礎工事の砂利等は馬車でした。馬も徴用が来ますと、全校生徒男子も女子も草井の渡船場附近の木曽川からグリ石をモッコでつたりかついだりして、何べんも何べんも運びました。其の行列が川原から工事場まで続きました。現今の素晴らしい土木機械の発達を見る時、いかにも悠長な光景に思えますが、自分達の学校を建ててもらえんだと云う気持ちでうれしく励んだものでした。今茲に創立百年を迎へると聞き幼き日よく遊び共に学んだ学校に恩師が先輩が又級友が後輩がありしの姿そのままに思い出されてなつかしく母校を偲ぶ一ページを綴らせて頂きます。昭和六年春四月ハナハトマメマスミノカサカラカサの国語の本を肩よりハスに掛けるカバンに入れて校門をくぐりましたのは堤防の下で学校でした。当時校長先生も担任があり

私達は加藤静雄校長先生担任でした。校庭に先生先輩方に暖く迎えられてより八年間の学窓生活。忘れることができないのは校庭の南西にありました大杉と銀杏の木であります。春の若芽秋の紅葉は素晴らしく、沢山の実につけたイチヨウ、どれ程皆の画になった事でしよう。三人でかかえる程の大杉は陣取りベースボールに、時には俄雨をさせて寄りそったものでした。堤防より校門に入る手前に。はう様に大きな松がありました。堤防より坂道を走って来てその松の中程迄も駆登りました。写生に何度も画いたその松は今主は替ったが見事な風彩をして昔を偲ばしてくれます。今講堂の東側にクルミの木があります。この木は私共昭和十四年卒業記念樹です。このクルミも同窓の諸兄の脳裏に何かを刻んでゆくことと想います。学校は施設でありますが教師と児童により魂が入ります。友が私に次の様な話をした「僕の実家は止むを得ん事情で転居せねばならなくなった。子供の頃に背比べした柱、落書をした戸、飛行機や船を画いて叱られた白壁、枝も折れんばかりになった柿、蜂にさされてとったイチヂク、今はもうない。思い出のなくなった母の

実家に行きたいと思う気持はあまり起らない」と笑顔で迎えてくれる叔父叔母の心は変らねど友の心をその様にしたのは何か。学校も同じ感に打たれるのは私一人ではないと思います。学校施設と教師と児童とが一体となつてかもし出すもの、何かが、人々の心をいつまでもひきつけてはなさないと思います。校舎も校庭の木々もそこで教へた先生方そこで学んだ同窓の諸兄、本当に大切にしたいと思います。終りに現在各分野で御活躍の諸先生、同窓の諸兄の御健康を、又戦争に病に倒れた方々の冥福を祈ると共に、母校百年史編纂の大事業の役員の方々衷心より敬意を表します。

母校とともに

右 川 守 一

一年生を村上元之丞先生、二年生は村上忠左衛門先生、三年四年生は清水留川先生、五六年生は二宮友藤先生、

高等科に永田新兵衛先生、校長先生は、村上元之丞先生、続いて、永井牛太郎先生を経て永田新兵衛先生に教へを受けて小学校を卒業させていただく、中学校へは進まなかったもので、青年会に入会させて貰い、役員となつて約五ヶ年位、そして最後の一年間は団長として、一年の半分位も学校で、当時の若い先生だった遠藤亮一先生、と一緒に、宿直室に泊めて貰うて、青年教育に特に御熱心だった丹羽久克先生などに御指導を受け、或は遊んだり仕事をさせて頂だくうちに青年団の指導計画なども考えさせて貰った訳だ、そして又私の思想と云うか、考へ方が知らず知らずの中に出来て、青年らしい新らしがりや、にもなつていた訳でもある、青年団を出てから一ヶ年位は当時の駐在巡査だった前田巡査に、要注意の意味でつきまとわれたことも一つの思い出だ。青年団のとき雄弁会を開いたが其時弁士の中に、たしか西部村の青年団から来会した、白木義雄君と云う人が雄弁を振つたあとに「独立した私達青年の青年団」と云う様な演題で、当時農民運動の指導者として、雑誌（前方）を出し、社会主義運動の先駆を走っていた白木君に反論して聴衆の

拍子を浴び喜んでいた所私の話したこととは殆んど反対の見出しで、当時の岐阜日日新聞紙上に大きく発表されて警察のリストに、私の名前が書き込まれた訳だった。勿論私も、赤い雑誌なども読み著書などにも目を通していたが、団体とのつながりは持っていなかったもので、別に警察に呼び出されたり、注意を受けたりはしなかったが警察の護衛を辱うしたのは、そんな事情からだった。新しい行事だった『夜叉ヶ池』の探検旅行を計画した時も殆んど学校の宿直室に泊めて貰つて、画策したこともかなり続いた。思えばうちのお父さんやお母さんもよく許してくれたものと、今更ながら協力を感謝せずには、いられない、時は七月の炎天下の長行軍だ、当時としてもそれこそ大変なことと思われ、ほんとうにきまるまでは大変なことだった。掛斐の駅から川上村の長昌寺まで約十里（40 km）掛斐川の上流を、さかのぼること五里（20 km）三国峠の山麓にあると云う、伝説の池夜叉ヶ池の嶮を探ろうとする壮挙なのだった。

幸にも当時副団長をしていた丹羽一夫君、丹羽賢三君（現丹羽賢吾君）など軍隊帰りの強者たちに、幹部候補

生帰りの加藤嘉雄君等の適切な指導により、前日丹羽一夫君、丹羽賢吾君等が先発して、設営の任に当り、途中村々の青年団処女会等の好意で、湯茶のもてなしを受けることが出来たので、団員六十三名、一人の落伍者もなく夕方目的地に到着して長昌寺に一泊翌日、いよいよ出発と云う時、折悪く雨となったが、全員元気に出発、約一里余を進みいよいよ山中に入ったが前日の疲れもあり雨天の為其先の難路を予想して、本隊はそれより帰村内十三名が、山深く進み入ったが折柄の大雨に、伝うて淵す谷川の水が増水し危険極まりなしと残念ながら再挙、を期して引き返し遂に池を見る目的を達することは出来なかつたがそれでも今から考へると、よくやったものと思ひ出は深い。

あとは村役場にとは云つても学校の教室が隣室にも、二階にもあり役場内と云うよりも学校内と言つた方が適當かなと思へる村役場事務室で、子供の歌い学ぶ声をききつつ、水の段を一期つとめさせて頂いたが役場をやめて数年、日支事変、たけなわとなり遂に大東亜戦争へと発展し銃後の護りとして翼賛会が設けられ、その推進員

として更に翼賛壮年団が発足すると、その団長として、村内部落部落の常会への出席、食糧の増産金属の回収供米供木に、或は警防団に連絡して防災防空の訓練に、或は出征する多数の出征兵士を送り、又無言の英霊を迎えるなど皆学校を拠点として活躍させて貰ひ銃後の守り国家への奉仕に、うしか、学校か、と行き帰りした思ひ出は深い。村に村の総社がないことは、村の中心的存在として学校が選ばれた一つの原因でもあり亦戦前はほんとうに前宮村では、学校の職員か、村の指導者かと思われる程学校の先生方の村民への教化の力は大きく各種団体はもとより業者の組合に至るまで其指導力は村役場よりも、小学校の指導力は大きかつたと思う程だつたように思う。国家のためには出征する人も送る人も、出征奉公代りだと銃後の奉仕をする人も心をつにして滅私奉公の誠心に燃え立っていた、そうした心を、どこで、どんなにして作られたかと思ひ合わせて、現代の自己中心の只個人の権利追求をのみ考へる今日の国民思想を、どこで作られたれつつあるかを思うとき、私共一人一人が反省させていたかく共に、母校に於ける教育と云うよりも、今

日の学校教育について考へさせて頂くことは私だけの私見ではない、と考へさせていただきます。

戦前の教育については見せても貰ひ、私自身にさせて貰ひましたので一応はわかつているような気がします。戦後の教育については何も存じません。しかし前にも申し上げました様に効果的に自分中心の個人の権利を極端に迫及する若い人々の出来たことにつきましては時の力もさることながら、一面教育の力が負う所は大きいと存じます。戦前学校とは縁の深い生活を送らせて頂きました私が学校教育の将来について私見を、学校を母校とせられる皆様方に申し上げますと思ふことは許されないことなのでしょう。

今日の教育が、真に人類の進化発展に、幸福の増進に寄与するものであればそれこそ真の教育と云うべきでしょう。実に人類のしあわせの道を拓くことこそが真の教育だと思わさせていただきますのに、自己中心の教育がなされ、自分自らの権利だからと云うので社会の秩序も、国家の安泰も眼中になく、利益追求の為には公害も考へぬ企業家、労働者、学者は学者で自己の名利の為には、

人命の尊とささえもおかまひなしで發明研究し自然の領域を冒して、心臓移植や試験管ベビー、原子爆弾などによ人命の大量殺りくを考へるなど、人間自らが人類絶滅の前夜を考へさせる行き過ぎ研究を図るなど、大自然の心にそむく大道前逆と云うべきでしょう。心をひそめて世界人類のすべての平和と幸福を考へて本日 of 文明文化を長年月にわたって開いてくれた先人先輩への厚恩及び大自然の心に報恩し更に今日の文化を一步進めて子孫に伝える心を養う教育をこそと強く希求してやまない私です。

「大学の道は明徳を明かにするに在り」との大旗のもと世界四大聖人の説かれたる教理教説と、我が天照大神の説かれたる、神ながらの道に一貫する所の真理（自然の法則）を基として創建されたモラロジーの教育は宇宙の大法則そのものであると教へを受けています。一応母校の先生方によって御研究をせられ母校に於て教鞭を取っていたかく御参考にしていただけならばと存じます母校たる小学校以外に学んだことのない浅学の私ではございますが成時成際でございますので申し上げます。モ

ラロジ―原典である四千頁に及ぶ論文中には先生方の御教養がものを云って私とは亦別な味ひをもってがん味され従来御教養に更に一步を加えて、先生方の御教育に一段と花を添へ、ひいては母校の教育に、正常なる人間尊重の教育の場として又大きく世界平和、人類の生存発達への輝く教育の場として仰がれ、先生御自身もまた精神伝統として仰がれ尊ばれて、其恩恵をたたえられることを信じます。

唯今モラロジ―研究所では、本県瑞浪市にある分園に於て毎年八月先生方のために文部省の御後援にて、国立教育研究所長平塚益徳先生を始めモラロジ―研究所々長先生及び本部講師による「教育者研究会」を開催され、更に尚研究を希望される先生方には「教育者短期講座」を開設して各先生方の御研究をお待しています。何卒母校の先生方に御研究をお勧めする次第で御座います。とんだ蛇足を添へて恐れ入ります。母校の明るい発展と希つての微衷を御汲み取り下さいまして失言御許し願ひ上げます。

昨日グアム島二十八年間の穴居生活の日本軍人生き残

りの横井庄一さんが目出たく三十一年振りに故国の土を踏んだ、階下の名で召集され波頭万里陛下を信じて生き生き伸びた横井さんが奇跡的に生きて故国に帰った。二十八年の穴居生活の心のささきは果して何だっただろうか、日本人一人の思ひ続けて生き続けた心の中に、なみなみならぬ生きる努力もさることながら、生き続けさせて貰うた、自然のめぐみと思ひ続けたであろう、父母の面影と天皇陛下の思ひに抱かれて生きさせていたのだと思恵を忘れて、自らの努力のみにて生き続けたのだと思ひ誤まることがあったならばと横井さんの為と思わずにはいられない、横井さんを受け入れる側近の人々も、横井さんの心をおもいやり、そつと現時の社会の状況になれられる時間を差し上げるべきだと思う、かの狼に育てられた人間のように、動物の世界から、人間の世界への移り変りに堪へないで遂に二三年にして死亡した例を静かに考へるべきだと思う。

名利の前には逞しい商魂をムキ出しにするマスコミのほんらうにまかせ、或はあの手この手による横井さんの、奪ひ合い戦のうちに捲き込まれる様なことがあったなら

はと次から次へと思わずにはいられない。横井さんにも、自重してほしいと思う。

オリンピック札幌大会が今日天皇陛下の開会宣言によつて、開会された、参加国三十五ヶ国、世界の平和と各国民相互親善のためのスポーツの祭典だ有終の美をと祈つてやまない。(昭和四十七年二月三日稿 在校下)

主体性の發揮について

堀 博 美

昭和37年3月卒業

われわれは主体性の發揮ということに深い関心を抱いています。そこで浅学非才であります、主体性の發揮について申してみたいと存じます。

一般に、われわれの郷土の存在する基盤は(ぼくたち・あたいたち・おれたち・わたしたち・われわれ・みんな)でございます。われわれの郷土の主体性を發揮する道は(ぼくたち・あたいたち・おれたち・わたしたち・

われわれ・みんな)を外に表わすプロセスでございます。このプロセスには三段階ございます。

最初は(われわれ 他省略)が富者であるか貧者であるかを意識する段階であります。次の段階は(同 われわれ)の所有物と非所有物を(し)る段階でありまして、その所有物と非所有物は物体であつても抽象的なことがあつてもよろしいのでございます。最後の段階は(同 われわれ)の所有物を外に表わすことにより、(同 われわれ)を外に示す段階であります。

そして最後の段階のあと(同 われわれ)は発生した外との相関関係から、(同 われわれ)が富者であるか貧者であるかを意識する最初の段階に到着するのでございます。それからはこの三段階の繰り返してございます(ぼくたち・あたいたち・おれたち・わたしたち・われわれ・みんな)を主体としまして、三段階で自己完結するのでございます。

以上の観点に立ちましてわたくしは、この度の母校百年史の編纂はわれわれの郷土の主体性の發揮である、と

高く評価致している次第でございます。わたくしは郷土を取り上げて申しましたが、他の地方、国、はたまた個人、またその他のことがらでもよろしいかと存じます。しかしその主体性の發揮がわれわれの望むところではないものはこの限りではございません。すなわち發揮される主体性は「愛・力・美」のうち少くとも二つを指すものでなければなりません。しこうしますに、われわれは主体性を發揮しましてより「愛・力・美」に富む郷土、日本、自分を育てねばならない、と考える次第でございます。

(群馬県高崎市在住)

心の山河

松尾美直子

昭和三十年三月卒業

時という大きな流れ、何を持ってしても押し止める事の出来ない偉大なるもの、その終止符をもたない経過の中に人が生きている。生きてゆく。

元朝に護摩が焚かれ、蓮如様で賑わった不動山、除夜の鐘を聞き、夜明けと日暮れにも響いたそこからの鐘の音・。柿くえば鐘が鳴るなり不動山。国語の時間、誰かがこんな迷句を作って笑い合った山、写生大会などにもよく通った場所、弁天池の紅葉のさまなどは好んで描いた風景です。中学に入ってからでしたが、友だちがその頃の人気スターに書いたファンレターに、返事が来たのを得意気に見せてくれて一寸羨やましく、あわててかくし読んだのも不動山の麓、写生の時間でした。

何んとも言えぬ緩衝に浸り気の合う友と語り合った、青春の不動山、そこにも四季の感溢れる山がいつも私を抱いてくれました。頂上に立って村全体を見おろすと正月などは煙突から立ちのぼる煙のたなびきすら、のどかで静観しながら「いいねー」と溜息まじりに話合ったものでした。今では年に一度か二度中腹にある戦死した兄の石碑に詣る位ですがいつ来ても「いいなー」としみじみ思うのです。

それからさらに木曾川へと歩を進めると渡船場、そこもいつもいつ見ても飽きない田舎の風情がありました。

稲羽東小学校創設以来百年——。これは又何んという長い時の経過だった事でしよう。六年間学び舎として通った前宮小学校、あの頃の恩師の眼差しが、同級生の動作がその時のまま甦がえって感無量の思いがいたします。昭和二十四年、物資が乏しかったあの頃、母の帯を縫い替えたジャンパースカートで入学式に望んだ事が遠い夢の中からまず一つ浮かんでくるのです。眼を閉じて今私は追憶の中から前宮小学校の門前に立って見たいと思います。岐阜県稲葉郡前宮村立前宮尋常高等小学校、そう書いたあの文字、校舎の南側に桜の大樹があつて三月の終業式に枯枝だったのが四月、始業式に望む時満開だったのも思い出の一つです。前宮小学校の同窓生も言いかえれば一本の大樹が百年の年輪を刻む幹とすれば、そこから各年度の卒業生という枝が出て、一個人、つまり私は一枚の葉と考える時、皆同胞として同窓会が持たれる意義をしみじみ思います。

喜怒哀楽の学校生活の中、何につけても校舎の東側に素朴なたたずまいを見せていた矢熊山が私にとって時には救いであり励ましの一つでした。

夏にはよく水泳をした場所でもあります。泳ぎ終えてから着替えた肌着を清流で濯ぎ洗いをし、その辺で木の枝を折り、枝に通して仲間達と暑い暑いと川原を歩いて家に帰りつくとき肌着が乾いていた事も思い出します。

大雨の後、濁流渦巻く木曾川——。終戦後骨折って開墾したという川原畑を一時の間に一呑みにして作物は流され、あとに「ナメツチ」というお土産を置いてゆきますが当分作付けが駄目になった思い出、朝日に白波が輝いた平和な木曾川。

川辺の堤を歩くとその風が吹きぬけた日、小石を投げ入れると波紋が笑声までも拡げてくれた木曾川。

あれから強烈にイメージチェンジのなされた木曾川べり愛岐大橋の付近は特に眼を見張るものがある様です。だから私の追憶でのそろ歩きもこの位で終着するのですが、今不動山の麓で売られている「焼団子の味」にも木曾川辺の喫茶店のコーヒ一杯にも、昔の夢がほとばしる様にかすめて行くのです。心の山お不動山。心の川木曾川は私の命ある限り心の中に存在して昔の思い出に、つながってくれるのです。

前渡から神置に嫁いで七年二児の母として紳士ズボンの縫製に余念のない毎日です。長男はこの四月には幾年月か前の私の様に稲羽西小学校に入学予定です。

凡人は凡人らしく。いつか恩師にいただいたその言葉の様に平凡な幸せが、平凡な人間にとってどんなに心安らぐ事でしょう。この幸せが何時までも続く事を神仏に祈るのはやはり凡人でしょうか。

今もう一度なつかしい恩師に同級生全部に逢う事は叶わぬ願いかも知れませんが、大樹がいよいよ深く繁り、強い根を張って榮えて行く事を陰ながら願って止みません。

(市内神置町在住)

小学校の思い出

松波新治

私は昭和四年四月一日前宮尋常高等小学校の尋常科第一年生として入学致しました。クラス全員で五十名のう

うはちよろちよろと燃える筈だったのですが、一大音響とともに爆発してガラス製の実験器具が教室一ぱいに飛び散りました。今から考えて見るとガラスが完全に装置の中に充滿せず空気が混入して爆発したものと考えられます。火をつけた先生も見学していた私達もびっくりして真青になりました。幸いなことに実験器具が飛び散っただけで、火は付かず(火災になるようなことはなく)見ていた私達は一人も負傷していません。先生は少し顔と手を切られた様子でしたが大したことはありませんでした。

みんな只ぼう然としてうろろするばかりでした。音を聞いて真先に加藤静雄校長が飛んでこれあれこれ指導をして始末をしたことがありました。

翌日の理科の実験は、前日とは打って違って、小型のものを使用し、装置は風呂敷で包み、爆発しても破片が飛ばない様にし、充分時間をかけて、然も恐る恐る実験して見せてくれました。昨日の事を目前で見えていたので又爆発するのではないかうまくゆくか、とびくびくものでした。

男子十九名、女子三十一名の男女共学でした。以来高等科二年を卒業するまで机は男子同志、女子同志並びました。今から四十年余り前のことです。小学校時代をふり返って見ると楽しかったこと、先生に叱られたこと、苦しかったこと等々いろいろありますが中でも忘れられない事を思い出しながら記して見ます。

あれは確か小学校五年の時でした。先生は坂井馨先生に教えて頂いたことです。先生は当時まだ新米でした師範学校を卒業して先生を拝命してやっと二三年目の頃のことです。あの当時は一人の先生が各教科全部を教えていました。

先生は理科の実験に自信がなく放課後に翌日の理科の実験をするための予行中のことでした。帰えってしまえば何も知らずにすんだのに、男子数名が面白半分とひやかし半分に居残って見学しておりました。フラスコで水素を発生させガラス管で導き出し燃焼させる実験でありました。先づ水素を発生させガラス管から少しずつを試験管に取出し、マッチで火をつけ燃えることを数回実施して確かめたのちガスの出口に、点火したとき、ほんと

なつかしい坂井馨先生も稲羽東小学校の校長を最後に昨年停年で退職されました。

これが私の小学校時代最大の事件で記憶をたよりに書いたものです。

(在校下)

国民学校の思い出

松波文夫

昭和二十二年卒

鬼畜米英、日本必勝と言った先生ありがとう。

勉強よりも作りの方が大切と言った先生ありがとう。ムチを作ってこいと言われて最初に笑いながらコッソリとたたいてくれた先生ありがとう。

生いもをかじって見て見つけ、おこられた先生ありがとう。

空襲警報のサイレンの真似をして叱られ、廊下に立たされた先生ありがとう。

弁当は麦飯でないと持って来てはいけないと言った先

生ありがとう。

向うから乞食が来ると思つて近づいたら知つてる人だった。衣食が不足だ。しかたがない。がまんするんだ。ありがとう。

いもが常食でよくおならばかりしていた友よ、さようなら。

思い出

村瀬 昭 男

歳月はすきれど、同じ学びやで同じ校庭で父も学び母も学び村に町に日本に世界に巣立つて行つた。父はふる里の山河を語り、母はふる里のあじをつたえる。その子は父を語る時母を語る時ふる里は再びよみがえってくる。岐阜に住む様になって二年余、暇を見つけて帰る事になっている、住めば都と言ふものの生れ育つた所が一番よくなつかしく思い出も数つきない。春、家の近くの田んぼ

や溝でメダカやオタマジャクシを茶碗のかけらやタモで服を汚してよく取つたものでした。夏、夏休みともなれば我れさきにと友と共に飛びこんだ清流木曾川。秋、祭りの後の運動会家中そろつての応援で山のクリの実や庭の柿手作りの料理で昼食を楽しみ。冬、凍りついた田んぼの中を滑ったり霜柱をふんづけての登校むろん車の危険もなく。戦争をしらない私達だが下校時に通りかかった米軍のジープ。あわてて麦畑にしらずしらずにかくれたものでした。

昨今しきりと呼ばれている公害や自然破壊でふる里の姿も除々に変化する事でしようが。子供達にも私達と違つた楽しい思い出を残すためにふる里の豊かな心は大切にしたいものです。

(岐阜市則武に在住)

戦中派の思い出

山 本 里 水

昭和十九年三月卒

昭和十三年四月、私も胸ふくらませて小学校へ入学致

しました。当時の校長先生は確か平光弥重郎先生だった

と記憶して居ります。私達一年一組の担任は国定先生でした。今の講堂の北側に二つの教室がありましたがこの棟で一年一組と二組が勉強致しました。

国定先生は私達が言う事をきかないと、大きなお腹をかかえて涙を流してしまわれました。

当時軍国主義の厳しい時代でしたが、それでも冬の間は一年生の教室だけ大きな火鉢にまつ赤な炭火がおこつて居たのを今でも懐しく覚えて居ります。

それから小使室へ皆の弁当を大きな一つの箱へ入れて持って行って暖めてもらいました。上の方におくと冷たく、下の方へ入れると熱くて食べられない程になります。皆先を争つて下の方へ入れっこをしたのも思い出されます。

又お母さん方が味噌汁当番を作つて冬の間三、四人づつ学校へ来て、味噌汁を作つて全校の生徒にのませていただきました。

今の学校給食のはしりと言えらるかも知れません。夏休みの暑い暑い日に、木曾川の川原から栗石や砂を袋につ

めて毎日学校へ運んだ事などもありました。

その他、どろり拾ひや、桑の木の皮をむいて学校へもつて行つたことなど、今にして思うと、まだまだのんびりした悠長な時代でした。

又牧田校長先生など本当に忘れられない方です。

今もお元気で先日学校でお目にかかりましたが、昔のおもかけそのまゝで、ちつとも変つて居られません。朝礼台に上られて、国民服のボタンを上から下へササッとなでられ、次にズボンの上へ兵児帯をしめて居られました。その帯を二、三回ゆすられてから、おもむろに話をされました。

今尾先生の、ツネリモチも覚えて居ります。左手で生徒の右ほ、をつまみ右手で左ほつたを、びしゃんとやられて居るのを見て我々もよく、にげ出したものです。

又丹羽先生が教壇を足で、どしんとけられて、われ鐘の様な声で上級生を、しかつて居られますと、二つか三つはなれた教室に居る我々下級生までちみ上つたものでした。

昭和十八年頃になりますと国家総動員とかで男の先生

第六編

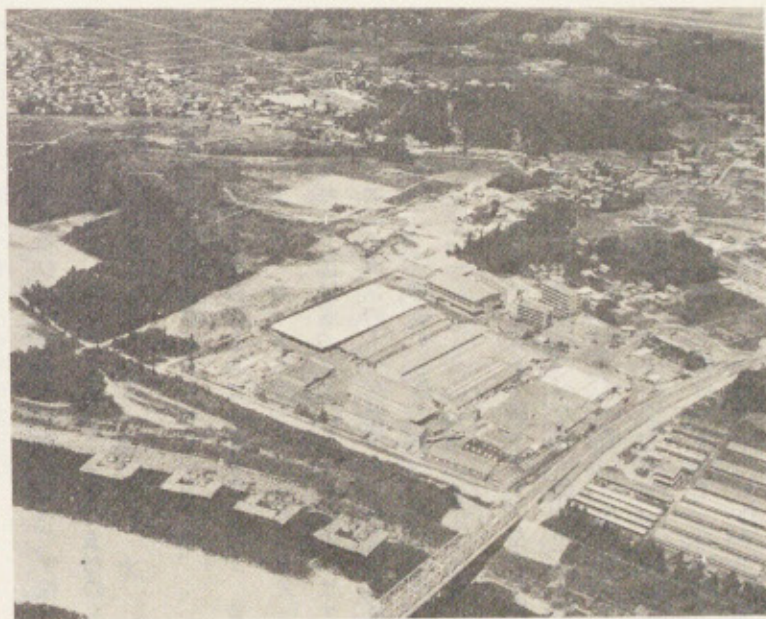
関係学校

方はほとんど出征して行かれましたが我々六年生の男子組は関谷先生でした。本当に厳しい先生でよく軍隊式の訓練をされました、食糧増産と言う事で私達も前の木曽川の川原を開墾しました。草の根をふるい、木の根を起して、麦をまいたり、さつまいもを植えたり、本当に苦しい時代でしたが今にして思えば懐かしい事ばかりです。

こうして我々の学んだ学校に今私の子供も通学して居ります。我々の頃とは比べものにならない程、立派な設備と、ととのった環境の中で勉強の出来る今の子供達はやっぱりしあわせと言えるでしょう。

百年誌の創刊にあたり戦中派の感慨をほんのちよっぴり綴って見ました。

在校下



(昭和四十六年)
空から見た岐阜プラスチック工業団地



昭和28年8月31日 前宮中学校完成 (田中桂先生提供)



昭和32年3月 稲羽中学校第一校舎完成 (小野木三己氏提供)

第六編

関 科 学 対



↑ 昭和28年8月
前宮中学校完成祝賀



→ 前宮中学校
校舎内の一部



(松尾松司先生提供)



← 洗心庭勤労奉仕



前宮農業補習学校沿革史

丹羽久義

明治三十五年

七月一日 岐阜県指令内三第九〇七号を以って前宮

実業補習学校設立認可される。

校長 前宮尋常小学校校長西尾陶治兼任

十一月十三日 校長西尾陶治山県郡上伊自良村掛尋

常小学校に転任する。

本年度経常費予算高 百四拾四円

九月二十日 前宮実業補習学校学則変更の件 認可

される。

明治三十六年

十月一日 岐阜県師範学校卒業生 林清吾 前宮尋

常小学校長として就任 本校校長兼任

本年度経常費予算高 参拾六円

十一月六日 稲葉郡役所補助金 参拾四円

明治三十七年

七月十四日 校長林清吾 稲葉郡鏡島小学校に転任

する。

九月二十七日 小学校長村上元之丞本校校長兼任

本年度経常費予算高 参拾六円

明治三十八年

一月五日 本校学則改正認可

本年度経常費予算高 拾壹円

七月三十一日追加予算高 拾貳円を議決

明治三十九年

本年度経常費予算高 七拾六円

明治四十年

本年度経常費予算高 拾六円

明治四十一年

三月三十一日 校長兼訓導村上元之丞兼任を免す

同 小学校長永井牛太郎 本校校長兼訓

導を兼任する

本年度経常費予算高 拾円

明治四十二年

本年度経常費予算高 拾五円

明治四十三年

本年度より生徒通学の便宜上次の五か所に於て授業を行う

山脇下切、西区、長平、両内野、北島

但青年夜学費として村および当該部落より支出す。

明治四十四年

前年に同じ

明治四十五年

前年に同じ

大正二年

前年に同じ

大正三年

本年度経常費予算高 貳拾五円

大正四年

九月より部落別授業を廃止する。

本年度経常費予算高 貳拾五円

大正五年

本年度経常費予算高 貳拾円

大正六年

本年度経常費予算高 貳拾八円

大正七年

本年度経常費予算高 参拾壹円

大正八年

三月三十一日 校長兼訓導 永井牛太郎 退職

四月十八日 小学校長永田新兵衛 本校校長兼訓導を兼任する 年手当拾貳円

本年度経常費予算高 四拾円

大正九年

本年度経常費予算高 五拾五円

大正十年

十月十四日 小学校訓導 村上元之丞

小学校訓導 丹羽久克

本校助教諭心得兼任する 年手当各拾貳円

十月二十七日小学校訓導 遠藤亮一

本校助教諭兼任する 年手当拾貳円

本年度経常費予算高 六拾四円

本年度生徒数 六十九名 職員数 四名

二学級編成

大正十一年

本年度経常費予算高 百円

本年度生徒数 五十一名 職員数学級編成前年通り

大正十二年

三月十四日助教諭心得村上元之丞依頼兼職を解かれ

る

九月二十日小学校訓導横山鳳潤 本校助教諭を兼任

年手当十二円

本年度経常費予算高 百拾九円

本年度生徒数 五拾名 職員数学級編成前年通り

大正十三年

二月五日 学則変更の件 認可

三月三十一日 左記の通り職員手当増給

校長兼助教諭 永田新兵衛 年額七十二円

助教諭 横山 鳳潤 年額六拾円

同 遠藤 亮一 同

同 心得 丹羽久克 同

四月二十六日校長兼助教諭永田新兵衛可児郡視学に

転任

四月三十日 横山鳳潤助教諭を免ぜられ本校校長兼

助教諭に任ず 年手当七十二円給与

本年度経常費予算高 参百四拾貳円

本年度生徒数 五拾四名 職員数三名

大正十四年

九月三十日 小学校訓導遠藤卓朗 本校助教諭を兼

任 年手当六拾円

本年度経常費予算高 参百六拾五円

本年度生徒数 五拾四名 職員数四名

大正十五年

三月二十三日 村長田中常吉満期退職

四月二十日 村長丹羽弥太郎就任

六月二十三日 学則変更認可

研究科修業年限四ヶ年に延長

教練科を加える

七月一日 前宮村青年訓練所に充当(六月二十

三日認可)

本年度經常費予算高 参百九拾七円
本年度生徒数 七拾六名

昭和二年

本年度經常費予算高 四百貳円
本年度生徒数 七拾六名

昭和三年

本年度經常費予算高 四百貳円
本年度生徒数 八拾六名

昭和四年

本年度經常費予算高 四百貳拾七円
本年度生徒数 九拾名

昭和五年

本年度經常費予算高
本年度生徒数 九拾貳名

前宮補習学校職員一覽表

(明治三十五年七月一日設立認可)

資格	氏名	職名	就職年月日
小学校長	西尾 陶治	校長兼訓導	明三五、七、一
"	林 清吾	"	明三六、十、十
"	村上元之丞	"	明三七、九、二七
"	永井牛太郎	"	明四二、十、七
"	永田新兵衛	校長兼助教諭	大八、四、十八
"	横山 鳳潤	"	大十二、九、二十
"	加藤 静雄	"	昭六、三、三一
尋本正	村上元之丞	助教諭心得	大十、十、十四
小正	丹羽 久克	"	大十、十、十四
"	遠藤 亮一	助教諭	大十、十、二七
尋本正	遠藤 卓朗	"	大十四、九、三十
小本正	安田 猛	"	昭四、三、三十
"	加藤 嘉雄	"	昭五、九、三十
"	川本新兵衛	"	昭七、四、十

青年訓練所後に青年学校の沿革

日比野 静夫

設立

大正十五年六月二十三日前宮農業補習学校学校則変更認可。
大正十五年六月二十三日補習学校を訓練所に充當認可。
大正十五年六月三十日本県より主事指導員の囑託あり。
大正十五年七月一日開所並に入所式挙行

設立並に管理者 村長 丹羽弥太郎
主 事 小学校長 横山 鳳潤
指導員 陸軍歩兵少尉訓導 加藤 嘉雄
指導員 陸軍歩兵伍長 田中利工三郎
指導員助手 歩兵軍曹 佐々木秀一
" 歩兵伍長 永井 善巳

大正十五年度

六月二十三日農業補習学校学校則変更本訓練所に充當
六月三十日本県より主事指導員囑託

主事

校長

横山 鳳潤

指導員

歩兵少尉

加藤 嘉雄

指導員

歩兵伍長

田中利工三郎

助手推薦

歩兵軍曹

佐々木秀一

助手推薦

歩兵伍長

永井 善巳

(人員数により指導員の制限あり本訓練所は二名)

七月一日開所及入所式挙行

十二月十七日 蘇原村青年訓練所に於て第四次受

査問官岐阜縣隊区司令今部付中佐

永田彦造殿

本年度經常費予算高 貳百拾六円

入所者五拾四名年度末生徒数四拾四名修了者六名

昭和貳年度

四月二十日指導員田中利工三郎 退命

助手

佐々木秀一

永井善巳 辞退

四月二十日指導員砲兵伍長

丹羽 一夫囑託

助手

歩兵上等兵

日比野静夫推薦

十月二十一日受問

査問官岐阜縣隊区司令官大佐 一色留次郎殿

学科試験員岐阜県社会主事補 太田健次郎殿

十一月十八日

愛知県小牧山附近にて陸軍特別大演習参観

十二月十三日

稲葉郡東部八ヶ村連合射撃会に第四年次参加

本年度経常費予算高貳百四拾六円也

入所者拾壹名年度末生徒数四拾七名修了者九名

昭和参年度

五月三日聯隊区司令部付永田中佐統監の下に各務原に

おいて行われたる稲葉郡東部八ヶ村聯合演習に参加

す

九月六日午後受閲

査閲官歩兵六十入聯隊附少佐 見並甚吉殿

本年度経常費予算高参百六拾六円也

入所者貳拾八名年度末生徒数五拾九名修了者八名

昭和四年度

三月三十一日指導員加藤少尉師範学校専攻科入学の爲

休職(補助員として日曜毎出勤)

三月三十一日助手日比野静夫を指導員嘱託

四月一日入所式挙行本年度入所期四月に改められた

四月十日 助手 歩兵上等兵 長縄進司 推薦

十月十二、三日岐阜県青年訓練所聯合演習参加三四年次

十月二十日午後受閲

査閲官岐阜聯隊区司令部附少佐 伊藤弘道殿

学科試験員岐阜県視学 坂上清重殿

十二月十一日稲葉郡東部八ヶ村聯合射撃会に第三四年次

参加

本年度経常費予算高四百壹円也

入所者二九名年度末生徒数六七名修了者七名

昭和五年度

三月三十一日

指導員 砲兵伍長 丹羽 一夫 辞任

指導員 歩兵上等兵 日比野静夫 辞任

三月三十一日

指導員 歩兵少尉 加藤 嘉雄 復職

三月三十一日

指導員 歩兵上等兵 長縄 進司 嘱託

指導員 歩兵伍長 日比野正衛 嘱託

三月三十一日

助手 歩兵上等兵 松波 民市 推薦

四月一日入所式及新任指導員挨拶

五月二日二年次以上五六名特命検閲使井上幾太郎閣下

の視閲を岐阜市公会堂前にて受く

十月九日午前受閲

査閲官岐阜聯隊区司令部付少佐 伊藤弘道殿

試験官 岐阜県視学 坂上清重殿

十二月十日稲葉郡東部八ヶ村聯合射撃会参加

本年度経常費予算高四百六拾四円也

入所者一三名年度末生徒数七〇名修了者七名

年度末生徒数

年 度	一年次	二年次	三年次	四年次	計
大正十五年度	一一	一一	一一	九	四四
昭和二年度	一一	一一	一〇	一三	四七
昭和三年度	二八	一一	一二	八	五七
昭和四年度	二五	二五	一〇	七	六七
昭和五年度	一三	一四	二二	二一	七〇
昭和六年度	一四	一五	一六	二〇	六五

修了状況

年 度	修了年次該当者	修了者数	修了者百分比率
大正十五年度	九	六	六六、六七
昭和二年度	一三	九	六九、二二
昭和三年度	八	八	一〇〇、〇〇
昭和四年度	七	七	一〇〇、〇〇
昭和五年度	八	七	八七、五〇
昭和六年度	一〇	七	八五、〇〇



職員進退表

職又ハ官等級	氏 名	職 名	年手当	任 命 年 月 日	退 命 年 月 日
補習学材長	横山 鳳潤	主 事	三六円	大正十五年六月三十日	昭和六、三、三一更木小学校へ転任
小学校訓導	加藤 嘉雄	指導員	六〇円	"	昭和四、三、三一岐師入学ニ付休職
歩兵少尉	田中 利三郎	"	六〇円	"	
歩兵伍長	佐々木 秀一	助 手	六〇円	大正十五年六月三十日推薦	昭和二、四、二〇辞退
歩兵軍曹	永井 善己	助 手	六〇円	"	"
歩兵伍長	丹羽 一夫	指導員	六〇円	昭和二、四、二〇	昭和五、三、三一
砲兵伍長	日比野 静夫	助 手	六〇円	"	昭和四、三、三一辞退
歩兵上等兵	日比野 静夫	指導員	六〇円	昭和四、三、三一	昭和五、三、三一
"	加藤 嘉雄	援助者	六〇円	"	昭和五、三、三一指導員ニ復帰
歩兵少尉	加藤 進司	助 手	六〇円	昭和四、四、一〇推薦	"
歩兵伍長	加藤 嘉雄	指導員	六〇円	昭和五、三、三一	昭和十二年九月迄召
歩兵少尉	長 繩 進司	指導員	六〇円	昭和三、三、三一	昭和三、三、三一
歩兵伍長	日比野 正衛	助 手	六〇円	"	昭和三、三、三一
歩兵伍長	松波 民市	主 事	三六円	昭和六、三、三一	昭和三、三、三一
補習学校長	加藤 静雄	指導員	六〇円	昭和八、三、三一	昭和三、三、三一
歩兵伍長	永井 正行	指導員	六〇円	"	昭和三、三、三一
陸軍伍長	倉知 芳逸	"	六〇円	"	昭和三、三、三一

職又ハ官等級
陸軍上等兵 仙石 久一 職 名 年手当 任命年月日
指導員 六〇円 昭和八、三、三一

退命年月日
昭和三、三、三一

昭和十二年八月以後指導員は逐次迄召
在郷軍人分会より選出し短期間で交代又交代となつたので記載をやめる

年 度	入所状況	年 度	入所状況
大正十五年度	入所者数 五五 入所者百分比 九六、四三	昭和三年度	入所者数 九一、六九 入所者百分比 八六、〇一
昭和二年度	入所者数 一一 入所者百分比 一〇〇、〇〇	昭和四年度	入所者数 九〇、四二 入所者百分比 八三、八九
昭和三年度	入所者数 二九 入所者百分比 九六、五五	昭和五年度	入所者数 九四、九七 入所者百分比 八八、三七
昭和四年度	入所者数 二九 入所者百分比 一〇〇、〇〇	昭和六年度	入所者数 九三、九二 入所者百分比 八五、八一
昭和五年度	入所者数 一八 入所者百分比 一〇〇、〇〇	昭和七年度	入所者数 一七 入所者百分比 一〇〇、〇〇
昭和六年度	入所者数 一三 入所者百分比 一〇〇、〇〇	昭和八年度	入所者数 一七 入所者百分比 一〇〇、〇〇
昭和七年度	入所者数 一七 入所者百分比 一〇〇、〇〇	昭和九年度	入所者数 一七 入所者百分比 一〇〇、〇〇

經常費予算高

年 度	手当及雑給	需 要 費	総予算高
大正十五年度	一七六円	四〇円	二一六円
昭和二年度	二一六円	三〇円	二四六円
昭和三年度	一八六円	一八〇円	三六六円
昭和四年度	一九一円	二一〇円	四〇一円
昭和五年度	二五六円	二〇八円	四六四円
昭和六年度	二五一円	二二三円	四六四円

以上の如く昭和六年までの記録は加藤嘉雄氏の筆によって遺され、これを転載したがその後の諸記録が見つからないのが残念です。

昭和十年青年学校令が公布になって、農業補習学校と青年訓練所とが合体して、補習学校の課目中に教練科が加わったことになりました。

昭和十三年には青年学校が義務制になって戦争体制が表面化し、学徒動員だの学徒出陣だのと青年皆兵の実現となりました。

戦争体制になってからは青年訓練所時代以上に真剣であったことでしょう。

終戦とともにこれ等軍国主義の諸帳簿は焼却してしまつたにちがひありません。同時に終止符を打ちました。



あつた。生徒の教科書も藁半紙に活字が印刷されている程度のもので、今日の新聞紙にも劣るものであつた。学校用の帳簿其の他のものも、藁半紙に印刷して使用し、当時の窮状を今日の物資の豊富さから考えると、全く雲泥の差があつた。

然し其の中において、教師の再教育講習或は伝達講習により新教育理念と方法を了得し、漸次教育内容を軌道にのせ、学校経営の各方面にわたり、次第に実際の確立を見るに至つた。

中学校の整備すむ

校舎はこの中学校も小学校の校舎を借用し、学校としても生徒としても、高等科の延長の感があり、真の中学校教育の環境ではなかつた。それ故にこの中学校においても、独立の校舎建築が問題に取り上げられたが、戦後の財政難、物資難の為に見送られていた。そのうちに郡内でもボツボツと独立の中学校々々の建築が始められ、本村においても、学校側の熱望と村民一同の熱意が稔り校舎建築への運びとなつた。校地についても、二、

中学校の沿革

田 中 桂

開校当時の苦難

昭和二十二年学制改革が行われ、全国一斉に中学校の創立をみたが、この改革は、我が国教育史上革新的な改革であつた。当時は終戦直後で、人心は悪化し社会的混乱と貧困の中に、ほとんど何らの準備もなく発足して、その経営は我が国義務教育上空前の困難事であつた。この困難な中において、昭和二十二年四月三日岐阜県稲葉郡前宮村立前宮中学校が創立され、前宮小学校の西校舎四教室を借用して授業を開始し、昭和二十二年五月三日村当局並に村内有力者のご臨席のもとに、開校式が挙行された。

当時職員は学校長以下六名、生徒数は三学級一〇六名であつた。教育内容も教職員及び関係者の非常な熱意と努力にもかかわらず、混乱の中にあつて模索的試行的で

三の候補地が挙げられて協議の結果、小学校の東隣を買収することに決定され、昭和二十四年八月三十一日武藤知事殿を始め多数米賣の御臨席を得て、茲に目出度新校舎の落成式が挙行された。

新校舎は二階建一棟八教室、ここに生徒達は小学校の仮校舎から移転し、新しい木の香のする教室で、新しい一人用の机に勉強出来る心情は如何ばかりであつたであろう。昭和二十五年一月十五日京都市在住の五島一二殿の寄贈により、校内放送設備が完成され、名実共に中学校としてのスタートをした。

昭和二十七年一月十八日、前宮小学校と共同して水道工事が完成さる。

昭和二十七年七月十七日、校歌制定披露式を挙げる。

前宮中学校校歌

作詞 小野木清流氏
作曲 河野 信一氏
一、自然の美景 備えたる
われらが村の 中心地
矢熊山下に そびえ立つ

学びの殿堂 前宮中

- 二、木曾の流れに 身を洗ひ
善きこと奨め 悪を捨て
社会人たる 基礎磨き
良き公民と なるぞかし
- 三、人生行路 教えたる
義務教育の 指すところ
民主日本の 人として
護国の素養 修めなん

中学校本来の性格上特別教室の整備は、各校共に着々進み、本校も校舎北側に、工作室、調理室、理科室、音楽室、会議室、職業室、礼法室、二階建一棟の建築にかかり、昭和二十九年九月八日その完成を見るに至った。然し完成までには多大の苦心と努力がある。昭和二十七年七月突如「那加中学校に統合し、当分の間分校とする」との発表があり、村民は非常に驚き直ちに村民大会を開いて協議したところ、「あくまで独立中学校とし経営してゆこう」と満場一致で決議された。そして早速に委員会を結成し、建築に向ってスタートした。ところが土地の

備した学びの殿堂に於て、社会人たる基礎を磨き民主日本の人たるべく、日々努力を続けた。

前宮中学校から統合稲羽中学校へ

終戦後数年にして、町村の合併、中学校の統合問題が起り、本村においても、昭和三十年二月十一日稲葉郡前宮村、更木村、羽島郡中屋村の合併により、稲葉郡稲羽町が誕生し、校名も稲葉郡稲羽町立前宮中学校と改称された。

稲羽町には前宮中学校、共和中学校（中屋、更木）の二校となり両校統合の気運は、稲羽町の誕生と共に高まり、昭和三十三年九月三十日両校を統合稲羽中学校となり東校舎（旧前宮中）西校舎（旧共和中）にて授業は進められた。新校舎の位置については、距離的に町の中心地点上戸町の小山に決定され、山林を切り開いて校地二一、三一五平方メートルを確保し、鉄筋コンクリート三階建二、三七八平方メートルの新校舎が、昭和三十四年八月十五日竣工を見た。昭和三十五年十月に、共和中学校時代の木造二階建校舎を、新校舎の東に移築し、更に昭和三十八年二

買収に当って非常な難関に遭遇し、一時絶望視されたが関係者の熱意と努力によって円満に解決された。かくして委員一同自転車で、或はトラックで、岐阜、大垣、武儀、山県各都市の新校舎を視察して構想を練り、関係者の会議を開くこと実に五十四回に及ぶ。これによっても難関が大きく如何に努力を要したかがうかがわれる。

昭和二十九年九月十三日、育友会役員の努力により、前宮村出身者を訪問して寄附を仰ぎ、寄附者五十四名により校内放送設備の完成披露式が挙行された。

昭和三十一年一月二十八日、育友会役員の勤労奉仕と庭木の寄附により、中庭に見事な庭園が完成し、生徒の憩いの場とし洗心庭と名づける。

昭和三十一年八月九日、渡廊下西側に手洗場完成。

月日の流れは早いもので、開校当時の苦難から十年、昭和三十二年五月三日前宮中学校開校十周年記念式典が挙行された。

昭和三十三年七月一日、木造バックネット腐朽により鉄骨バックネット完成。

かくして前宮中学校の整備は着々と成り、生徒達は完

月十一日屋内体育館が竣工した。

昭和三十八年四月一日各務原市の誕生に伴い各務原市立稲羽中学校と改称された。

昭和四十年八月七日二十五米七コースのプールが竣工し、其の後運動場の整地、土堤、校門の設置等、中学校としての偉容整い、稲羽西、稲羽東小学校卒業生の中学校として、静かな環境の中で師弟同行の姿で教育実践を進めている。

前宮中学校創立以来の学校長、管理者

年 度	学 校 長	管 理 者
昭二二	岸 善亮	小野木紋一
昭二三	同	同
昭二四	田中 桂	同
昭二五	同	同
昭二六	松尾松司	同
昭二七	同	同
昭二八	同	同
昭二九	同	同